
はちくま～巣立～

烏来巢廉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はちくまゝ巢立

【Nコード】

N0820K

【作者名】

烏来巢廉

【あらすじ】

西暦2072年――日本。

資源枯渇、経済混乱、異常気象、企業間紛争、国家間戦争、そして核。世界のあらゆる困難から背を向けた日本は地下を目指した。

地下都市「あいち」現首都として機能を移行しつつある地下世界。

新人類を嘯く『神人』

神通力の残り滓『幽霊』

太古より人間を見つめてきた八百万の神々『妖』

VRS (Virtual Reality System)

の浸透する最先端の世界で、非科学的な三者の思惑が交錯する。

終わりと始まりの『巢立ち』を描く。

序幕 「01」 或ル男ノ死

白に染まった山奥に埋もれかけた粗末な一軒家。月明かりに青白く光る雪壁はその存在を包囲圧迫し、何者かから隠すようである。

雪が止み、澄んだ空気に女性の啜り泣きが小さく響く。

笹木は石川を連れてささやかな通夜に訪れていた。

仏壇のある狭い和室に三人、そして清白な布が被された一人の亡骸がある。それは生前からは予想も出来ない程に弱々しく頼りなさに萎み、男の死を思い知らせる。

隠すように覆う白布があるだけ笹木にとって幸いだった。

「北方様……」

そう呼びながら肩を小刻みに揺らす石川。彼女に親族——恐らく北方様の息子だろう——は訝しげな視線を向けた。『北方様』とは笹木らがそう呼んでいるのであって、本名を知る親族からしてみれば奇妙な一組にしか見えないはずだ。

そして石川。彼女の若さでこの横たわる老翁の親密な知り合いと言うのも不自然なものだろう。

「父とはどこでお知り合いに？」

初老の男性は憚りながら訊ねた。石川は特に反応せず、応対は笹木が行う。事前にそう打ち合わせていた。

「そうですね……。まあここでお世話になっていた、とでも言いましょうか」

「ああ。地元の方でしたか」

「ええ」

笹木が小さく微笑むと男性は合点した。

「今お茶でも淹れてきましょう。少しでも長く父の側についていてやって下さい」

どうぞごゆっくり、と言い残して彼は別室に向かって行った。

気配が離れてから石川は口を開いた。

「まさか、本当に亡くなられてしまうなんて」

一つしかない電灯が小刻みに揺れる石川の白い項を照らした。

「人は何時か必ず死ぬ。それは我々も変わりはせぬ。北方様はそう仰っていたじゃないか」

「ですが……」

鼻声は僅かの反発を見せたが直ぐに萎れる。仏壇より流れる紫煙が憔悴を色濃く浮き立たせた。

石川、笹木らは北方様の死により精神的支柱を失った。北方様は彼らの指針であり、誇りであり、父であった。

信頼出来る強固な力と叡智を備えた北方様を慕う部下は後を絶たない。彼らもまた同じだった。その死は余りに大きい。

そしてこの件は彼らが所属する組織にも多大な影響を与えていた。

「問題はこれからだろうな」

笹木の言葉に石川が反応する。

「どういう事ですか」

「五大祖は『角端』^{かくたん}の名を継ぐ水の首席を組織外から撰定した」

「そんな!」

笹木が人差し指を口に当てて見せると石川は声を落とした。

「北方様が後継者を指名しなかった今、次の首席は荒田二位ではありませんか」

「分かっている。だが五大祖は中方様を除いて一致した。五大祖の一人、それも最も力の強い北方様が欠けた事に対して、組織はバランスを求めている。荒田二位では内部の拮抗が望めないと判断したのだ」

石川は信じられないと涙を浮かべた目を見開いた。そしてハンカチを固く握ると俯きながら思いつく人物を挙げた。

「……では、青眼^{せいがん}を迎えようと言いつく人物を挙げた。五大祖は」

「ああ。そうらしい」

「無理に決まっています。我々は青眼を幾度と訪い勧誘し、時には攻撃してきました。そしてその試みは全て破られた。それはあなたも知っているでしょう」

石川の言う通り、彼らは『哀弔の青眼』と呼ばれる同胞を組織に引き入れようと幾度と手を尽くした。だがそれら全て失敗に終わっていた。

力に差が在り過ぎるのだ。親切にも青眼が手加減してくれるお蔭で組織の被害は小さかった。それが裏目に出て組織が幾度と動いた事に当の本人は気づいていない。

組織のトップである五大祖からも一人二人襲撃した事もあった。それでも青眼を捻じ伏せる事は出来なかった。

それだけの力を保持している相手に対し五大祖は夷滅か勧進の二つしかない。何故か五大祖に放っておくという選択肢はないのだ。

「そこで子供だ。五大祖は子供を引き入れる、或いは拉致して交渉のカードにするらしい」

「子供……確か青眼の息子は力を保持していませんよね」

「諜報によれば親の七光り程度ならあるそうだ。どうやら青眼が必死に封印していたらしい。五大祖は封印の解除から編入までシナリオを書いた。のだが……」

笹木が口を閉ざすと石川は残っているだけの涙を拭いた。

「のだが、何ですか？」

「我々はそれに組み込まれていない」

「何故ですか」

「五大祖は確実に青眼を捕縛したいのだ。子供の懐柔は専ら『銀の鶏頭』が実行する。その他臨時の遊軍も我々は配置されなかった」
鶏頭の名を聞いた途端に石川は顔を顰めた。

「新入りの、しかも子供に良い所取りさせる訳ですか」

「俺に言っても困る。それにあの子の実力は確かなものと聞く。お手並み拝見というじゃないか」

笹木は石川に、そして自分に言い聞かせるように言った。

「……私達は何も出来ずに見ているしか出来ないのですか？」

しかし笹木は答えなかった。その時障子の向こうから近づく足音が聞こえてきたからだ。

「どうぞお茶です。遅くなってすみませんね」

初老の男性は目尻の皺を深めながら盆を差し出した。受け取ると湯呑みの温かさは手に心地良い。笹木が湯呑みに口をつけようとすると薄緑の液体中に茶柱が立っていた。

故俗に茶柱が立つのは吉事の兆というものがある。

石川の言う通り笹木は何も出来ない。

常に下の者達を教え導き、組織を嘗ての姿に戻そうと尽力した北方様を失った事で、理念から外れ始めた組織を留められる者も皆無。今の笹木には茶柱が神の皮肉にしか見えず無性に腹が立った。

第壹話「04」半日偽妹・壹

朝。

けたたましい電子音が家中に響く。頭を揺さぶらん程の騒音は短い惰眠から引きずり上げた。

「ったく。……目覚まし時計とか時代遅れだったの」

欠伸を混じらせながら毒づく。

最新の目覚まし機器は自然な覚醒を誘発する微細な電波発信機だったか。世の中、便利な物で溢れているのに、母はあくまで旧式を好む。お蔭で自分が時代遅れの思考だと気づくまでかなり時間が掛かったものだ。そんな事を考えながら騒音の根源に今朝の勤めが終わった事を叩いて知らせる。

体中に気怠い感覚がまとわりついていた。昨日の荷物整理は意外と堪えたようだ。のっそりと簡易ベッドから体を起こすと洗面所へ向かうと今や珍しい、水しか出ない蛇口を捻り、冷水で寝ぼけた顔を引き締める。

清潔なタオルで拭くと鏡の向こうと目が合った。

誰譲りかも判らない蒼色の大きな瞳に水の光る睫毛。少しふっくらとした唇は何か南国の果実のよう。こぢんまりと整った顔立ちは伸ばした長めの髪と相まって透き通った肌は女の子と言われても不思議じゃない。そんな異国の少女を思わせる愛らしい顔が見つめ返す。

思わず目を逸らした。

僕は男だ。正直、この童顔はコンプレックス以外の何物でもない。幼い頃から男子からは女々しいとからかわれ、女子からも可愛い、羨ましいと言われてきた。

それが苦痛か？ と問われれば確かにそうでもない。しかし、気

分の良いものではない。幸いにも見た目の特徴よりも人間性を大切
にしてくれた友人もいた。

問題は今の僕は長らく住み慣れた祖母の家から引っ越し、つまり
それは理解者のいない状況下にある事だ。新生活の中、新たに友人
を作る上でこの顔は多少なりとも弊害になる事は明らかだった。

その時、キッチンから大きな音がした。「きゃあ」と一声、直後
に物の落ちる音。昨日この家に引っ越したと言うのに何ら変わらな
い朝。普段通り仰々しく溜め息を吐いた。

「何やってんの」

「あっ……おはよう、ハッ君」

様子を見てみればキッチンの床にはペタンと座り込んだ女が一人。
切り揃えられた前髪の下からバツの悪そうに漆黒の瞳が見上げる。
まるで、触るなど言われたのに物を壊してしまった子供のようだ。

その容姿は三十路も半ばを過ぎたと言うのに変態的性質を行使し
ているのか、未だに二十代を詐称しても差し支えない。

何を隠そう、これが僕の母である。

床に突き刺さっていた包丁を抜くと咎めるように言い含める。

「何度言ったら解んの？ 料理出来ないんだから自動調理機使いな
さいって」

それを聞いた母から反論が返ってきた。

「だって今日はハッ君の入学式なんだから、こんな日くらい手作り
だって良いじゃないの。ねえ？」

そう言って母は流し台の辺りに漂う白い靄に同意を求める。靄は
何らかの反応を示した気がするが定かではない。

そんな年甲斐もなく頬を膨らます母を僕は変人として認識してい
た。

常識が通じない訳ではない。単にどこかズレているのだ。十五年
共に過ごしていても話の噛み合わない事なんて山ほどある。その上、

不器用でトロい。しかも根が真面目な性格の為に何かと実践したり、そしてその度に尻拭いをするのは僕なのである。

そういった母特有の教育の下、僕は色んな意味で鍛え上げられた。母と対照的に家事全般、小細工その他、雑用は難なくこなせる。偶に母から吹き込まれる思想に染められる事もあるが、今のところ母のような変人にはならないで済んでいた。

ふ、と時計を見ると既に八時を過ぎていた。

「げっ、時間ヤバイじゃん。とにかく今朝は僕が作るから」

「わあい、ハツ君の手料理だ」

母は何事もなかったかのように立ち上がると靄と共にダイニングへ行ってしまった。多分実はきつと母は計算高い。

結局、こんな感じで毎朝飯を作るのは僕なのである。

先程から違和感なく存在する『靄』。これはこの家、と言うより母が居る場所ならどこでも見られるものだ。

母を変態たらしむ一番の要因、幽霊である。

母はこのただの靄にしか見えない存在の真の姿を可視し、更に会話といったコミュニケーションまで出来る。

ここまで物心ついた時から側に居るのに、彼らに対し永らく疑問を持たなかった僕も不思議なものだ。勿論、世間的に生活の一部に『幽霊』の存在があるはずなく、その事実に気づいたのは小学五年生の時にやっとだった。

正直なところ僕は幽霊が何たるかを全く知らない。何故か母は幽霊について多くを語らなかった。幼心に沸き起こる興味関心に応えているようで応えない。何時も母の返答は僕にとっての幽霊に等しく、見えるのに解らない、そこに存在するのに掴めない、あつてなきに等しい答えだった。

今では僕の幽霊への対処はほぼ空気に等しい。何せ見えても母のようにコミュニケーションがとれる訳ではないのだ。特に危害を加

えられる事もなく、正直なところ居ても居なくても良い存在なのである。

だから母が多くを語らないように、その存在を知りつつも積極的には関わっていなかった。

これからもそのつもりだ。……しかし、やはりそれが見えていると言う事はつまり僕も変態に近い、のだろうか？

ふと、そう思う事が多々ある。

手早く簡単な朝飯を済ます。トーストにスクランブルエッグ、インスタントのスープ。毎度の事だが母はどうしてこんな簡単な事に苦戦するのだろう。先程、手料理だと喜んでいた母はバリバリインスタントのスープを毎日僕が作っているとでも思っているのだろうか。今まで母が生きてきたのは奇跡としか言いようがない。

直ぐに自室へ戻ると真新しい制服を取り出す。伝統的な『学ラン』。それを羽織ると正鞆を掴んで部屋を飛び出しそうになったところで立ち止まる。

忘れ物をするところだった。机のICパスと昨夜ダウンロードを済ませた生徒証を手取る。どちらも大切な、特にICパスはこれがないれば登校自体ままならない。

今度こそ忘れ物がない事を確認すると玄関に急ぐ。靴の後ろを踵で踏み履くと、これまた旧式のドアノブとやらの手を掛けた。

「行ってきます」

「はいはい、後でねー!」

一瞬にして逸る気持ちが停止する。

「まさか、入学式来るの?」

「当然じゃない。暇だし」

耳を疑った。嘘だろ。何をしでかすか想像もつかない。

「時間、良いのー?」

腕の端末を見た途端、僕は玄関を飛び出した。

朝日が眩しい。都市部は朝に染まっていた。引越したばかりの新居は小さな崖に面していて、眼下には少し寂れて煤けた集合住宅、更に奥に霞んで巨大なビル群が見える。

重厚な巨柱は互いを競うかのように高い。そんな鉄筋コンクリートの林が一つ二つと遠目に見え、日の光で反射する無数の電線に繋がれた都市部は無機質の要塞が幾つも絡み合っているようでもある。そんな眺めの良い景色に別れを告げると、正反対の山の方へ向かう。

山腹から山頂にかけて長大な巨壁が連なっている。紺の建造物が規律正しく向いているのは太陽。巨大な発電パネルの集合体に送電線が見当たらないのはその送電先が地上ではないからだ。

パネル群に向かって山の小道を登る。額に汗が滲む。やはり四月に学ランは暑い。学ランを脱ぐと小脇に抱えた。

温暖化の進んだ現在、日本は異常気象に見舞われていた。三月から十一月まで平均気温は二五℃を優に越える。それに対し十二月から二月にかけては五℃を切ってしまう。

母が子供の頃は、まだ春夏秋冬という季節が存在したらしい。日本の良き文化の一つだったけれども季節の変化が少なくなると次第に人の意識からも薄れていった。今ではその名残として長期休暇の名称に残されていたり、十二月から二月の寒期を冬と呼ぶくらいである。

山頂近くの木々の中。浮かび上がるように人工物が現れた。

雨晒しの非常口。

緑の中に塗装の剥げた金属製のドアはポツンと浮いていた。施錠はされていない。

それを荒々しく開けると下へと階段が続く。予想外の暗さに一瞬戸惑うも、滑るように降りる。思いの外、長い。

昨夜、VRS (Virtual Reality System)

で登校過程を下見したけれども、やはり仮想と現実が違う。急いでいるところも長く感じるものなのだろうか。何段の階段を踏んだだろう。ようやく下の扉に辿り着く。『カプセルポート非常口』と書かれたドアをひっ掴みながら端末を確認する。

八時半をとうに過ぎていた。入学式はまだ先だ。しかし、最初のホームルームに間に合うだろうか？

裏口らしい配線が剥き出しの通路を駆け抜ける。錆が目立つこの区間はここらで最古老だ。洩れた水分が壁に結露して湿っぽい。

ようやく自動ドアのある区画に入った。後はドアノブを回すという煩わしさはない。センサーが勝手に認識して道を作ってくれる。すれ違う人が増えていく。『ホームC-3』の自動ドアを抜けるとそこは大勢の人と作業中の無機質な動きを見せるロボットがちらほら見受けられた。

《間もなくホームC-3よりあいちO-5区行きのカプセルが発進します》

アナウンスがホームに流れる。

「うわっ！ 遅刻する！」

僕が乗るべきカプセル。これが遅刻ギリギリの時刻だ。ICパスを改札に通すとカプセルまで全力疾走する。カプセル内はもう人で一杯だ。それでもお構いなしにドアが閉まろうとするカプセルに飛び込んだ。非難の眼差しが集中する。

「すっすいません」

何とか一瞥されるだけで済んだ。

形式的な音声が発進を告げる。扉が閉まった事で中へ中へと働いていた乗客達の力が緩み、僕は壁に押しつけられた。下へと降下するのを感じても、振動は皆無。

リニアカプセル。

これが地上と地下都市を結ぶ唯一の公共交通機関だ。各区画と結

ばれたチューブ内を磁力によって浮遊、移動する。新型はかなりの速さで地下都市まで行けるようだが庶民の使う区画では運行していないらしい。

また、都市内ならどこでも通じているが、都市間となると話は別だ。地震大国である日本は地下に都市を建造する技術を手に入れたとしても、それを放射状に連結するまでには発展していなかった。

背中を押しつける力が増した。息が出来ない。〇ー５まで所要時間二十分、定員四十名と一応は定められているが誰もが無視している。VRSでもこのラッシュは再現仕切れなかったようだ。

軽く感じた体に再び重力がのしかかる。どうやら〇区まで降下し終えたようだ。この後は〇ー５のポートまで平行移動。慣性で一瞬、横向きの力が加わる。程なくしてポートに到着した。

《またのご利用をお待ちしております》

アナウンスが途絶えた途端、卵囊から孵る蜘蛛のようにカプセルからぞろぞろと人が出て行く。そして思い思いの方向の通路に消えていった。

圧迫地獄から解放された僕もまた、昨夜のVRSの光景を思い出しながら通路を進む。記憶が正しければもう少して明るい所に出る。思った通りの自動ドアを抜けると光が体を包んだ。

青い空。薄い雲。造られた空に太陽はない。壁に埋め込まれた白く輝く校舎。

僕は人工芝を踏みしめた。一瞬、自然には有り得ない蛍光の白さに目が眩む。穢れを知らない白さ。地上の建造物にはない白さ。

見とれていた自分に気づいて慌てて校門に向かう。

『あいち都立第三高等学校』

校舎の廊下は土足で入るには躊躇ってしまう程に清潔だ。さすが地下都市の都立校。恐らく毎日毎晩、清掃ロボットが稼働しているのだろう。

生徒証をもう一度確認する。僕のクラスは一年三組。二階の西口

側だ。ホームルームが始まっているクラスもあるようだ。急ぎ足で教室に向かった。

辿り着くと中の様子を窺いながら引き戸を開ける。

学ランといい、引き戸といい、この学校は世間的に時代遅れと呼ばれる『伝統』が多く採り入れられている。

実は母からアナログ思想を植えつけられた僕にとって居心地が良さそうだから、というのもこの学校の志望理由だったりする。

覗いて見ると幸運な事に担任はまだ来ていないらしい。

「わっ？」

気が抜けていたのか。安易に入ろうとした時、何か小さな物を蹴飛ばしてしまった。微かだが耳に残る高い音を発てて『何か』は転がって行った。誰かの落とし物か、と気になって足下を探してみたが遂に見つからなかった。

まあ、良い。こんな所に物を置いている人が悪いし、放っておけば清掃ロボットが回収するはずだ。

気にしない事にして誰に気づかれる事なく自分の席に辿り着くと、やっと一息吐けた。

「ねえねえ。担任誰だと思う？」

「佐藤とかだったら嫌だな、私」

「そいつ知ってる知ってる。先輩から聞いた事あるよ」

「何？ ユキちゃん達生徒証見てないの？ 確か新任の——」

「おい、式が終わったら遊び行かね？」

「あ。俺、新しく出来たバーセン知ってる」

「いいな。そこ行こうぜ」

「先田はどうすんの？」

「俺、パス。今日から部活行く」

「さすが、全国レベルの実績は——」

……。まあ、何とも騒がしいクラスである。そこら中の生徒大半が楽しそうにお喋りしている。どう考えても溶け込むのに苦労しそうな雰囲気だ。

それには地下都市の教育方針に理由がある。進学がエスカレーター式なのだ。よって生徒の八割は友達や顔見知りとなる。彼らは地下で生まれ、地下で育ち、地上には片手で数えられる位しか訪れていない者もいるらしい。

既に地下に都市建設が開始されてから三十年程。地上と地下では文化の齟齬をきたし始めていた。

そうは言ってもクラスで孤立する訳にはいかない。しかし、周りとは互いのお喋りに夢中で入る隙間もない。教室は新生活に対する興奮に包まれていた。

すっかり蚊帳の外だ。見回してみるとちらほら孤立している生徒もいる。

彼らも僕のような上の生徒なのだろうか？

「04」半日偽妹・貳

視線を巡らすと違和感がある。

何かここにあるはずのない物が見えたような、そんな感じがした。そして見つけた。

教室の後ろの窓の側、正確には校庭を模した映像を表示している窓の形をしたディスプレイの側に一人だけここの生徒ではない少女が立っている。

殺風景——とは言え地上の学校と比べた話で地下の学校の中でも洒落た内装だが——な教室に紺のセーラー服が揃う中、白いワンピースがやけに目立つ。少女はボサボサの髪を揺らしながら教室の生徒を眺めていた。

誰かの妹か何かだろうか？

その表情を良く確認する事なく隣の席で突っ伏して寝ている男子生徒に声を掛けようとする。その時、タイミング良く担任がやって来たために僕の注意は逸れた。

担任は新留という新任である。昨夜、基本的な事は生徒証で確認済みだった。顔写真を見た時の印象は真面目で頼りがいのある好青年に見えた。

実物は見た目のままで真面目そうだ。ただし、緊張しているのか全ての動作がガチガチしている。

担任はぎこちなく自己紹介するときこちなくこう言った。

「ふっ普段は生徒証を持っていれば確認は出来るのですが、き今日は、顔と名前を覚えるために出欠を取ります」

教室内がざわめく。

そりゃそうだろう。こんな事、地上の学校ならともかく効率性を優先している地下の生徒じゃあ、経験すらないのではないだろうか。

緊張している割に肝は据わっているのか、生徒のブーイングを物ともせずに担任は出欠を取り始めた。

出欠は隣の居眠り生徒で一時停止したがその後も至って普通に進み、そして僕の番。

通年の事だが僕にとって最初の出欠確認はその年を左右する一種の儀式となっている。

「十九番、さ……さんかくはちかく？」

……どうやら今年は一波乱ありそうだ。

名前の方はともかく、普通「三角」を「さんかく」と読むだろうか。そもそもこういったミスがないように事前に作成される調査書なのではないのか。

僕は惘然としながら奇異の眼差しを集めるであろう読み方を答えた。

「みすみはちくまです」

一瞬、教室内に恐ろしいくらいの沈黙が漂う。そして直ぐにそこからでひそひそと沸き立つ。

名前を間違えられる事は良くあるし慣れた。しかし直後のこの雰囲気慣れた、と言えば嘘になる。幼い頃からこの聞き慣れない名前を訂正する度に居心地の悪い空気が追撃してくる。それは今も変わらない。

——八角鷹。蜂を主食とする猛禽類らしい。『渡り』の数は今では極端に減らし、国内では絶滅したとまで言われている——。

普通、子供につけたいと思うような名だろうか。

せめてどんな鳥なのかと幼少期に調べた事がある。

そして絶句した。珍しい名前に猛禽と聞き、由来を期待した僕が悪かったのか。

参照した画像は一般に思い浮かぶ鷲鷹の荒々しさや鋭い眼光はな

かった。およそ猛禽ともただの鳥とも似つかない中途半端な容姿、中途半端な羽色、そして間の抜けた表情。まだ鳶の方が凛々しく見える。

要約すると八角鷹という鳥は「カッコ悪い鳥」だった。

その日程、自分の名前を恨んだ事はない。幼心は名前が珍しいと周りに指されるより、由来の格好悪さに憤慨したのだ。

とは言え、こんな事は常識のズレた母だからこそ為せたのだろう。つまり、あの母の息子として生まれてしまったからにはこの名前に文句も言えないのだ。

詳しくは知らないが、信憑性の怪しい母の昔話によると八角鷹は父との思い出のある鳥だという。

この名は恐らく中途新人の僕にとって友達作りのきっかけにはなるのだろう。それでも浴びせられる質問は今までどこの学校でも変わらないのだ。それを思うと何となく複雑な気持ちだ。

「えー、クラス委員長は適性検査の結果、島地に任命する事になりました」

ホームルームも終わりという時に新留の一言で教室内は再び沸いた。

てっきり毎年そういう役を任される可哀相な生徒を皆で冷やかしているのかと思いきや、どうやらそうではないらしい。

何故ならば文句を挙げる殆どを要約すると共通して「シマジって誰だ?」という事だからだ。そしてその島地とやらは隣の机に突っ伏した生徒の事らしい。

新留が生徒達の非難を躲して「小突いて起こせ」とジェスチャーするので仕方なく起こした。声を掛けても微動だにしない。机を叩いても気づかない。揺り起こそうと肩に手を置いた時初めてその生徒がかなり背の高い大男だと気がついた。

「んあ?」

間拔けな反応を示す島地の顔を拝んでやる。

大男はととてもとても二枚目でそれなのにどこか惜しい顔立ちだった。整った鼻筋に薄過ぎず厚過ぎない唇。そして薄く開かれた二重の涼しげな眼差しはどこか人生の深みを感じる。

整えていないだけであろうボサボサの寝癖を除けばどの学校でも持て囃される容姿だ。僕自身、突っ伏した姿勢から急に現れた眉目秀麗に一瞬心奪われた。それなのにどこか惜しい。

「もう放課か」

周囲の理不尽な視線の矛先と僕の戸惑いを物ともせず、島地は無造作に頭を掻き欠伸をした。

「違うよ。まだ入学式始まってないし、なんか君がこのクラスの委員長になったみたいだよ」

「そう、なのか。まあどうでも良いわ」

島地は気怠そうに凭れ掛かって教室内を見回した。

成る程、適性はあるのかもしれない。島地の顔は既に我が物顔で部下を見下ろす上司だ。

周囲の不可解な矛先によく気づいたのか島地は眉を寄せた。

「あ？　なんだお前ら喧嘩売ってんのか」

途端に不満げな視線はほぼ消えた。代わりに新留への非難が殺到する。

「先生！　どうしてあんな奴が委員長なんですか？　大体、俺は毎

年委員長を勤めて……とにかく機械の故障だ。公平に多数決で決めるべきだ」

リーダー格の男子生徒が不平を論う。あげつら

「そっそうは言っても、君は……先田か。君も機械の適性検査で委員長を勤めてきたんだろう」

相手の言い分を把握しつつ尤もな切り返し。案外、新留は噛まなければ優秀な教師かもしれない。

意外にも新留の言葉に納得したのか先田とやはら大人しく座った。「ふん。まあ、何時まで務められるかな」

先田は軽く振り返りながら島地を見た。彼の周囲の取り巻き達に不敵な笑みが広がる。

不穏な空気を残したまま新留は予定時刻までに講堂前に集合するよう指示するとさっさと教室を出て行った。

恐らく委員長となった島地に「皆を整列させて連れて行け」という指示をしたつもりだったのだろうが、新留の退室を合図に生徒達は思い思いに固まると勝手に行動し始めた。

そんな状況に動じる事なく島地は立ち上がった。

でかい。身長一八〇オーバーは確実な巨体の動きは猛獣のような印象を受ける。それも虎の荒々しさとは一味違う豹のしなやかさだ。

「いいの？ 纏めなくて」

訊ねると僕が存在にようやく気づいたように片眉を上げながら見下ろしてきた。

「ああ怠いからな。お前、出席番号何番？」

「え？ 十九番だけど」

すると島地はさり気なく手首の生徒証で生徒情報を確認する。

「三角八角。面白い名前だな。俺は島地謙致。データを見たところ……上出身か。同じ新入り同士仲良くしようぜ」

「よ、宜しく」

先程の睨みの利かせ方を目の当たりにしてからではとても仲良くしたいとは思えなかったが、敵意のない表情にうっかり気の良い返事をしてしまった。

「にしても、下の奴らも騒ぐんだな。もっとう、静かって言うか冷たいイメージだった」

入学初日でその下の奴らから冷たい矛先が向けられた事に気づいていないのか暢気に島地は教室を見回す。倣って僕も見回すとインパクトの強い大男のせいですっかり心の隅に追いやられていた疑問を思い出した。

白いワンピースの少女はまだ教室の後ろにいる。生徒が楽しそう

に話す様子を物憂げに見ていた。

「さて、と。式まで少し時間あるし俺は売店でも覗いてくるか」

「ねえ」

島地を引き止めると少女の方を指し示した。

「あれって誰かの妹か何かなのかな。どうして教室にいるんだろう？」

島地は教室の後ろを見て、呆けた顔を向けてきた。

「何言ってるんだ？ お前」

「いや、あそこに白いワンピースの女の子がいるじゃん。あの子何でここにいるのかなあって」

島地は少女の方を見なかった。代わりに僕の顔を不思議そうに見つめた。そして「ああ」と一人合点した。

「お前も一緒に売店行くか？」

返ってきた言葉に違和感を覚えた。話が妙に噛み合わない。島地はあの少女が見えてないのだろうか。

「いや、いい」

「そっか。また後でな」

「うん……」

島地は顔に良く分からん、といった表情を貼り付けたまま教室を後にする。

僕も良く分からなかった。もう一度見回すと誰一人として少女に疑問を持っていない。と言うより気づいていない。

何故か。

考えられるのは僕にしか少女が見えないという事である。しかしそんな馬鹿な事があるだろうか。

僕は少女の近くまで寄ってみた。それが幻覚なのか、別の何かなのか、それとも新手の苛めなのか確かめたかったのだ。

すぐ側まで近づくと少女は僕に気づいたのか、こちらを見てきた。そして知らない人から手を振られ、それが自分に対してなのか背後

に立つ別人に対してなのか確認するかのようには後方を見た。しかし、そこには壁しかない。

現状を理解しかねる疑問の眼差しが見上げてきた。

初対面で話をする時より緊張する。何故なら少女も緊張しているのが感じられたからだ。僕は言わんとする事を出そうと口を開け一旦閉じ、意を決してこう訊ねた。

「君は誰？」

少女の瞳が大きく見開く。何も答えない少女はじわりと次第に大粒の涙を浮かべ、小さな唇が震えている。

「おにちゃん、私が……見えるの？」

一言発する度に噛み締められた返事は聞き取り辛かった。しかし、少女は反応した。彼女は確かに存在しているのだ。僕の脳はそれを確認した。一つ引っ掛かった事と言えば返事の内容だ。「見えるの？」とは何を意味するのか。

「それってどういう意味なの？ 君はどうしてここに……うわっ！」

質問を言い終える前に少女は僕に跳び掛かってきた。華奢な見た目の割にかなり大きな力がぶつかり、僕は耐え切れずに盛大な尻餅を突いてしまった。

「待ってた甲斐があった。やっと、やっと……」

興奮した様子の少女は僕の胸の上で俯きながら肩を揺らす。

全く体重を感じない事に首を傾げながら更に視線を下へと移した時、そこで鋭く息を呑んだ。

僕の軀に少女の四肢が突き刺さっていたのだ。しかし、痛みは皆無。それどころか違和感その他何もない。それが余計に不気味だった。

こんな、こんな馬鹿な事があるか？

混乱して近くの女子生徒集団に助けを求めて初めて教室中の奇異の目を集めている事に気づいた。こちらを幾度と窺いながら「あの人『一人で』何しているのかしら」なんて言っている。

まただ。本当にこの白いワンピースの少女は僕以外の誰にも見えないのか。

「みんな、この子が本当に見えないの？」

思わず少女を両手で示しながら叫び、訴えていた。無情にも女子生徒集団は一人を除いて後退りすると異物を蔑む眼差しを僕にくれる。少し落ち着いたのか少女は不思議そうにこの状況を見守っていた。相も変わらず彼女の両手は僕を突き抜けている。

どうしてこんな事が起きる？　僕は何をした？　僕が間違っているのか。僕が幻覚を見て、ありもしない事をほざいているのか。

集団から一歩進み出た形となっている、飛びつきり可愛い女子生徒は僕が示す空間に目をやってから、ふっと微笑んだ。そして止めを刺す。

「君、面白いね」

気味悪がっている教室に柔らかな声が木霊した。

「04」半日偽妹・参

閑静な空間に眠気を催す呪文が響く。

講堂に固定された机椅子は予想以上にひんやりと新入生の尻を冷やしたが、それでも睡魔に根負けした敗者が一人二人。

式が始まった。校長の歓迎の挨拶が調節された音量で机のスピーカーから吐き出される。その調節が実に絶妙過ぎる。現に右斜め前の大男・島地は他の敗者が申し訳なさに俯き居眠りしているのに対し、足を投げ出し突っ伏した堂々の爆睡態勢だ。

変わって僕はと言うと、まるで何も頭に入らない。考えているのはただ一つ、白いワンピースの少女である。

だから入場してすぐ右手の観覧席に『ファイト！八角！』と幔幕が垂れていても完全無視したし、そのすぐ上の保護者席で周囲の目を憚らずに「入学おめでとー！」とはしゃぐ母に一瞥すらくれてやらなかった。

故意にそんな非道い事をした訳ではない。僕とてボケにはツツコミがいて初めて活きる事くらい承知している。一人のボケはただの、否、かなり異常な変人だ。

そんな哀れな母に気を配る余裕すらないくらいに考え込んでいた、と言えば少しは罪が軽くなるだろうか。何しろ気づいた時には壇上であの先田とか言う生徒が得意気に生徒代表の挨拶をしていたくらいだ。

あの少女は一体何者なのか。

一つ言えるのは人間ではない事だ。先程、少女は手足を僕の牀に貫通させた。これが明らかに普通じゃない。

やはり幽霊か？

そんな考えが頭を過ぎるが、残念な事に僕は幽霊が何たるかを知

らない。

母は幽霊について多くを語らなかったし、僕は今まで幽霊を靄として見た事しかなかった。

と、なると僕に出来そうな事は母に事情を話し、少女に引き合わせる。或いは僕自身が詳しい事情を少女に聞くしかない。

困った事に問題の母はどうやら使い物になりそうもない。普段の母なら幽霊関係に詳しい――やはり詳細を僕に語りたがらないが、恐らく精通している――のだが、今の母は負のオーラに包まれている。気づいた時には保護者席で撃沈していたのだが、僕が少しも構ってあげなかったのが原因だろう。

そもそもあの少女が幽霊だ、と言う確証はない。精神的に死にかけの母に話す前に僕が出来る事をするべきなのかもしれない。

先田の長い話が耳を右から左に抜ける中、ぼんやりとそう思ったのだった。

「おにーちゃん！　ねえ！　ねえってば！」

教室に戻ると、少女は白いワンピースを揺らしながらあっちでキヤンキャンこっちでキヤンキャン、騒がしい。

式が終わり、教室でのオリエンテーションの間中ずっと、とりあえず僕は謎の少女を完全無視した。

何としても皆の前ではこの少女の存在を認めてはならない。先程の女子生徒集団からの冷たい視線がトラウマになっている。僕はクラス内での立ち位置と言う物の死守を最優先した。

僕は地味で普通の高校生活を求めているのだ。ただでさえ女の子に間違えられる妙な容姿だと言うのに、見えない物が見える不思議系変態的変質者二代目――勿論、初代は母――なんかに決してなり

たくない。

だから僕は修行僧よろしく心を無に努め、雑念たる少女を意識の外に除外しようとした。のだが、この少女がまた喧しい。

飛び跳ねて歓んだり、僕の顔を見つめながらニコニコ話し掛けたり、反応がないと泣き出したりと表情がコロコロ変わる。

しかも、基本的に少女の躰は物に触れる事が出来ないようだが、感情が高まると一時的にそれもなくならないらしい。泣きながら暴れる少女は時折、机や僕に当たって物音を発てた。ポルターガイストと呼ぶのが適切だろう。

「頼むから止めてくれ」と言えるはずなく、僕は周囲と担任の迷惑そうな視線を集め、早速変な噂が立ちそうな勢いである。

ようやく全日程が終了し、放課。それでも僕の修行は続く。なかなか皆さん帰りません。

ちらほら欠けていくのを見守りながらジッと我慢して小一時間。そう言えば昼飯食ってないなあ、なんて考えていると隣でまた寝ていた島地がようやく起きた。

「むはっ、……放課か」

寝ぼけ眼のまま立ち上がると、島地は僕を見下ろし「じゃあな」とだけ言って手ぶらで帰って行った。悪い奴ではなさそうなのだが、今のところ会話出来た男子生徒が皆の印象の悪い彼だけ、と言うのも今後の悩み事になりそうだ。

「さて」

教室が空になった所で何時の間にか大人しくなった少女を探す。しかしまだ女子生徒が一人残っていた。

蛍光灯でかなり明るい室内は地上の学校特有の温もりが感じられない。そんな教室に馴染んでいる。そのためか席が隅っこなせいか、目立たない後ろ姿があった。

一人くらいなら何とか退場願えるだろうか。そう高をくくった僕

はその女子生徒に話し掛けた。

「何、読んでるの？」

珍しい事に女子生徒は紙製の本を読んでいる。しかも携行絶望の分厚い辞書……だろうか。とにかく時代遅れな物品を所持してる時点で僕の中で彼女の好感度は勝手に高まった。

きよろきよろと彼女が声の主を探すので僕は後ろから前に回った。そして一瞬、不覚にも少し引いてしまった。

シャッター。そう、彼女の顔面には黒いシャッターが下りていた。正確には前髪が異常に伸ばされているのだが、黒々とした艶やかな前髪は完全に視界を奪っているようにしか見えない。口まで隠れる前髪は正直、平凡たる僕の頭脳ではその利点を理解しかねます。

「……なに」

『黒いシャッター』に指摘されてようやく気づいた。どうやら僕は予想以上に前髪を観察していたようだ。彼女の何か緊張と戸惑いを含んだ固い声で我に返った。

「あつ。えつと……」

何をしているんだ僕！ このままでは尚更、不審行動の噂が広まるではないか。

幸い彼女は慌てる僕の様子を見ても動じる事がない。否、その表情が見えない事には相手の感情を読む事すら出来はしないのだが。とにかく彼女は僕の挙動を冷静に見ていた。

「……名前は」

「え？」

「……あなたの名前」

見かねたのか黒シャッターは相変わらず固い声で訊ねた。

「三角、八角」

「……」

大抵ここで妙な名前にツツコミが入るのだが彼女は無反応。学年が変わる度、毎回同じような反応に飽き飽きしていたがなないとなる

とこれがまた少し寂しい。

「……記憶した」

唐突に黒シャツターはそう言うと言僕を見上げて首を傾げた。
まさか今の沈黙は名前を覚えるので必死でした、とかないよな。

「……なにか」

「えっ？ えーっと……」

出て行け、と言う訳にもいかず、出した返答はこれだった。

「帰らないの？」

「……」

黙り込んでしまった黒シャツターは視線をぶ厚い本に戻した。

むっ無視ですか。そうですか。

おもむろ

徐に彼女は本を閉じると丁寧な鞆に仕舞い、立ち上がった。

「……帰る。さようなら」

「へっ？ あ、うん。また」

ご丁寧にお辞儀までして黒シャツターは滑るように教室から出て行った。

名前を聞くのを忘れていた。しかし、明日聞こうにも、あの様子だと嫌われたかもしれない。

地下都市は妙な生徒が多いのだろうか。しかしあの島地は地上の出身と言っていた。黒シャツターはまだどちら出身か聞いてないが、むしろ変わり者は地上に多いのかもしれない。

誰もいなくなった教室に白いワンピースが見当たらないので教室を見渡したが、どこにも影形ない。

「おかしいな。……どこ行っただの？ もう話しても良いよ」

しんとして静かな教室には微かに空調機の低い駆動音が通風口伝いに聞こえるだけだ。物音は疎か、僕が呼吸する度に発てる衣擦れ以外に人気はない。

「おい、出て来いよ」

教室を一回りしながら呼び掛けたが、やはり応えはない。

……あれはやっぱり、僕の想像の産物。幻覚だったのだろうか？

「ばあっ！」

「うわっ！」

そろそろ帰ろかという時に白いワンピースが壁から視界いっぱい
に飛び出した。一気に鼓動がアップテンポになる。尻餅を突きそう
になって机によろめく。

「あはははっ！ おにちゃん、びっくりしたでしょ」

不覚。基本的にこの少女が物をすり抜ける事をすっかり忘れてい
た。

「びっくりしてない」

「したよお。『うわっ！』って」

わざわざよろめく姿まで再現しながら少女は笑う。

「で、君は何者なの？ 幽霊？」

無然としながら訊ねると少女はポカンと口を開けながら可愛らし
く首を傾げた。

「ユーウェイ？ 何、それ。ノンはノンだよ」

この際ツツコミ所は放置して重要部分だけを拾う事にする。

「ノンって言うのが君の名前？」

「うん！ でね、アンもねノンなんだけどね、今はノンだけなの」

「アン？ 他に君みたいのがいるの？」

「ううん、とノンは小さく首を振る。」

「ノンがアンなの。でも違うの」

……？ 一人遊びなのか、以前にアンと名乗っていたのか、それ
とも二重人格なのかは問題ではない。

見た所、中学生くらいといったところだが精神的には大分幼い。
ピンポイントに質問するのが賢明だろう。

「それでノンはどうしてこの高校にいるの？」

「ふえ？ んー、ノンはずっとここにいるよ」

ずっとここにいる？

「どういう事？」

「んとね、気づいたらアンと一緒にいたの」

さっぱり分からない。ノンとアンは同一なのだろうか。

僕の周りをちょこちょこ走り回るノンを目で追いながら良く観察してみた。

小柄で痩せ気味。ボサボサで生やしっぱなしの黒髪。チラチラと胸が覗ける事からどうやら身に着けている物は白いワンピースのみ。……って反則でしょ、それ。

パツと見た限りそれは報道されている難民に混じる少女を連想させた。但しコロコロ変わる眩しいくらいのお目出度い表情と、ワンピースが染み一つない所が違う。一見貧相なのに何故か見ているこちらも幸せになりそうな笑顔の持ち主だ。

「そう言えば何か言ってたよね」

「ふえ？」

「ほら、待ってた甲斐があった。とか」

「うん！ おにいちちゃんはノンと初めての人なんだよ！」

「なっ何の」

「ノンと初めてお喋りした人」

「え」

よく考えれば、誰にも見えないから当たり前か。

「ノンね、見たい物があるの。でもねノンとアンだけじゃ行けないの。でもね誰もノン達に気づいてくれないから、おにいちちゃん待ってたの」

良く分からないが僕の協力が必要、と言う意味だろう。

「それで、何が見たいの？」

「お日様とね、お月様とね、お星様とね、お空とね、海が見たいの！」

案外普通の答えに少し拍子抜けだ。僕は額を掻いた。

「それなら見に行けば良いじゃん。ノンの躰は物をすり抜けるんでしょ」

「ダメなの」

ノンはシュンとして俯いた。

「大きいのは通り抜け出来ないの。それにノンはアンから離れられないの」

「うーん……」

ノンが人ではない事は確かだ。それは誰でも分かる。

しかし、僕は人非ざる者を幽霊以外に知らない。今日、今朝まで幽霊は靄でしかなかった。

仮にノンが幽霊だとして、何故姿形がはっきりと分かるようになったのか。それは僕に何か変化があったのか、それともノンが特別なのか。

母が何かを語るとは思えない。告白してくれるなら既にしていたっておかしくない。なんて言ったらって我が家には常に幽霊がいるのだから。

こうなれば、真相を確かめ自分を知るにはノンにつき合ってやるのが一番なのかもしれない。

「アンはどこにいるの？」

ノンは真っ直ぐ床を指差した。……下？

「こっちにいるよ」

もう、とことんつき合ってやる。

「アンの所に案内して」

「うわぁっ！」

途端にノンの表情が輝く。

「それってノンを連れて行ってくれるって事だよね。やったあ！」
元気のあり余る兎のようにノンは飛び跳ね、駆け回った。

「こっちこっち。ついて来て」

そう言っ てノンは教室の壁に飛び込んで行く。勿論、僕がついて行けるはずがない。

「ちょっと、待ってよ。僕でも行けるように案内してよ」

「ゴメンゴメン。ノン、嬉しくって」

壁から頭だけをにゅっと出したノンは正直ホラーだ。

「ちゃんとおにいちやんでも行けるように案内するから」

てへっと舌を出すノンは悪戯好きな似非天使に見えた。スキップしながら教室の扉をすり抜けていく。僕は正鞆を持つとノンの後を追った。

[04] 半日偽妹・肆

学校の区画から一旦出た僕らは隣の区画に繋がる通路を進んだ。ノンはきよろきよろと見回しながらゆっくり進む。そして時折、壁に頭を突っ込んだりした。どうやら僕が通れそうな道を探しているらしい。そうになると益々、アンの居場所が想像出来なくなった。

地下都市は地中に穿たれた巨大な空間に、何層かで形成される立体都市がそっくりそのままはめ込まれている。最下層には地熱発電所が設置され、そこから上に向かって、機密区、物資貯蔵区、室内農場、居住区、諸業区で形成されている。学校などの公共施設は諸業区に所属する。ちなみに電力は地熱の他に太陽光、風力、波力を中心に併用供給されている。火力発電はその座を併用型の発電施設に譲りつつあり、原子力に至っては息を潜めた。

そして地下都市はその巨大さ故に自体の支持が重要である。下に向かう程、その加重は大きくなる。そのために自重を分散するために隔壁で多くの区画に分け隔てられており、各区画の空間を有効利用出来ていない。

その区間の移動は幾つものルートがあるとは言え、通路を案内板通りに進めば必ず行きたい区画に辿り着く。

つまり、ノンが壁の向こう側を窺ってまでして道を探す必要はないはずなのだ。

「ここならおにいちゃんでも通れるかな」

ノンが止まっていたのは整備用の通用扉だ。

区画間には通路に沿ってパイプラインも併設されている。その整備のための物であろう。

この区画は比較的新しく、改修されて間もない。中でもこの通用

扉は作られてから一度も使われていないのではないか、と思うくらい傷一つなかった。

「ここ通るの？」

周りに人気がない事を確認しながら訊ねた。前後共に通路の描くカーブまで人影はない。

「うん」

「これ……どこに繋がってるの？」

「アンの場所」

そう言っただけで扉をすり抜けてしまった。しかし、……。

辺りをもう一度確認して人目がない事を確信すると、目立たないよう壁と同じ白い扉に手を掛けた。案の定、押しても引いてもびくともしない。

大体分かっていた事だ。整備用の扉なら整備士以外が立ち入れないようにするのが当たり前なのだから。

「開かないよ。これ」

「ええー？ 力一杯引っ張った？」

「うーん、鍵掛けられてるみたい」

「ちょっと待って……。上は？ 上、繋がってるみたいだよ上？」

見上げると通風口がある。だが、通路の高さは三メートル近い。

「無理だよ」

「もう！ おにいちゃん頑張ってよ」

僕に非があるようにノンは責めるが通風口からスルリ、と言うのは映画の中だけだ。左右の壁からも離れているし、掴む所もない。

ノンが文句を垂れている間、通行人が何人か通ったが僕は考え事をしている振りで誤魔化した。通路で考え事は少し変だが仕方がない。

ノンにつき合っただけでやる事に若干の後悔が生まれ始めた頃、ノンは「あ」と声を出した。

「下があった！」

通路の左右、等間隔に細長い孔が空けられている。排水ポンプが故障した際にのみ水が通る緊急時の排水口だ。

「まさか、ここから中に入れての？」

「うん！ こっちにも繋がってるよ」

ノンは扉から顔だけ出して嬉しそうに笑う。

「……嘘だろ」

結局、学校まで戻って今まで一度も湿った事などなさそうな排水溝に侵入した。校庭の隅にある金網を外し、中に入ると案外広い。それでも膝を突いて進まなくてはならなかったが、通路の小さな孔から連想出来る大きさではない。

頭上の孔から差す光を頼りにただ黙々と進んだ。ノンが排水溝内に顔だけ出して話掛けてきたが、それを無視した。ここからは通路に人が居るかどうかも分からない。もし、うっかり通行人がいる時に排水口から楽しそうなお喋りが聞こえてきたら、それはそれは愉快な事だろう。

ノンは不満そうに膨れっ面を見せるだけで、喚かなかったのは成長の証か。

膝と腰が悲鳴を上げた頃、ようやく先程の通用扉の下に到着した。確かに左手に排水溝の合流点があり、真っ暗で何も見えないが方向から考えて、通用扉の向こうへ行けそうだ。

ここに至って僕は長い溜め息を吐いた。一体何で僕は排水溝の中で座り込んでるんだろう。……それを言っても始まらないのは分かっている。約束は約束だ。しかし、物を通り抜けられるならいざ知らず、普通に行こうとするだけでこうも困難な目的地は一体どこなのか。

インターネットの掲示板で見た事のある噂がふと蘇る。

『地下都市の区画と区画の狭間に迷い込むと還って来れない』
ゲームのバグ技から連想された噂だろうが、少し怖い。確かに今、

僕が辿っている道順は普通じゃない。その上、通路で行けない場所に向かっているのだ。

それを思うと動くのが億劫だ。

「おにいちゃん？」

目の前にノンの疑問の瞳があった。

ここから先は暗い。僕は手首の端末に付属するライトを点灯した。
「行こう」

通用扉の向こう側に続く排水溝に入り込んだ。重い腰を上げて暗闇の進む。程なくして頭上が先程と異なり、金網だと気づいた。しかも金網の上にはノンが普通にいる。

「もしかしてこの上って通れる？」

「うん！」

「……早く言つてよ」

幸いに金網を留めている捻子は錆びて脆くなっていたのか、僕の腕力でも外す事が出来た。排水溝から這い出て整備通路に出た。見回しながらライトで照らす。

そんなに広くない。

通路は何のパイプかも分からない配管で犇めき合っていた。床に当たる金網以外は全てパイプとバルブと動いてなさそうなメーターばかりだ。否、頭のつきそうな天井に等間隔で照明がある。ただ、どこをどう操作すれば点灯するのか分からない。

どこからか水が漏れているのか、空気は重く湿りひんやりとしている。そして黴とパイプの継ぎ目の錆が臭う。

「大分古いなあ……」

改修された通路に比べてかなりお粗末な状態だ。恐らく改修事業の手が届いたのは表の通用扉までだったのだろう。

「こっち！」

ノンはか細い足を楽しげに跳ねさせながらパイプの通路を進む。

後に続きながら僕はノンが足を床に着けてない事に気づいた。よく考えると先に金網越しに下から見上げた時に視線は良からぬ方を向いていたが、その時もノンの両足は接地していなかった。

それでは足の用途をまるで為していないが、要するに彼女は宙に浮いているのだ。

幽霊……なのだろうか、ノンは。

一般にオカルトの幽霊像は足がなかったと記憶するが、浮いてるものだ。俗説に従うとすればノンは幽霊だ。但し、確証がない。

そこまで考えが至ってから僕は不思議に思った。

僕はどうしてこうもノンの正体について固執してるのだろうか。こんな事は初めてだ。……もっと気楽に構えるべきじゃないのか？

彼女が幽霊だろうが、そうじゃなかろうと関係ない。僕の前で調子っ外れの鼻歌をする心幼い少女は確かに存在し、今の所僕だけが頼りだ。

それ以上の事実が必要だろうか。

我ながらとんでもない優柔不断だな、と思い自嘲した。面に出してないだけであれこれ考えるのは今日何度目だろう。

願わくばこれ以上、僕を惑わす物が出現しない事を祈った。

なんて祈った端から『惑わす物』は容赦なく現れた。

ノンが途中で急に通路から外れた。それまで一本道、カーブもない真っ直ぐな整備通路だったので戸惑った。これ以上外れた道順を行くと本当に異世界に迷い込むのではないか。

ノンが示した人一人通るか通らないかパイプの隙間に躰を突っ込み、次なる空間に足を入れた途端に僕は目を疑った。

階段。それは作業用の代物ではない。広々と沢山の通行人が利用出来る大きさだ。左右にくすんだステンレスの手摺があり、頭上にはボロボロに死んだ電光掲示板がある。それでここが一昔前の施設だと悟った。

所々、タイルが剥げ落ちた階段を駆け降りながら、僕は興奮していた。

曇り、罅の入るアクリルガラス。左右にストッパーの外れたレールが走る巨大なチューブ。液晶の壊れた改札機は現ICの使えない旧式タイプ。

予想通りそこは廃墟と化した旧カプセルポートだった。

「凄い……！ 地図に乗ってないよ、ここ」

感嘆の息が漏れた。それは、そう、考古学者が未踏の遺跡を見つけたような不思議な感動だった。

「一体、何時の何だろう？」

振り返ってノンに訊ねる。しかし、彼女は僕の様子に苦笑いしながら首を振った。

「んー、分かんない。気づいた時からこんなんだったよ」

気づいた時から……。

「そう言えばノンてさ。その『気づいた時』って何年ぐらい前なの？」

見たところ、このカプセルポートは地下で保存され易いにも関わらず、大分荒れている。放置されてから十年以上の歳月は確実だろう。

「良く分かんない」

「本当に？」

「本当だってば！」

困ったようにノンは頬を膨らます。そして少し元気がなくなつて肩を落とす。

「本当に……ノン、気づいたらここに居て、最初は喋れなかった。言葉知らなかった。だから、学校で人を見ながら喋るの練習して」

「……ノン」

「だから、だから、……よく分かんない。ノンがみんなと違うのは分かるけど、ノンは何なのかも分かんない」

僕は言葉も選ばず思うよう話すノンを見ながら首を傾げた。

この際ノンを幽霊と仮定しよう。それ以外に候補が見つからないし、その方が考察する点で楽だ。

幽霊とは現世に何か思う所があって、死んでも魂が残留した者を言う。そして、幽霊は生前の記憶を保っているものではなかったか。だからこそ民間伝承に怨霊――即ち生前の怨みと憎しみを晴らすのを目的とした幽霊――が存在するのである。

対してノンはと言うとまるで記憶がない。記憶もなければ言葉も知らない。幽霊として現世に生まれてきたような物言いだ。まるで……。

「――ってば。ねえってば」

「えっ？」

「着いたよ」

ノンの声で我に返る。どうやらぼんやりしたままノンにつき従っていたみたいである。

「……着いたって？」

「もう！ アンのところに連れてけ言ったのおにいちゃんでしょ」

『592』

ノンが示したのは塗料の剥げかかったコインロッカーだった。

「ここ？」

「そ。この中。でも鍵掛かってるし、ノンは開けられないの」

そこまで言うてからノンはロッカーに首を突っ込んだ。

「アン。おにいちゃんが来てくれたよ。これで外に出られるね。ノン、ありがとう。アン嬉しいよ」

僕はロッカーを挟じ開けられる物がないか瓦礫の床を照らして探していた。その背でその会話、もとい独り言を聴いた。

今の言葉はおかしい。アンの応答はノンの声。否、ノンが一人でアンの応答をしていた。ノンがアンに訊ね、ノンが答えた。

拉げたパイプを見つけ、掴むと振り返った。ライトを向けると暗闇にノンのここにこ輝かせた顔が浮かび上がる。ついさっきまで無邪気に見えたノンの顔が急に不気味に見える。

「ノン……アンは、何者だ」

「アンはノンでノンはアンだよ」

キョトンとしてノンが答える。

「ノンとアンが同一ならそこには何がいる？」

パイプをロッカーナンバー592に突きつける。

「アンだよ？」

くそつたれ！ 益々混乱する。

僕はパイプをロッカーの扉の隙間に荒々しく突き立てた。怖れよりも中身が知りたいという好奇心が勝っていた。梃子の要領で抉じ開ける。

ロッカー中を手首のライトで照らすと息が止まった。心臓の鼓動が一気に跳ね上がる。

次に悲鳴を上げそうになった。いつそ叫べたら幾分気持ち楽になっただろう。しかし、僕の口からは「はあああ」と情けなく息が漏れただけだった。

中には一つの物体が鎮座していた。茶色に変色した新聞紙に半ば包まれて分かり難いが、そこにあつたのは形容し難い物体。顔がついており、全体が乾燥している。表面の殆どが激しく劣化しており、所々に弱々しくどこか儚さを感じる乳白色の骨片が食み出している。背中からは無数の背骨が浮き出し、飛び出した尾骨のせいにか小猿の化物に見えなくもない。

……それは胎児の木乃伊だった。

「これっ！ ……何で」

ノンに振り向くと痛く傷ついたような顔をしていた。どうやら僕は死体を前に思っている以上の反応を示しているらしい。死体なん

て見るの初めてなんだから当然じゃないか。ノンは泣きはしないが
俯いて黙ってしまった。

「04」半日偽妹・伍

僕は再びロッカー内の死体を確認し、近くの瓦礫に腰を下ろした。距離を置きたかった。さもないと死体から発せられる何かに冒されそうな気さえた。

「おにい……ちゃん」

不安げなノンは僕の反応に疑問と衝撃を受けたようだった。

「何で？ 嫌いになっちゃったの？ アンのこと。……ノンのこと」

「いや……」

それ以上、掛ける言葉が見つからない。

僕は顔を埋めるように手で覆った。死体を見るのは初めてだ。乾燥した物体は妙に生々しい形で残り、しかしそこからは微塵も生を感じられなかった。

正直な所、ノンが人間じゃないだけにアンもそうだと考えていた。幾つか考えていた候補もあったが、所詮それは人形とかの類止まりだった。

暫くの間、重苦しい沈黙が続いた。ノンは俯いたまま座り込み、ロッカーのアンを見つめ続けている。その空気に耐えかねて僕はやつと訊ねた。

「……その……、離れられないっての詳しく教えてくれない？」

僕の声に反応してノンは恐る恐る振り返る。

「アンと、ノンのこと？」

目に涙を浮かべたノンは酷く痛ましい。お目出度い顔が歪むところらが何かとんでもない間違いを犯したような気持ちになる。

そこでノンは今まで僕以外と会話していない事を思い出した。コミュニケーションを取った事がないのは大きな障害として感受性に影響するのかもしれない。

「ノンはね、遠くに行きたいの。でもね、アンが引っ張るの」

「引っ張る？」

「ノンが遠くに行こうとするのね。でも行けなくなるの。アンからは学校より遠くに行けないの」

縛り。拘束。戒めの抜け殻。

つまり、ノンはアンに縛りつけられている。否、アンがノンと言うのは強ち間違いではなく、あの木乃伊はノンの生前の躰なのだ。

ロッカー内に胎児の死体。経緯は定かでないがそこに棄てられたのは確かだ。何らかの方法か、偶然か、神の悪戯か、その胎児は幽霊となった。

独りぼっちの幽霊は幸いな事に移動出来る範囲に学校が作られ、言葉を知った。独り言のように喋り始めた幽霊は自らをノン、抜け殻にアンと名づけ、一人二役で会話を成立させてきた。

そして何時か出逢う自身を認めてくれる者——この場合は僕、という事になる——を待ち続けてきた。

ノンのこれまでというのはそういった所だろう。

つまり、ノンの感情は学校の生徒らの交流を見様見真似で生じた物である。……そう考えが至った途端、急に目の前のノンが人間の真似をする出来損ないに見えるようになってしまった。何か謀られたようなそんな気分になり、ノンに僅かな嫌悪感を抱いた。もう相手にする事もないじゃないかと思う。

同時にノンのそんな存在に同情する僕もいて、あり方に嫌悪を抱くのは薄情だとも思う。自我が芽生えた時に独り、と言うのはどんな精神状態なのだろう。そこでもう一人の僕が反論する。他者との交流がない時点で自我など存在するはずがないではないか。

考えれば考える程、答えが出ない。とにかく、僕は何をどうすれば良いのか全く分からず、途方に暮れていた。

放心状態の僕が次第に焦点を合わせたのはノンだった。不安げな上目遣いが僕の同情心を煽る。

ノンの願いを思い出す。

空や海を見たい、だなんて純朴で健気な願いじゃないか。それは人間でなければ望んじやいけない願いだろうか。ここで彼女を放り出す事はないじゃないか。何より、既にした約束を反古するのは僕自身が赦せない。

僕にノンを見捨てる理由なんかない。

そして僕の性根は一方的に見捨てる程に現実的でシビアな仕組みに作られていなかった。きっと、長年に渡って木偶坊とも呼べる母と過ごしてきたからだろう。後から沢山の後悔が追撃しようと結局僕は同情心から情けを掛けたり、世話を焼いたりするのだ。

「ノン」

「なっ何？」

僕の呼び掛けに怯えを見せたノンに微笑み掛ける。

「見に行こう。空と太陽と、星に月、海もだっけ」

「……ほんとに」

力強く頷いて見せる。途端に彼女の涙は溢れ出す。

初めて、漸く見つけた話し相手であり、願いを叶える希望の存在に棄てられる。一度棄てられたアンから伝わる絶望をノンも知っていたとしたら、それはこの世でどんな事よりも不安にさせる懸念なのかもしれない。

僕はもう、ボロボロ零れる涙を前にこれが偽りだという考えは浮かばなくなった。

「さて、と。こいつをどうするか……」

木乃伊を前に腕を組んだ。

ノンを地上に連れ出すと決まれば、先ず問題は干からびた胎児をどうやって携行するか、である。まさか棒つきキャンディーみたく摘んで持ち歩く訳にもいくまい。答えは単純、既に出ている。何かに入れて行けば良い。

では何に入れるのか。

僕は自分の正靴を開けて、中と木乃伊とを見比べた。

……駄目だ。流石に干物を靴に入れるのは気が引ける。と言うより、生理的に抵抗がある。変な臭いがつきはしないか。染みが出来ないか。更に余計な心配が募るのは僕が潔癖症だからという訳ではなく、後々掃除をするのが面倒臭い、という個人的な理由のせいだ。

「ノン、何か包む物がないか探してくれない？」

「ふえ？ その靴に入れないの？」

「だってなんか厭だし……」

はっ！ うっかり本音が……。

「ウエツ……ヒグツ」

案の定、ノンは目に涙を浮かべて……と言うより既に泣いている。

「じょっ冗談だよ。ほ、ほら。この靴に入れる入れる」

慌てて古新聞紙ごと木乃伊を正靴に突っ込む。小枝が折れたような小気味良い音がしたが、もう気にしない。

あああ……。きっと学生靴に木乃伊を入れた事のある人なんて僕だけなんだろうな。

それから僕らは来た道のりを引き返した。ノンは殆どの障害物をすり抜けていくから苦労するのは僕だけだが。パイプの隙間を抜ける際、靴がつかえた時は焦った。中身がかさばる分、靴が膨らんだせいだ。悲鳴を上げるノンを無視しながら強引に通った。お陰で中からまたしても小気味良い音が漏れた。

腰を摩りながら乾いた排水溝を戻り、学校のある区画から〇ー５区カプセルポートまで辿り着いた時には午後三時を回る頃だった。とっくに帰宅している時刻である。

ノンが見たいものを全部一度に見るためには海岸線沿いの防波壁に行くしかない。手首の端末機で調べると、この時間帯にここから海岸方面に向かう交通機関は少ない。帰宅ラッシュの方向と逆だからだ。一番速いルートを採っても日没に間に合うかどうか。

「ノン。今日は一旦、家に帰って今度の休日にも出直さない？」

「駄目」

即答。しかも頑とした瞳がそこにあった。

「なんで」

「わかんない。でも、今日じゃなきゃ駄目な気がするの」

「気がする、なら別の日でも良いじゃん」

「じゃあ。今日じゃなきゃ駄目なの！」

なんだそれは。

「だってさ、このまま行っても間に合うか分かんないし」

「おにいちやんが間に合わせるの！」

「んな無茶な」

実は僕が心配する障害がもう一つある。羅府型スモッグだ。今朝の大気汚染注意報はオレンジ。しかも逆転層の発生まで予報されていた。温暖化の影響で気象庁の予報は余り当てに出来ない。

とは言え、スモッグは発生しないとの予報に反する事はあっても、スモッグが発生する、という場合は大抵高確率そうなる。エアロゾルを含んだ高濃度の羅府型スモッグが上空を覆った場合、晴天でも空は霞み、霧が掛かったようになる。しかも近年の事例は質が悪く、日没後まで滞留する事もある。そうなれば空や星を……なんて無理な話だ。それだけ日本のお天気状況は気紛れなのだ。

全部お隣の大国の環境を省みない大発展のせいだが、困った事に米国が極東戦争の撤退を境に消極的になったお陰で日本は強く文句も言えない。今の日本は単独で中朝とドンパチやらかす軍事力は無い。地下開発の開始と同時に外交に消極的な日本は他国に文句を言わない、言わせないがモットーなようだ。

そんなこんなで、晴れているとも限らない今日より、日を改めて快晴を選んだ方が確実なのだ。……という事をノンに説明したのだが、対するノンは頭からクエスチョンマークを生やしたポカン顔だ。地上に行った事のないノンに大気汚染がどうかを理解しろ、と言うのも酷かもしれない。

家に帰れば母がいる。ノンが幽霊なら恐らく母も会話出来るはずだからきつと楽しい。と、家に一旦引く事の利を唱えたが、やはり今日じゃなきゃ駄目だ、の一点張り。

「だから、何でそんなに今日に拘るの」

「分かんない！ 分かんない、けど今日じゃなきゃ駄目なの」

ノンのお目出度い顔が切なそうに歪む。本日何度目かのお顔だが、僕は自分でも驚く程その表情に動揺した。

頼むからそんな顔をしないでくれ。こっちの気分が悪くなる。僕まで切なくなるじゃないか。

不思議な事に僕はノンに笑っていて欲しいと思っていた。可哀想な、同情を買う境遇を知ったせいかな？ 違う。僕はこの数時間の間にノンの様々に変化する感情に触れて、言い表し難い親しみを感じていたのだ。

「……分かったよ」

結局、明確な理由などどうでも良くなった。見られなければ帰れば良い。溜め息混じりで承知すると、ノンはパアと笑顔を花開いた。なんだか良いように扱われている気がしないでもない。それでもノンが笑うと不思議と僕も嬉しくなった。

「それじゃ行こうよ！ ホームはこっち？」

ノンはスキップを交えて駆け出す。僕はその後ろ姿を年の離れた妹を見守る兄みたく見た。微笑ましい眺めである。……と、その時我に返った。ノンは僕にしか見えてない！

辺りを見回して予想通りの状況に赤面する。

人通りの激しいカプセルポートの構内に僕を中心とした穴がぽっかり出来ている。勿論過ぎ去る通行人は僕に好奇の眼差しを沢山くれる。

赤面のまま、僕は慌ててノンを追い掛けた。

リニアカプセルはノンにとって退屈以外の何物でもなかった。リニアカプセルは区画間を繋ぐチューブを移動する。乗っている間に何かあるわけでもなく――僕としてはあった方が困るが――時間が経てば勝手に目的地に到着する。窓といった類のものもなく、変化のないカプセル内は退屈なのだろう。

直ぐに少ない乗員に悪戯を始めた。押された客は満員でもないのに圧迫を感じて訝しげに辺りを見回す。終始そんな様子を眺めながらツツコミも注意も出来ないとなると歯痒い。

しかし、他に乗客がいる限り徹するべきは無視だ。ノンの飽くなきポルターガイストはリニアカプセルを降りるまで続いた。

海岸に近いカプセルポートから今度は地上の電鉄で海岸沿いの駅を目指す。駅はポートと複合しているので直ぐに乗り換えが可能だ。

ノンは電車という乗り物を大層気に入ったようだ。発車して少しもしないうちに車窓に天日差し込む。ノンは座席に飛び乗ると膝を突き、顔を車窓に出したり入れたりした。

「うわあーっ！」

清潔感漂うモノクロの地下世界に対し、地上は鮮やかで色の機微に富んでいる。日の傾く朱色の空に無数の電線が走る。次々に通過する煤けたビル群は既に濃い影を落とし、街路は煌びやかな灯りがつき始めていた。

見たい、と言っていた空が見えると言うのにノンの興味は初めての景色全てにあるようだ。ノンは移り変わる景色に目を奪われ、流れるビルに合わせて首を右往左往させては感嘆の声を上げた。

「凄い凄い！　これが外の世界なんだね！」

「ほら、ノン。空はもう見えてるよ」

小声で教えると、ノンは更に興奮した。幸いに車内は人がなく、ほぼ独占状態だった。

夕焼けの空は見事に晴れていた。

ノンの言う通りにして正解だった。空は雲一つなく――夕焼けの

朱色が僅かにグラデーションをなしているので薄い雲はあるのだから――、遠くのビルの屋上に見える気象庁の電光掲示板はグリーンだ。

「綺麗……。あつ！ おにちゃん、あれって？」

ノンの指差す東の空に白い月が昇っていた。

「月だよ」

「うわあつ！ お月さま？ あれがお月さまなんだね！」

ノンは目まぐるしく変わる景色に目を回す事なくはしゃぐはしゃぐ。

その様子を眺めながら僕は騒がしいながらも賑やかな新生活が始まった事に心が躍る。明日から続いていくであろう生活に思いを馳せるのであった。

「04」半日偽妹・陸

異変が発生したのは私鉄に乗り換え、知多半島を目指してからだ。
った。

名古屋方面から走るこの路線はさっきまでの鉄道とは事情が異なるように乗客がドツと増えた。この私鉄の終点が太平洋を臨む内海と言う所なのだが、どうやらそこに着くまでの間に居住地が多数存在するようだ。

僕は帰宅ラッシュに巻き込まれ、揉みくちやにされた。勿論、ノンにとっては全く関係のない些事で苦勞するのは僕だけである。

あろう事か、人が増え始めた際に乗り合わせた御老人に席を譲ってしまったため、僕はこの混雑と真っ向勝負する羽目になっていた。人の群れに半ば溺れる僕は必死に吊革にぶら下がる。

こんな事なら要らぬ親切心を晒すのではなかった、と今更ながら後悔する。席を譲った御老人は二駅で降りてしまい、僕の座っていた座席は日々の通勤に疲れ切ったサラリーマンに蹂躪された。そして今、僕も人の波にされるがまま。

一方、ノンはと言うとこのさほど大きくもない鋼鉄の箱に人がすし詰めにされている様が面白可笑しいらしく、ケラケラ一人で笑っている。

暢気なものだ。僕は圧迫死寸前で胎児の干物が入った鞆を抱えていると言うのに。乗客が少ない時は気にならなかったが、こうも増えると鞆の中身が知られてしまわないか不安である。

心で愚痴を零しながら視線を手元に移して一気に血の気が引いた。干からびた棒切れみたいな手……が鞆の隙間から飛び出ている。蹂躪されたのは鞆も例外ではなかったらしい。

不味い。これは絶対バレる……！

不思議と気持ち、というものは周囲に発せられるものなのか。誰も気づくな！　との僕の願いは悉く無視され、不幸なことに近くに
いる女性が木乃伊の手に気づいた。

女性はそれが何なのか判らないようだ。そのまま視線を移してその胸に軀を押しつけている禿げおやじを睨みつければ良いものを、興味深く観察し続けている。木乃伊をきちんと仕舞いたいのも山々だが、注視されている以上、下手に動くことも出来ない。

次第に彼女の表情が固くなる。まさかね、と言わんばかりに持ち主である僕と視線が合う。

いつも通りさ。僕は何も不審な物品は所持してない。

そう心中で唱えながら愛想良く微笑みで応える。しかし逆効果だったのか彼女の返した笑みは引き攣っていた。

そして最悪のタイミングで人の群れが僕と鞆をもう一押しする。

「げっ」

手の次は頭が食み出す。からっからに乾き、亀裂の入った皮膚に被われたそれが車両の揺れに合わせてブラブラ動く。慌てて吊革を離し木乃伊を鞆に突っ込む。

それでもその女性が劣化した髑髏を確認するには十分だった。

女性の無駄に大きい悲鳴で車内は騒然となった。「あの高校生が子供の死体を隠し持っている」との報せは車内に次々と伝播し、既に周囲の大人たちは確保態勢に入っている。

「おにいちやんどしたの？」

状況を呑み込めてないノンの抜けた声で僕は停止しそうな思考をなんとか保った。

証拠は十分。ここで捕まれば最後、言い逃れは出来ない。「みんなに見えないものが見えて、その願いを叶えようと手助けしてました」と言ったところで誰が信じると言うのだろう。黙すればあらぬ疑いを掛けられ、真実を話せば精神異常者と判定される事間違いない。

次に僕が採る行動、否、採るべき行動はこの場から遠ざかる事である。不幸中の幸いか、今は駅に停車中。逃走。そう遁走だ。それしかない。

「ノン！　ついて来い！」

誰ともなく叫んだ僕を見て、周囲は瞬間身を引く。その隙を突いて僕は手近な車窓の鍵を外すと車外に転がり出た。

「なにになに？　おにいちちゃん鬼ごっこするの？」

「いいから、絶対離れないで」

直ぐ後にノンがいる事を確認すると線路上を走り出す。バラストを蹴り飛ばす乾いた音。次に向かう駅を示す電光掲示板。ホームから目を丸くして見下ろす通行人。何かを叫ぶ駅員。しかしどれも遠くに感じた。

今まで世間で言う『悪いこと』はしたことはない。何時でも僕はいい子で、法を犯した事なんて当然ない。電車の窓から飛び降り線路を走る、なんて非日常は今までの僕にはあり得なかった。

しかし、それら全てをたった今、吹っ飛ばした。

何故だか無性に清々しい気分だ。新たな境地に達したかのような錯覚を覚え、何か自分が普通とは異なる特別に変換した気がする。

根源不明の高揚感と爽快感を胸に僕は線路沿いから逸れて車道に入り込んだ。ここらはベッドタウンらしく、整然と似たような邸宅の合間を縫いながら走った。

追っ手の気配がなくなるまで。そうすればタクシーでも拾って防波壁を目指せば良い。それにしても僕が追っ手と称するこの駅員はどうもしつこい。……追っ手？

僕は自問した。果たして駅員が駅構内を飛び出してまで不審者を追いかけるだろうか。

不思議に思い、後方を振り向く。ノンの他に動く者はいない。しかし、何者かの気配がする。気配は何かが地中を這うような、そんな動きで僕とノンを追跡していた。

そこで僕は再び自問する。

僕は何時の間に『気配』なんて仰々しいものを感じられるようになったのだ?!

無意識の内に行っていた『気配を読む』という行為に僕は大いに驚いた。勿論、そんな事今までした事ないし、試した事もない。そんなものを養う訓練を受けた事も、それに連なりそうな心当たりもない。

思わず僕は立ち止まってしまった。

ノンを見つめる。判る。飛び跳ねるような活気に溢れている。ノンの気配が感じられた。これがノンだ、と躰が応えている。

「ふいー、鬼ごっこはお終いなのか?」

ノンは息を乱れさせる事がなかった。幽霊だったら疲れを見せないのも当たり前か。僕の息は荒い。これ以上駆け続けるのも限界が近い。

執拗なる気配は遂に僕らの足下にまで迫った。離れなきゃいけない。そう本能が訴えるのに躰が思うように動かない。

「なに? この感じ……下?」

身を竦めてノンが訊ねる。

「わかる……のか? この……感じ」

息が上手く調わない。先程まで走っていた事だけが原因ではない。近づく脅威に心臓が高鳴っているのだ。

「怖い。ノン怖いよ。早く行こうよ、おにいちゃん」

「わかっ……てる。けど……からだが」

全身に異様な倦怠感。筋肉が弛緩を繰り返し、躰が揺れる。蛇に睨まれる蛙とはこの事か。肝心の蛇が見当たらないが、元凶が追ってくる気配だという事は分かる。

僕らが止まった事を悟ったのか、気配が一気に間合いを詰めたのを感じた。

闇。全てを呑み込む漆黒。そして、水の音。泡の弾ける音。それらが伝わり、躰中が粟立つ。

ノンは四肢を振って距離を取る。僕は動けなかった。

「来るっ！ 逃げて、おにいちゃん！」

恐怖に上擦った声でノンが告げる。

鼓動が頂点に達し、必死に唾を飲み込もうとした時。爆音と共に気配の達したマンホールが空高く吹き飛んだ。

僕の躰が感じたのは滾々と溢れ出す水。しかし、実際は水で湿った笠を被った人のような物体が三人這い上がってきた。それは奇妙な出で立ちで日本史の資料集に載っている足軽のような軽装備の兵士である。但し人じゃない。

先ず目を引くのは光沢を放つ湿った暗緑色の皮膚である。無毛でツルリとした躰は刺激に弱そうで両生類を連想させる。その皮膚と無骨な足軽具足が対照的で精巧な模型に見えた。

首から上は化け物そのものである。赤く光る小さい両眼。皺の寄る目元。そして鷺の如く長い嘴。呼吸の度に喉が鳴り、軽く開く嘴からは鋭利な牙が覗く。手足は華奢で長く、指には水掻きのような膜も見受けられる。猫背なためにその両腕は更に長く見えた。

妖怪、と呼称すれば良いのだろうか。称するなら……河童。そう河童である。

しかしこの河童は僕が知っている河童のどれよりも邪悪で禍々しく、可愛げが微塵も感じられない。『気配』から抱いた恐怖を具現化した物と考えると妙に納得した。

河童は一匹が太刀を佩び、一匹は短弓を携え、一匹は環の小さな鎖を所持している。徐に河童が太刀を抜いて肩に担ぐ。口元を歪ませるのが見て取れた。

「これは運が良い。贅を境様に献上するだけでなく、残肴にありつけるとは」

唖れた鈍い声。知性を感じられないが粗暴さは感じられる。

僕は耳を疑った。驚いた事にその声は河童が発した。そして河童は『ニエ』と言う時に僕を、『ザンコウ』と言う時にノンを見た。

それが何を意味するのか僕には全く理解出来ない。

ノンが悲鳴を上げるが動く様子はない。ノンはこの異様な三匹を知っているのだろうか。正確に言えばこの三匹は僕らにとって無害なのか、否か。

僕の直感だけを頼りとするならば、この河童は危険極まりない。

しかしこの場合も『無知』というものが判断力を邪魔する。ノンが幽霊かどうか未だに確信が持てないように、僕は目の前の三匹について余りにも知らな過ぎる。危険だとしてその対処法すら想像つかないのだ。

この状況下、ほんの二、三秒の間にこれだけ思考を回転させた僕に誰か賞賛の言葉を贈って欲しい。しかしそれも冥土の土産だ。河童が太刀を振り上げるのが見えたが、僕は足を動かさなかった。

こんな形で死を迎えるなんて誰が予想しただろう。僕は普通に生話し、普通に衰え、普通に死ぬはずだったのだ。そう、僕はこんな見知らぬ住宅街の片隅で幽霊と妖怪に囲まれて、太刀で斬り殺される要素なんてない普通の少年だったのに。

違う、と言う声が聞こえた。ああ、そうか。そうだな。納得した。普通の少年は幽霊と話せる母親なんていない。幽霊を靄として存在に気づいたりしない。そもそもこんな状況下に陥る事すらあり得ない。

僕って本当に普通じゃないや。

僕は夕日に染まる刃が振り下ろされるのを他人事のように見ていた。

生の終焉。苦痛の開幕。飛び込む黒い影。僕と太刀の間に何かが割り込んだのはその刹那。僕は尻餅を突かされ、太刀は獲物に届かず黒い影から伸びた腕に阻まれた。引き締まり、筋の張った剛腕は素手で刃を握り締めている。肘まで伝った赤黒い液体は滴り落ち、僕の頬を朱に染めた。

突然の乱入者に驚いたのは河童も同様。太刀を手放し、跳び退る。赤い眼球が忙しく蠢いた。

「きつ貴様は！ どうしてここにいる！？」

河童の叫びは金属音の如く耳に響く。そして両者はまるで見知った関係であるかのような口振りだ。乱入者は僅かに答えた。

「この子は我が主の子息である」

「なに！？」

僕もその言葉に驚き見上げた。『子息』が僕を指すならば、『我が主』は母という事になる。

黒い影は長身の男だった。顔が見えないが、先ず目が行くのは髪を剃り落とした頭。揉上げだけを長く伸ばし三つ編みにした独特の髪型だ。兜巾を被り、黒い法衣に身を包んだ姿は時代劇でありそうで、違和感の拭えない奇妙な服装である。

山伏、と言うには黒の法衣がおかしい。他にも杖のような物を持っている気がする。

御坊、と言うには余りに漂わせる雰囲気は暴力的過ぎる。確かに香を焚き付けたと思いき芳しい法衣は寺院を連想させるが少し違う。

黒坊主の言葉に一瞬たじろいだ河童は持ち直そうと言いつ返す。

「ふんっ。寝言は寝て言え、くそ狐。青眼の息子が鬼ではない事など誰だって承知の事ではないか」

「真実である」

「黙れ。如何に貴様であろうと三人相手では分がなからう。我ら境水族を舐めてもらっては困る。さあ、境様に献上する贄だけでも渡して貰おうか。納得行かぬならその、滓はくれてやるよ」

今の河童の言葉、理解出来た部分は殆どない。但し河童が強気に話す割に、黒坊主が優勢だとは感じた。なんと言っても残り二匹の河童が既にマンホールへ逃げ込み、そして太刀を手放した河童はそれにも気づかずに虚勢を掲げているのだ。

「おい！ もう退こう」

マンホールからの仲間の声で河童は一気に慌てふためいた。ようやく自分の状況に気づいたようだ。

「お、お前ら。儂が一人で頑張っていたというに何をしておる。出世の好機ではないか」

「無理だ。儂らじゃ奴に敵わん。あいつは噂に聞く『はぐれ狗』だろう？ それに奴が関わったせいでどちらにしろこの件は境様と青眼の問題だ。沙汰は境様にお任せせれば良い」

「しかし、」

「儂は死にとうない」

そこでマンホールから気配が消えた。仲間が去った事で更に焦る河童は地団駄踏みながら小さい赤目をぎよろりぎより動かし、僕、ノン、黒坊主と見回した。「覚えてろよ」とくぐもった声を残し、河童はマンホールに消えてしまった。

「04」半日偽妹・漆

河童はたった今までいた所に水溜まりを残し、気配を消した。

坊主は少し離れた草むらに転がっていた五〇キロはあろうかという蓋を片手で持ち上げると、太刀をマンホールに放り、蓋を戻した。そして刃を直接掴んだ掌を舐めて、僕の方を見た。

坊主は不思議な目をしていた。白目がない。腫れぼったく切れ長の凶悪な目つき。小さな瞳孔にオリブオイルのような柔らかい光を放つ金色の虹彩。狐、あの河童は彼を初めにくそ狐と呼んだ。正にそうだ。狐が人に化ければこんな目だろう。

何だろう、この感じは。

今の状況を把握する事に精一杯の僕の思考は目の前の奇妙な男に不思議な印象を抱いた。畏怖のようで安心する。親しみのように隔たりを感じる。

僕は彼に会った事があるのだろうか。

「あの……えーっと。ありがとうございます」

こういった場合、先ずは感謝すべきだ。何故、河童が出てきたのか理解出来ずとも救われた事に違いない。

「ここから消えろ」

「えっ？」

やけに素っ気なく言う。助けてくれた割に冷たいじゃないか。

坊主は鼻を動かしながらどこか向いていた。

「直に警察が来る。誰か通報したのだろう」

「わ、わかりました」

よく考えればその通り。道路の真ん中で爆音と共に河童が現れれば住民の一人や二人、気づくはずである。

「ノン」

「おにいちちゃん、早く！」

軀はもう普通に動かせた。ノンの所に駆け寄ると彼女はまだ怯えている。その視線は坊主に釘づけのままだ。

そう、僕も感じる。河童程大きくはないけれども、彼は人と違う『気配』を感じる。人じゃない。が、しかし僕らの恩人でもある。一人放っておくのは気が引ける。

「あの良かったら僕らと――」

振り返った時にそこには水溜まり以外、何もいなかった。

「早く！」

急かされるまま僕らは大通りに出てタクシーを拾い、海を目指した。

「こんな時間に防波壁なんて何用だい？」

タクシーの運転手はお喋りな男性だった。それもそうだろう。今や無人タクシーなんて物がある御時世、この職をするのは趣味みたいなものだ。きっと人と会話する事が好きなのだ。

「海が……。今日は空が澄んで綺麗じゃないですか。だから海と星が見たくて」

「ほお。やけに趣深い事を言うじゃないか。下の子かい？」

ミラー越しに目が合う。穏やかな優しい目だ。年齢は良く分からない。

その眼差しは幼い子供を見守る老人のような印象を受けるが、漂わせる雰囲気は若々しい。それでいて落ち着いている。

服装は制服でもスーツでもない。ヨレヨレのシャツにカーゴパンツ。車体に『空席』のランプがついていて、辛うじてタクシーと分かる。

いくら個人タクシーとは言え、この格好は……。

「いえ、生粋の地上っ子です」

「そうかい。下の生まれは最近じゃあ空を見に行くツアーなんか組まれるくらいだと聞いた事があったものでね。偶に言うじゃないか、地上懷古だっけ」

何が可笑しいのか彼は肩を揺らして笑った。ノンは静かに外の景色を眺めている。

「海を見に行くんだ、どうせなら砂浜を見たくないかい？」

「砂浜……があるんですか？　この辺」

海水面の上昇に伴い数を減らした日本の砂浜は、更に襲い掛かった異常気象の高波に洗われ、その殆どが消失していた。防波壁が続く趣もクソつたれもない日本の海岸線において『砂浜』は貴重なものである。残っているとすれば名が知られているはずだ。

「昔からここらは有名な海水浴場があったんだけどねえ。今の子は知らないか」

「あ……いえ。僕、昨日愛知に引っ越してきたばかりなんです」

ミラーに映る目が丸くなる。

「それはまた慌ただしい観光だね。見たところ普通の学校帰り……でもないか」

運転手の目が一瞬、ノンの方向を見た。……気がした。まさかね。

「行き先をその浜に変えてもらっても良いですか」

「分かった。裏道使えば直ぐだよ」

砂浜には本当に直ぐ到着した。タクシーは狭い空き地に止まった。

「その林を抜けたらあるよ。待っとくから行っておいで」

「ありがとうございます」

車を降りると地面はもう砂が大部分を占めている。運転手の目が気になるので声を掛ける事はしなかったが、ノンもしっかりついて来た。

すっかり暗くなった林の中にぼんやりと白い看板が見える。『海水浴場　すぐそこ』と書かれたそれは浜が近い事を教えてくれる。なる程、確かに塗装の剥げかけた文字は歴史を感じさせる。と同時に今の訪れる人の少なさを感じさせた。

振り返るとタクシーは隠れて見えない。もう話しても大丈夫だろう。

「いよいよ残るは海と星だね、ノン」

「う、うん」

ノンは俯き加減でトボトボ歩く。何となく元気がない。ノンのキヤラから考えて、ここは「うん！ワクワクするーっ！」とでも言いながらスキップしても構わないと思うのだが。

「どうしたの？　浮かない顔して」

「えっ？　……。別にー。そんな顔してないよ」

無理矢理笑うのが僕でも分かる。

何か不安な事でも……。さっきの運転手か？

それともあの河童と坊主頭の事か？

河童と坊主の件は一切が詳細不明だ。考えるだけ無駄というものの、僕の頭が出来そうな事と言えば彼らの存在を認知する事くらいだ。母なら何か知っているのかもしれない。何て言ったらって幽霊も妖怪も分野を同じくするオカルト。存在がオカルトな母ならば或いは。

ノンが黙り込んだために僕らは沈黙を維持しながら進んだ。程なく林を抜ける。

「ーっ！」

眼前に言葉が出ない程の美しい浜辺がーとまではいかないものの、砂浜に打ち寄せる小波を前に僕もノンも沈黙を継続させた。

日没後。空は海と溶け合い混ざり、そして時折の白波が二つを分離する。月は明るさを増し、灰色の浜辺を鈍く穏やかに照らす。

視線を巡らせばここが防波壁に左右を護られている事に気づく。二つの長大で鈍重な守護者。その間に高波一つで消えてしまいう

な、猫の額くらいの儂い砂浜。月明かりが照らす廃墟に見紛う海の家がその儂さを一層際立たせる。

海はそんな砂浜を小さな小さな波で優しく優しく撫でる。引いては寄せ、寄せては引く。繰り返し単調に、偶に調子を崩して。それに応える喜びのように波で動いた砂は摩擦と衝突の音を奏でる。こんな音はタクシーを駐車した空き地には聞こえてこなかった。背後の林は差し詰め人目を欺く結界か。

ここは全てに愛されている。自然にも人工にも。周囲のモノ全てがこの小さな砂浜のためにあるようだ。

それだけに自分が急に別世界に迷い込んだ異端の存在に思えた。しかし不思議だ。深呼吸して夜空を見上げると、少しずつだが僕もこの空間に溶け込んでいくように錯覚する。

「座ろっか」

ようやく口を動かし、吐いた言葉はこれだけだ。僅かに浮いているノンにとってその行為はさして意味などないのは解っていたが、そう言っていた。ノンも素直に体育座りで尻を砂上に任す。

砂浜は若干湿っぽく、ひんやりした。

「綺麗だ」

口から零れた言葉にノンが首を傾げる。

「僕、砂浜見るのは初めてなんだ」

「そうなんだ」

相変わらずノンはどこことなく元気がない。肉体的に疲れないとしたら気疲れしたのか。

僕は大の字に全身を砂浜に委ねた。

夜空は無数の星を散りばめ、彩られていた。

「ノン、上を見てごらん」

ノンは直ぐに星を見なかった。困惑を浮かべる。

「ほら、願い事の最後だよ。ずっと見たかったんでしょ」

「う、うん」

おずおずとノンは僕に倣った。

「……凄い、綺麗」

大都市から距離があり、しかも気象条件にも恵まれた。こんなにはっきりと輝く星空は何時以来だろう。

月の周りの取り巻きは控え目で、目を凝らさないとよく見えない。しかし、他の星達は皆、誇らしげに自己主張する。明るい星。暗い星。大きい星。小さい星。白い星。青い星。赤い星。黄色い星。

「おにいちちゃん」

「どした」

「ありがとう」

「ん」

気のせいだろうか。ノンが泣いている気がする。星を堪能していた視線を移すとノンはこちらに向かって正座していた。

「どうしたの改まって」

心なしかノンが薄まって見える。遠くの防波壁がノンを通して見える。まるで本当にこの空間に溶け込んでいくみたい……。

僕は飛び起きた。

「ノン、その躰……」

「ノンね、何となくね、気づいたの。お願いを全部かなえたらおしまいって」

「おしまいって」

「何となく。何となく、おにいちちゃんとはお別れしないといけないって。だからここに行くのは少しイヤだったの」

何言ってるんだ？ 余りに展開が急過ぎやしないか。

「お別れって、何言ってるんだよ。また来よう。ここに。二人で」

思わず叫んでいた。しかしノンは小さく首を横に振る。

「だからさ、さよならって言わせて」

勝手に話を進めるな。他に何か方法が、方法が……思いつく訳ない。その間にもノンの躰は透き通っていく。

「おにいちちゃん、本当にありがとう」

「そんな事言うな！」

僕は目を逸らした。

しかし自問する。本当にこうならない事を予想していたのか？
幽霊とは何なのか。熟考すれば予想出来る事じゃないか？

「……さよなら、ノンのはじめてのおにいちゃん」

「だから！ そんなこ——」

怒気を露わに顔を上げる。

は？ 何だよ、これ。

突然過ぎて僕の思考は停止した。それを再開させる要素もない。
たった半日で身に染み着いた、「おにいちゃん」と呼んでくれる
者はもう居なかった。

それから新居までタクシーを使った。

あれだけ喋っていた運転手は道中一言も発さず、車内はずっと沈黙だった。知らない街並みをただぼんやり眺めた。帰っているのは分かったが経緯がはっきりしない。僕は覚え立ての住所をちゃんと
言えたのだろうか。

料金は生徒証のおサイフ機能を使った。表示された四桁の羅列に
さほど驚く事もなく、それだけ僕は漠然とした意識のみでタクシー
を降った。

「また乗ってくれよ」

運転手は柔らかく微笑むと行ってしまった。

見上げると二人で暮らすには大き過ぎる家だった。本当に住所を
言えたようだ。尤も、今住所を思い出そうとしても出てこないのだ
が。

灯りが一部屋だけ点いた我が家を見て小さな不安が生じた。

こんな時間まで帰らない僕を母は心配しているのではないか。否、

それ以前に僕は入学式で母を撃沈しなかったか。

腕の端末を見ると午後八時半を回り、もう九時前だ。

「ただいま」

鍵が開いていた事に少し驚きながら玄関で靴を脱ぎ、ダイニングへ向かった。扉を開けると母はこちらを見ながら待ち受けていた。

「ただい——」

「お腹空いた」

「……え？」

「お腹空いた！ ハッ君遅い、お母さん待ちくたびれたー」

帰りが遅い事を叱責されるとは予想通りなのだが……飯か。

「今作るから待って——」

台所に入った途端に固まる。焦げついた鍋。水浸しの棚。開きっぱなしの冷蔵庫。そして得体の知れない物体を収容した自動調理器。

『いつも通り』母が台所を荒らしたようだ。

「ごめーん。一応、『料理』するつもりだったんだけど失敗しちゃった」

普段はここで我慢しなきゃつっこまずにはいられないのだが、今は違った。

「直ぐ作る」

その後展開した暗鬱な食事を破ったのは母だった。

「で、何かあったの」

「何って」

「シッフ。見れば分かるよ。ハッ君の事はお見通し」

母は僕の頬を見つめ、廊下への扉を見て、そして笑った。一瞬迷って僕は訊ねた。

「……母さん、ってさ幽霊と話せるんだよね」

「まあね」

「て事は詳しいんだよね、幽霊の事」

「ん」

「今日さ、実は学校で幽霊に会ったんだ」

「うんうん。詳しく聞かせて」

僕が入学式以後の顛末を話す間、別段動揺する事なく母は何時も通りだった。

それが少し意外だった。

今まで見えなかったものが急に見えても不思議じゃないのだろうか。それとも母にもそんな経験があるのだろうか。

・
・
・

食卓に胎児の劣化した乾燥死体が鎮座する。正鞆に入ったままだった『アン』だ。そんな物を挟み、母と食事するなんて想像出来ただろうか。

河童と坊主に関しては何も言わなかった。今思い出しても実感が湧かない。あまり認めたいとも思えない。恐怖と混乱でしかなかったあの場は気が動転していたし、夢でも見ていたのではないか。

「――それでノンって女の子は、その、僕のせいで消えてしまったの？」

一番聞きたかった事。あれは幽霊だ、と割り切ろうとしても出来ない原因。それは自分から湧き起こる小さな痼りのような罪悪感だった。

「まあまあ、そう気負わないの」

暢気な反応が僕を逆撫でする。僕はこんなに悩んでいるのに。結局、今まで通りはぐらかすのか。

「そうね。幽霊ってのはね、そんな存在なのよ。勘違いしてるみたいだけど、ハッ君がした事は何も間違っていないよ。むしろ感謝し

てたんでしょ、その子」

僕は自分の聴覚が正しく作用しているのか疑った。初めて母が幽霊について二文以上用いて語った瞬間だった。

「でも、消えてしまったんだよ。急に」

「だから、そういうもののなの。幽霊はね、生前の思いや願いつまり『素懷』を抱いて存在してるの。それを叶えるために存在してるの。幽霊は素懷を全うしたら『遡界』するのよ」

「ソカイ？」

首を捻ると、母は湯呑みに指を突っ込み、水で机に漢字を書いた。「幽霊ってのはね、何時か消えるものなの。だから素懷を全う出来ない幽霊もいれば、素懷自体を覚えてない幽霊もいる。素懷を全う出来なかったら遡界も出来ない。一般的に遡界は皆したいものみたいね」

どこの一般論だよ。

「だから幽霊の素懷を全うするのを手伝って、遡界を見届けたって事はいいことなんだよ」

微笑みながら母は締めた。

「そのノンって子は幸せなはずよ」

「……」

求めていた答えはこれかもしれない。これじゃないかもしれない。母の説明は納得する正論に聞こえる。

「そもそもどうして僕は急に幽霊が見えるようになったの？」

そう言ってから室内に何時もいる幽霊達が見当たらない事に気づいた。

「そうねえ……分かんない」

「は？」

「やっぱあれかな。お父さんが幽霊だから中途半端に変な能力がついちちゃったんじゃない？」

「あれって本気で言ってたんだ」

「へ？ ふえくん、ハッ君信じてなかったのお？ 私と靖さんのら

ぶすとりい」

「当たり前でしょ。あんなメルヘンな話、誰が信じるか」
泣き顔を作る母に反論する。

幼い頃から靄として幽霊は見えていた。その理由を母に訊ねると返ってくる決まり文句が『ハッ君のお父さんは幽霊』である。

最初は信じていた。幼い僕には目の前の靄を説明出来なかったからだ。次第に成長してそれが母の作り話だと思うようになった。

父は僕が生まれる前——正確には母のお腹に宿る以前に——死んでいる。事故だった。

父は少し変わった人間でガソリンエンジンのバイクをこよなく愛するスピード狂だった。とにかく無謀でバイクに乗ると後先見えなくなったと言われている。最期も雨が降っている中、山道を猛スピードで爆走。カーブで曲がり切れずに崖へとダイブ、全身を強打して即死だったらしい。

自業自得である。自分の父親とはいえ情けないというか、馬鹿みたいな最期というか。とりあえずこの話を聞いた時、幼心は「ぼくのお父さんってバカだったのか」で納得していた。唯一の救いは獣医だった事だ。馬鹿ではあるがお勉強は出来たようである。

さて、母の話でメルヘンになるのはここからだ。当時十九歳だった母はこの頃には父と結婚していた。但し父が事故死した際は子供がいなかった。僕は生まれるはずがなかったのだ。

傷心の母は自室に籠もり、食事も水も摂らず、風呂にも入らない。祖父母は相当苦勞したと言っていた。

母も自殺を考えた頃、父が幽霊として母の許に帰ってきた。母は死ぬ程喜び、二人は一夜を共にした。父は満足そうに成仏し——さ

つき知った言葉を借りれば遡界したのだろう——、気づけば母は妊娠していた。こうして僕は生まれたとさ。めでたしめでたし。

……さあ、今振り返ってもツツコミどころ満載である。幽霊と人間が子を成すなんてあり得るか。母ですら幽霊には触れないのだ。

母は父が一物のみ実体化したと抜かした。

ではそれは認めよう。今日初めての経験で、幽霊でも一部分のみ実体化する事があり得るとノンが証明してくれた。では子種はどう説明するのだ。幽霊の一物から子孫汁が噴き出るとでも言うのか。

ついこの間まで僕が至っていた答えは『母に別の男がいた』という事だ。しかし、困った事に表向き母は父を溺愛している事になっている。そんな母に指摘したら何が返ってくるか知れたものじゃない。この疑念を心に秘めたまま、僕は母の昔話を聞き流してきた。そして今、僕が幽霊を可視するようになったこの期に及んでこのメルヘン百パーセントの『らぶすと〜りい』を信じろと言う。

幽霊が見える変態性質の母と幽霊になった父親。二人の子供だから僕もそれに近いが、しかし中途半端な能力を受け継いだ。母の下手くそ理論でいくとこういう訳らしい。

訳分からん。それに幽霊ってのは想像以上に『人間』っぽかった。知らずと愛着の湧いていたノンは急に消えたのだ。それを「そういうもののなの」と説明されてもしっくり来ない。

しかし……。母にこれ以上の説明を求めたところで困らせるだけだろう。十五年ぼっちの経験だが、それがそう忠告する。

溜め息を吐くと母も察したのか立ち上がった。

「詳しい事は彼が説明するわ」

てつきり一人にしてくれるのかと思えば廊下への扉を開き、何か

を招き入れた。何かと言うのは人でも幽霊でもなく、その空間に何も存在しなかったからだ。

「……彼？」

微かな衣擦れ音がしたかと思えば、目の前に体格の良い坊主頭が現れた。金色の虹彩、小さな瞳孔。特徴的に編み上げられた揉み上げ、つるつる頭にちょこんと載った兜巾。そして黒い法衣。夕方と違うと言えば袈裟を着けていた。

その瞬間、僕の全身を水の音が駆け巡る。河童の皺一つや噎れた声、坊主の瞳の鮮やかさにノンの悲鳴。全てが鮮明に思い出せる。そうだ、認めたくないがあれは本当にあった。ただ、認知しようとして直後にノンが消え、出来なかったのだ。

「あ、あなたは夕方の……」

「……」

坊主頭は何も反応しなかった。

「明日から何日か玄を貸すからその間に色々と学びなさい」
母は笑顔で『クロ』と呼ばれた坊主の肩に手を置いた。

「は？　　いいや、この人何なの？！」

「え？　　もう会ってると思ってたんだけど」

「いや、会ったは会ったけど……」

「彼はお母さんの、んー……ボディガード？　　まあ、詳しい事は明日にでも玄に聞きなさい」

僕は食卓の食器を左右に退けると頭を抱えた。

何かどうなっているのやら。僕には理解出来ない。しかも母は説明放棄宣言。

誰かこの状況を説明してくれ。おつむの弱い僕でも理解出来るように単純明快、的確に頼みます。

「ダメだ」

僕は力なく立ち上がった。頭がパンクしそうだ。今日一日でどれだけの非日常を経験したか。

「風呂いってくる」

「そうね。疲れてるみたいだし、今日はもう休んじやえ」

「そうする」

「あっ、ハツ君」

「何？ もう今日は幽霊とかはお腹一杯」

「ほっぺたはちゃんと洗うんだよ」

「？」

手の甲で頬を拭うと赤褐色の乾いた血がこびりついた。

間幕 「04」主ト下僕ノ談話

「ええ、そうです。本当にお騒がせしました。……いえ、力を貸せる機会には全力を尽くします。ええ、では」

八角の母・真由美は電話を切った。椅子に腰掛けると手足を放り出し、眉間を押さえる。

これで少なくとも彼女は警察に謝罪するという屈辱は避けられる。しかし、現在のクライアントに貸しを作ってしまった。約束の報酬は減額されるだろう。

滞りなく進んだ会話の一部始終を眺めていた玄は「お見事」と呟いた。幾度と誰が見ても変幻自在の彼女には感嘆させられる。

その玄を真由美は睨みつける。ついさっきまで息子と話していた『母親』からは想像も出来ない程の焦燥が顕れていた。

「その手は？」

真由美が顎で示した玄の掌は夕刻の河童との対峙の際に負った切創で朱に濡れていた。

「川の神が彼に気づいたようで、やむなく」

「傷を見せなさい」

ふんぞり返って座る真由美に玄はそっと腕を差し出した。傷は骨まで達している。が、彼女はこの程度の傷の治療に慣れている。

「哀れな狗っころに癒やしを」

真由美の腕を象った掌から澄んだ清水が染み出る。溢れ伝って垂れた水は傷に注がれ、次第に塞いでいく。見る見るうちに傷は塞がり、瞬く間に完治した。

そんな奇跡を目の当たりにしても二人は全く動じる事がない。二人にとってこの治療法は出会ってから当然のように行われてきたからだ。

「忝ない」

「情けないわね。それで護衛のつもり？」

「下手に力を行使すれば敵対と受け取られかねん」

「川の一つや二つ、干してやればいいのよ」

真由美の言葉に玄は片眉を上げる。この発言は普段の彼女に比べ、余りに過激だ。

「哀弔の青眼とも呼ばれる者も子が関われば母親か。情けを掛けるどころか滅ぼそうとは」

「黙りなさい。親が子を思っただけが悪いと言うの？ あの子に手を出すのが悪いのよ」

「まだ挨拶周りもしていない。獲物と思われても致し方ないだろう」「分かってる。……明日、木曾様にはご挨拶に行く。この辺りは拮抗していて神は少ないみたいだし。玄はいざこざのあった境様を任せるわ。『肴』でも持って行けば陳謝として成立するでしょ」

「彼はどうする」

玄はバスルームの方を見た。人外の彼は壁の向こうを察知する事も可能だ。八角が湯船に浸かって既に十五分を回っている。

「今まで通り、関わらせないで」

真由美は八角に自分と同じ世界で生きる事を望まなかった。

母親は息子が可愛いものである。女手一つ育て、見守ってきたなら尚更だ。危険な要素は全て取り除かなくてはならない。真由美の考える八角にとってのそれは幽霊や妖といった人外の類である。それが彼女のやり方だった。

「それはさすがに無理というもの。既に彼は覚醒している」

「だから、……その件は任せる」

「神の協力と庇護を受けるなら彼を連れて行かざるを得まい。穏便に事を進めるなら謁見させるべき。神は縋る者なら疎かにしない」

「それはただの人間だったら、の話でしょう」

「玄は立ち上がりとする真由美を押さえた。」

「あなたは幼少期を神の居ない土地で育った。否、あなたより弱い

小物しか居なかったと言うべき。だから根本的に『我々』の流儀が欠落している。どうか今回は彼の同行を許されるよう」

反抗的な下僕を睨み、しかしそれが最も無難で有利に話が進む事を知っている真由美はやむなく同意した。

「……分かった。今回だけよ。あの子に何かあったら、ただじゃ済まないわよ」

「承知」

齒軋りと共に真由美は拳を卓に叩きつけた。

「大体、何でハチの神通力が覚醒すんのよ?! あなたが封をして私とヒメコで印をしたじゃない。ヒメコの鬼道を織り交ぜた封印を解ける奴が存在するなんて聞いてない」

「高々私は二百余歳の若輩者。彼の方が博識だというのに彼以上の者の存在を知る由もない」

「そういう事を言ってるんじゃないの。どうしてハチが丹田を持っている、と解除した奴に知られたのかって事よ」

「それは、――」

八角が神通力の源である『丹田』を所持している、と真由美が知ったのは彼を出産した直後であった。

本来、丹田を持った人間は『封』と呼ばれる、溢れる神通力を抑制した状態で産まれる。しかし、八角は封がなされてなかった。言わば蛇口が開きっぱなしの水道のように神通力を放出していたのだ。

真由美は直ぐに対処した。玄が封を施し、幼少からの友人である姫御子の協力の下、その丹田に印を捺したのである。

破られるはずも、八角の丹田が知れ渡る事もないはずだった。

しかし今の八角はそれが解除されている。何者かの手が加わっている事は明らかだ。手が加わるという事は、当然、丹田所持の事実が漏れたのである。

「朝は何も問題なかった。それなのに入学式の入場の時にはもう覚醒していた。これが何を意味するか分かる？」

既に真由美は事態を予想していた。確認するように玄を見据える。

「工作した者が生徒に含まれると申すか？」

「あなたはどよう見るの？　そのためにハチを追わせたんじゃない。教室にも行ったんでしょ」

「特に怪しい者も力もない。普通の生徒達でした」

「『組織』の線は？」

「分かりかねる。外部者が関わっている可能性もある中、学校内だけに絞るのは性急過ぎやしまいか」

「分かってる。そのくらい分かってるってば」

髪を掻き上げて眉間に皺を寄せる真由美を見て、玄は一抹の不安を抱く。普段拔かりない彼女は息子が関わると本当に危なっかしい。全てが盲目となる。任務に措いて信頼の置ける主ではあるが、やはり脆い。

息子という宝を手に入れた代償としてそれが弱点となっているのだ。

「とにかく今はこの地域での地盤確保を優先。あなたはハチを絶対に封の仕方を習得させなさい。そうならないと安心出来ない。いいこと、余計な事は教えるんじゃないわよ」

「余計、とは」

「私の本職、組織、あなたと私の契約。他にも沢山あるわ。大体の事は誤魔化すか、嘘を捏^でち上げなさい。詳細まで話して良いのは神通力と幽霊と妖の基本的な事だけ」

「身を守る術は」

「そんなの以ての外よ。ハチが身を守らざるを得ない状況にしないために封を習得させるの」

「習得前に襲撃があるかも知れん」

「そのためのあなたよ」

「常につけられる訳でもあるまい。その方法が最善と申すか」

玄は少し声に響きを利かせて訊ねた。金色の眼は真由美だけを抑える。その様子を見て、真由美は眉間の皺を緩めた。

「あなた、そんなにハチが心配なの？」

「否……」

むしろあなたが心配だ、という言葉で玄は発さずに沈黙した。暫く真由美の茶を啜る音だけが室内を支配する。

「組織の動向は？ 噂でも聴こえてこない？」

沈黙を破ったのは真由美だった。話題を変える。

「年始の頃に角端が死んだ、とか」

「あら、最近動かないと思ったらそういう事だったのね」

「いえ、動きがない理由がそれならば、かえって怪しいかと。彼らは勢力内の拮抗を重要視していますから本来なら何か大事があるはず。しかし粛清や分配の再編成は特にない」

「五行思想、か。じゃあ今、五大祖は空席を放置している訳ね」

「しかも保守派の巨人が死んだとなれば過激派が主導するはず。なのに目立った動きはなし」

「確かに怪しいと言えば怪しいわね。今度、電腦世界からスニークしてみるか」

真由美は卓上の胎児の乾燥死体を見下ろす。それを包むように持ち上げた。悪臭の殆どがしない。それが放置された年月を感じさせる。玄は口を開いた。

「その子供、純朴な霊であった。遡界も容易く進行して、幸福そうに」

「ハチは優しい子だからね。やらせたくない事だったけど初体験の割には上々だったみたいね」

真由美は死体の顔を覗き込んだ。

「でもこれは死体。物。抜け殻。何の意味もないわ。木曾様への貢

ぎ物として最適ね」

脱衣所から物音が聞こえてくる。八角が風呂から上がった。

真由美はハンドバックから茶封筒を取り出した。彼女が入学式の帰りに下ろした金だ。相当の厚みがあるそれをぞんざいに玄に渡す。

「入り用に使いなさい」

「頂戴いたす」

「じゃ、明日は任せたわ」

「承知」

「……」

「……」

玄は身動きしない。

「まだ聞いてない事があったかしら」

「さあ」

真由美は凶悪な一重の目つきを真っ向から受けた。

「私が聞いていない情報を言いなさい」

「よかろう。……土が」

「土？」

「生徒の靴底に付着した分かも知れぬ。が、あの教室は微かだが土の匂いがした」

「土、――ね。分かった。覚えておきましょう」

ニヤリと犬歯を覗かせた玄を前に真由美は溜め息を吐いた。

「分かっている。熱くならない。常に全てに注目して怠らない。見聞が全てではない。これで良い？」

玄は満足げに微笑んだ。

「それでこそ青眼の名に相応しい。尤も、そうでなければ私を使いこなせん」

もう一度、真由美は溜め息を吐いた。

「天狗と契約すると面倒だわ。本当に」

第貳話「04」神二通ジル力・壹

どこまでも続く闇。ここには何もない。否。目を細めると小さな小さな白点が一つ。

白いワンピースの少女が浮かび上がる。華奢な四肢。手櫛で適当に整えたようなボサボサの髪。発光するその少女の表情はよく見えない。それ程の眩い光に包まれていた。

「おにいちゃん、どうしてノンが消えたの」

そんな事、僕に聞かないでくれ。

「どうしてノンは消えたの」

母さんが言ってたじゃないか。君の素懐が全うされたからだよ。

「でも、ノンはもうしゃべれない。お空も見れない。お日様もお月様もお星様も見れない。どうして？ ノン、こんな事のぞんでない」

僕は、……知らない。

「うそ。本当はおにいちゃんのせいなんですよ。おにいちゃんが悪いんですよ」

違う！ 僕は何も悪くない。素懐を全うして遡界するのは善いことだって母さんが――。

「そう信じただけでしょ。そうすれば自分の気持ちが楽だからでしょ」

違う。……違う。僕はただノンに空を、地上の景色を見せたかっただけだ。

「そうやって偽善者ぶるの？ 本当は幽霊なんかと関わりたくないのに？ 所詮幽霊は人間以下だって思っていたのに？ そうよね。今まで只の靄だったものが急に人間の真似を始めたんだから」

僕はただ……笑っていて欲しかった。

「違うでしょう。おにいちゃんに笑ってくれるノンが欲しかったん

でしょう」

違う！ そんな事、違う。違う、違う違うちがう……ちが……う……。

・
・
・

「――きろ」

突然、瞼を閉じていても分かる位に闇が晴れる。

半覚醒。全身が怠い。関節が軋み、筋肉は強張っていた。僕は寝返りを打って、布団を頭まで被った。躰はまだ睡眠時間の足りなを大いに訴えている。

「起きろ」

耳に響く低い男性の声。

僕は飛び起きた。この家は母と僕の二人しか居ないはず。男性の声自体がこの部屋で聞こえてはいけないのだ。

が、視界に飛び込んできた黒い法衣を見て、朦朧とする頭は一つの記憶を探り当てた。

「く、玄さん」

母が玄と呼んだ坊主。河童を退け、姿を消した男。母のボディガード、だったか。

「登校の準備をしろ」

僕の聴覚はまだ正常に稼働してないらしい。時計に目をやると短針は三を指している。普通に考えて、今の時刻は寝ている時間帯だろう。この坊主は一体何を言っているのだ。

「まだ夜中の三時ですよ。非常識にも程があります。大体、人の部屋に勝手に入っちゃあ――」

「言う通りにしろ」

坊主は僕の頭を掴んで乱暴に揺さぶった。凶悪な目つきで凄むも

んだから、渋々寝ぼけ眼を擦りながら制服に袖を通す。ボタンが中々留まらない。

僕は未だ夢見心地のまま玄の言う事に従った。廊下に出て母の部屋扉を見る。

「母さんは？」

「まだ寝ている」

そりゃそうだ。しかし何故僕はこの時間に学校に行く支度をせねばならないのか。僕だって寝たい。引越しの疲れが残っている。母の出来そうにない力仕事は殆ど僕がやって退けたのだ。日頃、体力に自信のない貧弱な身にこれは非常に応えた。

「外へ出ろ」

「はあ。一体これからどこへ行くんですか？」

正靴を片手に着靴で悪戦苦闘しながら訊ねた。

「川の神に会いに行く」

その返答を聞き、手が止まる。その奇天烈な名詞には敢えて触れないぞ。

「え……っと。僕もですか？」

「当然」

「なっ何ですか！」

川の神。日常じゃ聞く事なんてないであろう単語に過剰反応する。それが何者なのかは知らないが、昨日みたいな河童に会うなら僕は御免だ。

玄は人差し指を立てて唇に当てた。

「静かに」

声を抑えて再度訊ねる。

「どうして、僕が川の神に会わなきゃいけないのです」

「それは道中話そう。遅くとも夜明けまでに会わなくてはならんだ」

勝手な事を言う。しかし、玄は僕の事などお構いなしに玄関を出ると朝露に濡れる路上を行ってしまふ。離れないように玄の直ぐ後

ろを追った。

玄は坂道を下り鉄筋コンクリートの集合住宅を抜けると旧市街へ向かった。

川の神に会うと言いながら街を目指すのは奇妙に思える。川の神と言うくらいなら川へ行くものだと思っていたのだが。

人気のない夜更け後の街。そこは暗闇が支配する世界。どこからか野良猫の声が聞こえる。他に音と呼べるのは僕の足音だけだ。玄は足音一つを発てない。獣のようである。

長らく改修土木が計画されない地上都市はその発展を留めていた。アスファルトに亀裂が走り、這い出した雑草が少しでも陽の光を浴びようと競い合う。煤けたビルの隙間は違法に流された排水で汚臭が漂う。

光源と呼べる街灯は午前零時に一斉消灯が行われるために皆無。ここは月明かりが頼りの世界。柔らかな銀の光だけが寂れゆくビル群を演出した。

動く者は僕と玄の二人だけ。

日本の中枢が地下へと移行する現在、一般的な住民は地下都市や離れた衛星都市に集中し、旧市街はスラム街と化していた。

富裕層と貧困層の二極化がこうも顕著な都市はなにも愛知だけではない。地下都市の発達している各地で起きる現象だ。

雇用の殆どが地下に移ったが、大部分の国民が地下居住の権利を持てなかった事が原因だ。幾ら過去に比べて減少したと言っても日本は八千万の人口を擁するのだ。地下世界は地上に比べ、余りに狭い。核シェルターとしての意味合いの強い地下都市は定住出来る人間とそうでない人間を隔ててしまった。

政府は守るべき人間を率先して創り出した。国民の差別化を図っ

たのである。しかし徹底は出来なかった。地上から地下への出入りは許可されたのだ。結局、人は地上でのみ享受出来る恵みがなければ生きていけないのである。

それでもやはり多くの人間が地上に置き去りにされた形となっていた。

「さて。真由美は私に君の指導を命じた。しかし確かに私は知識があるが、人に物を教える事を不得手としている」

眠る旧市街を歩きながら玄は話し出した。荒々しさと繊細さの混在する良く通る声音だ。

「そこで問答という形で指導を行う事にする」

「はあ」

「……」

「……」

「何か聞きたまえ」

母。玄。ノン。幽霊。河童。これから行く川の神。『何か』と言われてもどれから聞くべきか。正直、先ずはこの糞坊主に文句を言いたいところだ。

「あなたは何者なんですか」

「天狗だ」

「テング？ でも、顔も赤くないし鼻も普通だし」

「それは後世の民間伝承に過ぎん。我々の本来の姿形は字の如く天の狗だ。今は人の形をとっている」

滑らかに振り向いた眼が金色に輝いて見えた。人じゃない。しかしそんなに驚く事もない。僕は既に昨日、幽霊と河童に遭っている。

「天狗は翼のある狗だ。大きさは牛ぐらいはある。尤もその姿を君に晒すつもりは少しもないが」

「はあ」

「……」

「……」

「……どうした。聞きたい事を次々に質問せねば私も教えようがない」

僅かだが玄の声は嬉々としているように聞こえる。どうやら天狗が知識を授ける事を好むのは本当らしい。

「じゃあ、その天狗がどうして母さんなんかのボディガードなんてしてるんです」

「契約だからだ。私は真由美が幼い頃に命を救われた。その際に守護契約をした」

「命を救った？ 母さんが？」

笑わせる。自分の生活もまともに維持出来ない人間が天狗を救った？ 俄かに信じられない。

疑問の眼差しを投げ掛け続けると玄は足を止めた。

「暫し寄り道をする」

早速、問答とやらを放棄ですかい。と言う文句を呑み込んだ。

酒臭い路地裏のこぢんまりとしたスナック。周りが電飾を切っているにも関わらず、そのスナックはネオンの看板が光っている。看板には『やんもい』と汚い平仮名で書かれていた。これが店名なのだろう。他の店がとくに店仕舞いしているのにやんもいは店内から柔らかな灯りが漏れている。

玄は古い木製の扉を押した。

踏み入ってみると、やんもいは洋風のかなり洒落た店だった。今や珍しい板張りだ。時代遅れの僕を興奮させる。店内はさほど広くないが小団体の飲み会くらいは対応出来る個室まであるようだ。

金髪の女性が一人でカウンターを片付けていた。

「ごめんなさい。もう閉店な——なんだ、あんたか。仕事かしら？」

ママは玄に拍子抜けした。額からスツと伸びる鼻。彫りの深い顔立ちは日本のそれではない。明るい青の瞳が玄から僕に移る。

「それで、なんの用？ こんな子連れて来てどういうつもり」

金髪ママは端正な顔立ちを歪めた。視線が鋭く僕に刺さる。明らかに歓迎されていない。

「買い物だ。川の神に会わなくてはならん。『あれ』はまだ在庫があるか」

「ああ、あれね。あるわよ。とりあえずどうでも良いからこの子なんとかしなさいよ。喧嘩売ってんの？ 営業妨害よ」

金髪ママは気分を害している。会話から察するに原因は僕なのだろう。だが、どうすればこの雰囲気改善出来るのか想像も出来ない。そもそも周囲の気分を害する要素なんてないと自覚していたのだが。

「あとは閉丸丹が欲しい」

「はあ？ どうしてそんな物を――ああ、そういう事」

金髪ママは一度玄に噛みつきかけたが、僕を見て急に納得した。

「あなた出来損ないか何かなのかしら」

「えっ？」

出来損ないと言われたのは僕。

ママはカウンターを拭く手を止め、僕を観察し始める。舐め回すような視線が僕を這う。息が掛かりそうな距離まで彼女の顔が接近する。しかし、決して触れはしない。

「ちよっ！ あの……玄さん」

「ああ、言っただけだったな。彼が八角だ」

彼女の行動に困惑する事なく玄が告げると金髪が動きを止めた。青い瞳が素速く玄を捉える。

「今何て言った？」

「その少年が八角だ。前々から話はしていただろう」

彼女は笑った。愉快、と言うより馬鹿馬鹿しいらしい。時折、笑いを堪えようとして失敗し、喉の奥で発てる音が容姿に反して滑稽だ。

「聞いていたけど八君は青眼の子供でしょ。冗談は止してよ。あんたそういうキャラじゃないわ」

「お前の認識に誤りはない。私は冗談を言わないし、これは冗談ではない」

「それマジ？」

「マジである」

金髪は笑いを止めると弱々しく首を振った。カウンター席に腰を下ろすと改めて僕を観察し始める。

「俄かに信じられない話ね。そんな話聞いた事ないわ。『鬼の子成らず』って言葉は嘘っぱちってこと？」

「物事には例外がある」

暫くの間、玄と金髪ママは意味不明な内容の話を交わしあった。僕は訳も分からず、会話に混ざる事も出来ない。そしてママの視線が偶に突き刺さる、という奇妙なシチュエーションの中、僕はただただ立ち尽くした。

見たところ二人は顔見知り。否、玄のコスプレ紛いの法衣に眉一つ動かさなかったところを見れば、恐らくは知己。玄が天狗と称しているのを知っているのだろう。さもなければ、入店した際に凝視されているはずだ。

そして勝手な予想であるが、玄の話す内容を理解しているという事はつまり、彼女も天狗やそれに近い者なのかも知れない。

玄が壁の時計に目をやり、慌てて立ち上がった。何時の間にか雑談に花を咲かせていた事に気づいていなかったのか？

「いかん。夜が明けてしまう。早く品を揃えよう」

少しの間、店の奥に二人は行ってしまふ。玄が戻って来た時には葉っぱに包まれた『何か』と白い紙封筒を手に入っていた。

「すまん。では行くでしょう」

どうぞお構いなく。二人とも一瞬、僕が存在忘れてたっぽいし。

「また来る」

「もう来るなよ。あ、八君は別よ。何時でも来なさい」

「は、はあ」

微笑む金髪ママは見る者に年齢を予想させない美貌の持ち主だ。

先程までの敵意剥き出しの目つきはどこへやら。

僕らはスナックやんもいを後にした。

「拙いか」

玄は空を仰ぎ見て呟く。紺に変色した空は東が白んでいる。夜明けまでそう余裕はない。

「聞いて良いですか」

「何だ」

「どうして夜明け前までに会わなくてはいけないんですか」

玄は紙封筒を取り出した。

「我々の生活リズムは基本、夜行性だからだ。腹を出せ」

「そうなんですか。……ん、えっ？」

今、腹を出せて言ったか？

玄は僕をむんずと掴むと腹をだけさせた。情けない柔肌が露出する。

いきなり何だ？！ 僕にそんな趣味はない！

突然の事に対応が遅れたが抵抗する。しかし無理だ。彼の膂力是天狗レベル。天狗がどの程度の力持ちかは知らないが、これだけは言える。僕の全力の抵抗はまるで意味を為さない。

「ちよっ！ な何すんですか？！」

「静かにせねば人目につくぞ」

「う……」

それだけは避けたい。僕は渋々、喚く事を諦めた。

玄は紙封筒から一つの珠を取り出した。黒い、ビー玉大のサイズだ。金属光沢を放っている。そしてそれを僕の臍に押し当てた。

「た頼むから、何してるのかだけでも教えてくれませんか。それは何なんです」

「一時的に封を施す。これは閉丸丹だ」

「フウ？ ヘーガンタン？ 何ですかそれは」

「おや、まだ説明していなかったか」

構わず玄は珠を押し込む。

「ひゃっ」

痛みは感じない。異物感を感じられた。冷たいかと思われたそれは、微妙な生暖かさがある。その上、意思を持っているかの様に僕の腹腔内を動き回る。叫びそうになる口を手で押さえ必死に堪えた。そしてその異物は僕の内臓を好き勝手に蹂躪して、下腹部辺りで静止して動かなくなった。

「それで、説明して下さい。こんなの僕の身に突っ込んでどういうつもりですか」

答えようによっては……よっては……、どうしてやろうか。どうすれば玄を痛い目に遭わせられる？ 僕じゃ体格も力もまるで歯が立たない。母に言いつけるか。……否、駄目だ。なんだか玄の味方をしそうな気がする。

玄は僕を離れた。

「一つ君に質問しよう。客人が訪れたとしよう。彼とは初対面だ。まだ挨拶もしてない。しかしそいつが銃を乱射しながら『よろしく、仲良くしてね』と言って庭に侵入してきたら、君はどう思う？」

随分とぶっ飛んだ質問ですね。おい。

「そりゃ仲良くなんて御免ですよ」

玄は頷いた。

「さっきまでの君がそれだ」

「え」

「そして今も銃をホルスターに収めているだけに過ぎん」

それは例えば、の話だろうか。しかし、例えている話題自体が分からない。僕はポカンと顔を晒した。

「問答の続きは飛びながらでしょうか」

「飛ぶ？」

もう、何がなんだかさっぱり。母も説明下手だが、玄も絶望的だ。玄は黒い法衣の袖に軽く口を当てた。口付けた法衣が巨大な翼に

変化していく様を僕は呆けて見ていた。

「04」神二通ジル力・貳

眼下を見下ろせば目眩が襲い掛かる。豆粒みたいな車。ペンケースミたいなビル。模型みたいな街並み。

しかし僅かに動き回る光点のお蔭でこの景色が本物と分かる。霞んで西に見えるビル群は名古屋だろうか。東の空は朝陽の明るさが濃紺を侵食している。

ひんやりと澄んだ暁の空気が頬を撫でる。大空をかなりの速さで移動しているはずなのに、不思議と呼吸困難に陥るような烈風は襲い掛かってこない。その上、視界もこれ以上ない程に良好である。昨日今日と光化学スモッグが発生しなくて良かった。さもなくば今頃僕の視界は断絶し、呼吸困難に陥り容易く死ねた事だろう。

さて、昨日の朝まで普通——但し幽霊可視及び変態性質の母有り——の少年だった僕がどうしてこんな空中にいるのだろうか。

今、僕という物体を高高度に維持しているのは一対の翼だ。漆黒のそれが僕についていたのなら、この空の小旅行がどんなに心躍る飛行となっただろう。

残念な事に力強く風を掴む翼は僕のベルトを後ろから握る自称天狗の一部である。

話によれば、玄が普段から身に纏う黒の法衣がこの翼らしい。曰わく名称を『羽衣』と。そのまんま、字の如く。

勿論、羽衣は玄の肩から生えている。取り外しなんて出来るはずがない。羽根と法衣の二択が玄には用意されている事になるが、人前でましたのは法衣。つまり彼は人型を採る限り、ダッサダサの法衣をコーディネートせざるを得ないのだ。同情に値する。

心配だったのは幾ら高度があるとは言え、翼を生やした人が空を飛んで人目につかないのか、という事だ。

日本の空は狭い。まだ殆どの住人が眠る時間帯とは言え、市街の上空を飛ばば尚の事だ。

そこで天狗の秘密道具『隠袈裟』である。なんと！この袈裟は身に着けるだけで全身を視認不可に出来るのだ。躰の一部に触れていれば消える事が出来、その上軽くて収納性も抜群。ステルスもビツクリの高性能だ。

と、そこまで褒めた物ではなく、やはりレーダーには映ってしまいうそうだ。しかしそうなると防空レーダーに映ってしまわないか心配である。玄はそれを考慮しての高度だと言っていたが、スクランブルを発令されたらひとたまりもない。

僕は半ば首を締めかけている隠袈裟にしがみつながら訊ねた。

「それで、何なのですか。フウとかヘーガンタンとか」

「封とは丹田の状態を言い、施す動作を言う。封をすれば神通力が抑制され、他者にも感づかれ難い。閉丸丹は丹田に対し、封が発生するよう直接働きかける効果がある。所謂、特效薬であって効力は精々二、三日といった所だ」

「……」

この天狗はわざとこんな説明の仕方をしているのだろうか。首を捻り、非難を込めて見上げた。

「そんな説明じゃあ、尚更分かりません。もっと根本的な事から説明して下さい」

「……いいだろう。しかし長いぞ」

玄は女の子なら卒倒しそうな目を愉快そうに細めた。これから話す内容は全て真実である、と前置きして玄は話し出した。

「君はガイア理論をしているか」

「えっと、地球を一つの生命体と仮定した話だったような」

「まあ、そんな感じだ。この場合はもっと漠然と捉えてもよい。地球は一つの力、エネルギーの結晶であり、源である。誰が言い出したのか定かではないがこの力を『神通力』と言う。語源は神に通じ

る力、神に共通する力、神に通用する力とも言われるな。神通力は絶えず大地から放出され、そのエネルギーは個体として誕生する。エネルギー体は緑を息吹き、風を起こし、波を起こし、大地を揺らし、火を噴き、雨を降らした。地球の環境を司ったのだ。個体差はあるものの長い年月を地上で過ごし、やがて彼らは母なる大地へと吸収され、神通力は循環する。そして、それが我々である」

「つまり、あなた達は地球が直接の母体であるエネルギーの塊であって、僕らみたいな生物ではないと言うのですね」

「最初はそうだった。我々は進化を重ねて盛衰する他の生物とは間接的にしか関わる事がなかった。君ら人間が現れるまで」

「と言いますと？」

「むう。この次を説明するには神人について話さねばならん」

玄は僕のベルトを持ち替えると負荷から解放された腕を振った。

「地球から放出された神通力が稀に生物に入り込む事がある。この場合は力は独立したエネルギー体ではなく、『丹田』と言う一器官として体内に宿る。人間でのその事例が『神人』または『鬼』だ。君も、君の母上もそれだ」

「神人、……鬼」

では、やはり僕は普通じゃない。それどころか人間ですらないじゃないか。

「神通力は身に様々な影響を与える。その中の一つが網膜、視神経の変質。即ち、エネルギー体としての神通力を可視出来るようになる。それが発生した当時、人類は既にささやかな文明を創始していた。自然を漠然と畏れ崇めるアニミズムだ。超然たる力に平伏し、時の権力者はそれを利用し、手に入れようと目論んだ。そのために第一段階として我々を『神』として崇め奉った」

澱みなく言葉を発し続ける玄は話に熱を込めてしまうようだ。知識を分かっ。この行為に喜びを感じる者は人間だけではないのだから。

「時同じくして、倭国に神人の始祖たる男が誕生した。彼は生まれ

た時から己が何者であるかを悟っていた。我々を目視し、我々が何であるかを悟っていた。その神通力は強大で大半の我々を上回っていた。直ぐに我々は彼を殺そうとした。彼は勿論抵抗し、神通力を用いて反撃した。しかし我々は実体がない。力の源は地球であったし、攻撃されて損耗する軀もない。長きに亘って攻撃を受け続けた彼は一計を案じた。我々に姿形を与えたのだ」

「確かに肉体を持てば攻撃が当たって、傷を負います。でもどうやって」

「人々に共通の認識を持たせたのだ。神、精霊、妖怪。何々を司るのは何某だ、それは何某の仕業だ、と彼は人々に逐一語り伝えた。そして一人歩きした神話や民間伝承は我々に多様性をもたらしただ。一定数の人間が我々の姿形を共有した時、その時から我々は肉体という枷に束縛され続けているのだ」

「それだけ？ たったそれだけですか」

「そう、至極単純だ。しかしその業は莫大な労力と神通力を必要とし、高度な鬼道が用いられ、その上我々はその発想に至れなかった。以来、肉体を背負った我々は神人のみならず全ての生物の目に曝された。殆どは人目を避け山野に紛れ、ある者は神として鎮座を続け、ある者は動植物として息を潜めた。中には私のように人の世に堕ちる者もいる」

堕ちる、と口にした時だけ玄が自嘲するように見えた。

「それじゃあ、きつと神人は妖に嫌われてるんですね」

「少なくとも好意的には考えてない」

「あなたもそうなのですか？」

玄が僕を見下ろす。金色の眼からはどんな感情も推し量れなかった。

「どうかな……。我々の話はこの位でいいだろう。それよりも君を含めた神人について少し話そう。先に述べたように君の母もまた、君も神人だ。神人とは丹田を所持した人間を指す。我々が鬼と呼称する神人は丹田があるかないか、それ以外に普通の人間とは大差な

い。否、むしろ神人は弱点が増える。この丹田という物は下腹部に存在する神通力の源となる器官なのだが、これが同時に致命的な弱点なのだ。即ち、神人を殺したければ丹田を刃物で一突き、或いは銃弾一発をくれてやれば良い。それだけで神人は即死する。神人は人にあらざる力・神通力を操り、その能力は時として我々までも上回る。しかし非力な者として絶対に敵わぬ存在でもないのだ。丹田を的確に攻撃すれば良いのだから。世の中なかなか上手く出来ている」

つまり、神人は一撃必殺を敵に許してしまうハイリスクを抱える代わりに、神通力を使う事が出来る。諸刃の剣だ。

「じゃあ、さっき言っていたフウはそのまんまの意味で、神通力を封じ込める事ですね」

「そうだ。そして無論、君は封の仕方など知らぬ。それに対する応急処置が閉丸丹だ」

不思議な感覚が僕の中身を満たしていく。普通に考えればこんな話を信じられる訳がない。だが、母が普通ではない事くらい、前々から当然の事として認識していたし、そんな母を見てきたから自分も普通じゃないと何となく考えていた。だから玄の言う内容が俄に信じ難い事でも、不思議と違和感なく頭に入ってきた。しかし、僕が玄の説明する神人だという事実は中々飲み込めない。何となくだった『普通じゃない』が改めてレッテルを貼られたみたいだ。やはり、否、意外に僕はその事実には衝撃を受けていた。

そこで、ふと昨晚からの疑問が湧く。幽霊とは何なのか。昨晚の母がした「そういうもののな」で納得出来ない。或いはその通りかも知れない。確認の意味も込めて僕は訊ねた。

「玄さん、幽霊は昨日母が説明した通りなのですか？」

「そうだと言えそうさ。しかしそうではないと言えそうではない」

「そういう答え方は止めませんか」

透かさず返した言葉に玄は片眉を上げ、笑った。想像していたものより随分高い声で笑った。

「成る程、血筋というのは侮れんな。君は天狗の扱い方が上手い。覚えておけ。天狗は知識が豊富だ。それを周りに伝授したくて悶々としているものだ。しかし、天狗は己の持つ知識を全て伝えてしまふと人間になると言われておる。教授はしたい、だが人間にはなりたくない。天狗は激しい葛藤と共に存在しておる。だから決して自ずから全てを教授する事はない。私が言うのも可笑しな話だが、天狗と話す時はそれを念頭に置いておけ。それで……、何だったかな？」

何もなかった顔に僅かな微笑みが添えられた。

「幽霊とは何なのですか」

「ああ、それか。幽霊とは生前に野望、不安、妬み、怨み、その他切実な願いや思い、つまり素懷が叶わなかった者の死後、発生する現象だ。これは稀少で、しかも神人にしか発生し得ない。何故なら幽霊とは丹田から解放された神通力の残り滓だからだ。そのために常人には視認出来ない。神人は視覚の変性により可視する。幽霊は人間的な精神活動を行うが、その人格は生前の写し、コピーではない。そして素懷に影響され易い。素懷を遂げるために手段を選ばない者までいる。まあ、人間と何ら変わらぬ。善人もいれば悪人もいる。神人が神通力を使えるように幽霊もまた神通力を使える。が、所詮は残り滓。丹田を持たぬそれらは使える神通力に限界がある上に、存在自体がやがて時と共に消滅する運命にある。だから素懷を全うする事も叶わず消える例など、それが殆どだ」

「……玄さんはノンの話を聞いてどう思いますか。あの子は素懷を全うしたから遡界したと母さんは言いました。でも、ノンはまだ地上の景色を知り尽くした訳じゃない。あの子はずっと地下都市の限られた区間しか知らなかった。本当はまだ遡界なんてしたくなかったに違いないんだ」

ノンはあの景色だけで満足したのか。

そんなはずない。全てが初めてで、本来体感するはずの肉体も失われていた。それらは全てどうしようもない事だ。問題は僕が出来る限りにノンの願いに近づけてあげられたのか、それである。

そんな事、僕は胸を張って言えない。

「残念だが私は幽霊ではないから、幽霊の思考など考えられぬ。しかし遡界が発生する時、それは素懐が全うされた時だ。それだけは間違いない。きっとその幽霊は満足したのだろう」

胸の痞りが除かれた気がした。母、玄。二人の話を聞いて漸くノンの遡界に納得出来た。正確には玄の話だけだが。

僕の中で母の発言が如何に信用されてないか改めて良く分かった。それにノンが遡界したという事実は既に過去の事だ。ノンはいない。もう済んだ事なのだ。

「さて、問答はこのくらいにしよう。川の神まで残りは歩きだ」

そう。僕は前に進まなくてはならない。川の神に会わなくてはならない。肝心の理由を聞きそびれたが、そんな事は後で良い。理由は後づけで構わない。僕は今、僕がやるべき事に従うだけだ。

若干、説明が増えて分かり易くなった玄の発言が僕の視線を下方へ促す。白んだ東の空が旧市街に色づけていく。夜明けは近い。

「04」神ニ通ジル力・参

東の空はもう大分明るい。白んだ空は西へ向かう程濃くなる紺と混じり合い、その境界はまるで見分けがつかない。

朝露を湛えた場所に僕らは降り立った。と、言うよりは落とされたとすべきか。

何せ玄が「あ」と声を上げて僕のベルトを手放した時、その高さは優に三メートルを超えていたのだ。幸い地面は枯れた芝生に覆われており、僕を優しく受け止めてくれた。

死に絶えた芝はそれなりの面積を誇り、その周りを木立が囲っている。また、所々に故意に空けられた大きな窪みがあり、若い雑草が繁茂しているものの元は砂が敷かれていたようである。

とは言え、上空から見ていた景色は旧市街のビルや住宅ばかりだった。つまりここは街のど真ん中に位置するのだろう。

「ここは――」

「ゴルフ場だ」

「どうしてこんな町中に？」

「知らぬ。作った者に聞け」

知らないと言うのだから知らないのだろう。都市とゴルフ場。果たして先に作られたのはどちらなのか。確かにどうでも良い事だ。寒期の極端な気温低下は芝にかなりのダメージを与えるようだ。冬枯れを起こした芝に対し、バンカーの雑草群は再生が早い。ちぐはぐなホールは嘗ての賑わいを微塵も感じさせない。

孤独感ばかりが印象を占めるこの景色を玄は一望した後に僕を見下ろした。

「ついて来い。但しここからは何が起きても極力騒ぐな。それから大人しく私の指示に従え。いいな？」

「はい」

「絶対だぞ」

「はい」

しつこく念を押されてから五分後、ホールから外れて茂みを抜けたところで僕は早速叫びそうになった。

どうやらゴルフ場の外れまで来たようで、側溝と見紛う小川の辺に辿り着いた。そこで僕らは足軽具足に暗緑色の湿った皮膚を包んだ集団に包囲された。

忘れようもない昨日と同じ妖・河童である。ひよろ長い指に握られた、身の丈の二倍はあろうかと言う程の長槍が首を掻き切らんと僕を捉える。一応、刃部が肌に押し当てられても僕は堪えた。

しかし一つだけどうしても我慢出来ない事がある。河童達の槍がただの一本も玄を狙っていない事だ。

玄は天狗を名乗った。それが事実だとすれば玄は河童と妖という括りにおいて同族である。彼の命が狙われないのも当然だ。

狡いではないか。否、理屈としては合っている。しかし、何故こんな扱いになるであろう川の神の下へと僕を連れ出したのか。神人は妖に良いように思われてないと言ったのは玄じゃないか。

「玄さん、やっぱり一つ聞いても良いですか？」

玄は僕の哀れな疑問を華麗に無視した。代わりに河童に話し出した。

「武器を納めよ。我々は境様に挨拶しに参った。彼は青眼の代行である」

途端に周囲がぎゃあぎゃあ騒ぎ立てた。どうやら不服らしい。今数えると河童は九人もいる。匹と数えるべきか、人と数えるべきか。とにかく九人の河童は小さな赤の眼を怒らせながら、それでも僕の首下から脅威は距離を置いてくれた。

「書簡の一つも寄越さずに押し掛けるなど無礼千万。その贄を置いて早々に立ち去れ」

「急に訪ねた件は無礼を承知。しかし、それでも急に訪ねざるを得

ない状況を作ったのは他でもない貴様らだ。更に再度申すが彼は青眼の代行である、丁重に扱って戴きたい」

「黙れ、はぐれ狗。傾者^{かぶきもの}の分際で領内にそいつを彷徨かせた上にこのような無礼が赦されるはずがなからう。その贅を置いて早々に立ち去れ」

「断る。境様にお目通り願いたい。立ち去れというのが貴様らではなく境様の意志ならば此度は退こう。誰ぞ境様の言伝を受けた者はおらんのか？」

「傾者に言伝などあろうはずがない。その贅を置いて早々に立ち去れ」

『ニエ』と言う度に河童らの僕を見る目が玄に集まるそれとまるで違う事に気づいた。『ニエ』とは『贅』の事なのだ。昨夕の河童は贅を献上する事で手柄を挙げると言っていた。つまり僕は今、功名を立てんと先を争う河童らによって川の神の生け贅として献げられかねない状況に陥っているのだ。

その答えに至って背筋が粟立つ。

僕は失した信頼関係も築けていない、傍らに立ち聳える天狗に縋るしか出来る事がない。今、玄に文句を言ったところで無視されるだろう。一人で逃げ出すなんて以ての外。弛緩と緊張を繰り返す足を必死に制御し、この成り行きを見守るしかないのだ。

痺れを切らしたのか一旦退いた槍が再び僕を包囲し始めたその時。小川から一人の少女が現れた。

河童達はざわめき、下を向いてしまう。同時に彼らの武器も納められる。それを認めて玄は眉間を緩め、独り言つ。

「少しは話の分かる者が来たか」

少女は僕より一つ二つ年上に見えた。ずぶ濡れの彼女は薄衣一枚しか羽織っておらず、寒そうだ。淡い栗色の肌が透けて見える。可憐な容姿にそぐわず、異形の河童を見もせずに毅然とした態度で彼女は応対した。

「何事ですか」

「侵入者だ」

河童の一人が僕らを指差し訴える。しかし、薄衣の少女は見向きもしない。

「貴男方は黙っていないさい。私は彼に聞いたのです。それで？」

「我々は青眼の使いである。初見の挨拶と昨日の無礼に関し陳謝に参った」

「それはお早い対応で御座います。私が境様の言伝を担いましょう」

「否、我々は境様に直接お会いしたい」

何故？ と少女は首を傾げる。

「境様の庇護を求めたい」

玄の言葉に彼女は尚更に困惑を呈する。

「ご冗談を。神人を庇護する事は特例中の特例で御座います。力なき者が神に縋る事はあっても、青眼程の方が神の保護を求めるとは異な事です」

「庇護を受けるのは青眼ではない。この子だ」

「これは失礼を。てっきり贅か何かと。それでこちらの方は？」

少女は初めて僕を見た。玄の手が肩に乗る。

「青眼の長子だ」

途端に周囲の河童がどっと笑い出す。少女もまた込み上げる笑いを口元で抑えるのに必死だ。

「天狗は森羅万象に通じ博識と聞いております。まさか追放された際に自慢の脳漿を置き去りにされたのでは？」

河童らが更に盛り上がる。嘲笑の嵐だ。同じような反応をやるもののママにもされた。玄はその時と同じように周囲が一通り鎮まるまで眉一つ動かさなかった。全く脱帽ものである。ここまで馬鹿にされて無反応なのも不思議だ。しかし玄が鈍感という訳でもなく、むしろ頑強な信念を感じられる。彼をここまで堪えさせるものは一体何なのだろう。

「とにかく、そのような戯れ言を私が申し上げるなど以ての外。ど

うしても謁見なさると言うなら止めはしませんが……」

「それで良い。案内してくれ」

「それではこちらに」

少女が手で示したのは小川沿いの砂利道だ。玄に肩を引っ張られ、前へと進む。

それを見て河童達が騒ぎ出した。鷺のように長大な嘴が僕の耳元でかちかちと音を鳴らす。僕らを見送る彼らの目はご褒美を目の前に不当な扱いをされた哀れなものだった。

察するに河童と少女の上下関係は少女の方が優位のようなのである。

一体彼女は何者なのか？

「玄さん。あの子、何者ですか」

カワソだ、と一言返しただけで玄は口を噤む。少女がこちらを振り返り笑った。

「失礼。私について何も言っていないませんでしたね。仰る通り境様の女官を務めております川獺かわそで御座います」

「川獺、カワウソなんですか？」

僕は川獺を頂辺から爪先まで繁々と見回した。少し乾いて纏まる黒々とした長髪。愛嬌のあるクリクリとした瞳の少女。薄い褐色の滑らかな肌はどこを見ても毛むくじゃらには程遠い。

僕の知っているカワウソを連想させる要素は一つとしてない。敢えて言うならば、瞬きする度にその存在を主張する大きな瞳くらいか。

首を捻る僕の視線に川獺はくすつと手で口元を押さえた後、薄衣を腿までたくし上げるた。柔らかな曲線を描く脚が露わになったが、それよりも目を引いたのは黒っぽい短毛に覆われた『何か』だった。両足の間から覗けるそれを彼女は手でもって僕に見せつける。

「これで納得かしら」

「え、えーっと。これは……」

「尻尾ですよ、尻尾。ここまで見せてまだ分からない振りするなんて、私をからかっておいですか」

少々生臭いそれは紛れもない尻尾だ。川獺は僕の反応がどうやら気に食わないらしい。

否、振りをしてからかっているのはどうやら彼女の方だ。口元を窄め頬染めて恥ずかしい振りをしているが、目が笑っている。僕は振りどころか全く分かってないのだが。

透かさず玄は、昨日僕が突然に神人としての能力が覚醒した事を説明した。それを聞いて川獺は目を丸め、感嘆の声を上げた。

「そんな話聞いた事ありません。丹田が十年以上も経ってから覚醒然り、鬼が鬼を産むなんて俄に信じ難い話です」

僕を見る目が少し変わった気がした。大方、玄の言っていた事なんて信じていなかったのだ。

「どうやらこの件は私如きが口を挟む余地などなさそうです。境様に協力を求めるのは賢明な判断かも知れません」

それっきり川獺は僕らを先導するだけで何も言わなくなった。

辺りは大分明るい。砂利道は何時の間にか石畳の小道になっていた。先へ進むうちに今度は石灯籠が視界に入る。木々は剪定のなされた松になり、方々に生えていた雑草は姿を消した。

明らかに手が加えられた様相に戸惑いを隠せない。誰がこんな事をしたのかと言えば、勿論ここに基盤を置く妖達だ。川の神に命じられ、せかせかと造園する河童の姿を想像し、彼らが少し面白い連中に思えた。

問題はこの妖の庭が人目につかないのか、と言う事だ。周辺の住民は気がつかないのだろうか。

「玄さん、ここは大分街に近いですが人目につかないのですか？」

「各所に呪が施されているせいもあるが、……こういう話がある。昔、とは言っても科学、動物学の発展した平成の話だが、とある農家で鶏が食害に遭った。猫か野犬の仕業と思った農家は鶏の死骸に毒を含ませたそうだ。すると結果的に裏の山で死んでいたのは三頭の狐だった。それまでその地域では狐の生息が認められておらず、

地元住人は誰一人として狐の存在を認知していなかった。我々もまた、それと同じだ」

「……」

えー……、この天狗はどうしてこうも何かに喩えたがるのだろうか。しかし、この難解な答え方に慣れたのだろうか。何となくだが分かる気がする。

忘れ去られたはずのゴルフ場の端っこにこんなものがあるなんて誰が想像するだろう。成る程、知ろうとする意思、そして手段がなければ彼らに遭遇するなんてあり得ないのかも知れない。

妖達は好き好んで人目につくような事をしないのだろう。そう考えると昨日の河童が人目も憚らずにマンホールをぶっ飛ばした事は矛盾しているようでその実、僕を重要視しどうしても手柄を立てなくてはならない状態だったのかも知れない。河童にとっての自分の価値が実感出来た。

やがて僕らは額東に『境川』と彫られた石鳥居の前に到着した。荒削りのそれは所々に風雨により劣化しており、かなりの年数を感じさせる。鳥居の上に数羽の五位鷺が止まっている。

川獺は先行すると何事か言い含め、五位鷺は鳥居の更に奥へと飛び立っていった。さほど待たずして一羽だけ戻ってきた。川獺が振り返る。

「謁見が許可されました。さあ、どうぞ」

再び奥へと向かう。僕らは似たような鳥居を幾つも潜り、最終的に辿り着いたのは小川に連なるこぢんまりとした池、と言うより水溜まりだった。

「私はここまでで御座います。どうぞ恙ない受け答えを」

「ご苦労だった」

玄の労いも殆ど聞かずに川獺は踵を返した。

周囲を見渡しても川の神らしき姿はどこにも見受けられない。

僕は姿も見えぬ神と対峙する羽目になってしまった。

「04」神ニ通ジル力・肆

神聖、と言う言葉は知っている。

しかし、そんな言葉を使った事なんて現実どころか心の中ですら一度もない。遂に川の神を前にして使う時が来たかと思っていたのだが、川獺に案内されて辿り着いた場所は予想よりも『ふつう』だ。水溜まりとしか表現出来ない水源は澄んだ清水を湛えており、涼やかな音を起てながら小川に注ぐ。早朝の空気はまだ気温が上がりきっていない。清涼感たっぷりの水音はむしろ寒々しい。

何時の間にか木立が深くなり、早朝という事もあり、辺りは暗い。そして風が通らない。枝葉は模造品のように微動だにせず、止めどなく湧き出す水以外に動く物はない。

神の在す空間おわは考えていた以上に不気味で厭な感じがした。

「よいか、我々は飽くまでも神に『お願い』をするのだ。これは君の生死、とまではいかぬが君に対するこれからの拘束の度合いが決定するものだ。基本的な受け答えは私がする。君は聞かれた事に答えるだけだ。それ以外は口を開いてはならん」

「えっと、それは――」

「異論は認めん。応答以外はただただ黙せよ」

「……」

水溜まりの傍らに小さな祠がある。僕らは腰程の高さしかないそのの前に進むと膝を突いた。一般に知られる神社の拝礼とはまるで違う。

当然、僕は次に何をすれば良いのか判断がつかない。そんな僕の頭を玄は合図もなしに掴むと砂利に擦りつけた。額に痛みが走る。

平伏するなら事前に言ってくれば良いのに……。

顔を伏せたまま額を摩る。僅かだが出血している。この天狗は本当に力加減を知らない。そのうち肩を掴まれた拍子に脱臼とかあり

それで怖い。

「こんな早朝に何用だ」

老人の声。顔を上げようとしたが玄の豪腕に阻まれる。声は間違はなく祠から聞こえた。しかし、当然ながら祠は人や何者かが入れるサイズではない。

「お目通りが適い有難い限りです。私は――」

「言わずとも知っておる。『はぐれ狗』だろう？ 馬鹿な事をしたものだ。が、お蔭で一通り騒ぎ疲れた山が静かになったのはこちらにとって有難かった。それで、文字通り飼い犬に成り下がった傾者が何用か、と聞いている」

川の神の声は至って普通の老人のそれと変わらない。姿が見えないだけ想像するしかないが、神もまた玄のように人型を採るのだろうか。

それよりも気になる点が川の神の言う玄である。玄は何か過去にしでかしたようである。

「では本題へ。此度の急な謁見は昨日の陳謝、及び境川流域に於ける居住許可の交渉。そして庇護の要請です。一先ずこれをお納め下さい」

そう言って玄は懷から出した大きな葉に包まれた何かを取り出した。やんもいで買った物の一つだ。川の神は祠に献げられたそれに対し特に反応しない。こういったお供え物は当然の事なのかも知れない。

「陳謝に許可に庇護、欲張りとは思わんのか？ まあ良い。就寝前の暇潰し程度には聞いてやろうか。では説明してもらおう、餓鬼よ。何故、我が領内で神通力を解放し、更にその状態を維持しつつ徘徊し、その上に残滓までも引き連れていた？ これは明らかな挑発行為だろう」

低音の聲が響く。川の神の視線が僕を突き刺す錯覚に襲われる。いきなりに僕へと応答の機会が飛び込んできた。上目遣いで玄を見る。玄は黙って頷いた。

……どうしろと。まるでまともな説明がなされてない僕に答えられるのは正直に話すしかない。それが今の状況を危ういものにするか否か、分かったものではないが。

「僕は、その、昨日まで神通力はなかったんです。……らしいです。だから、力が解放されてたとか、勝手に歩き回っちゃいけないとか分からなかったんです」

沈黙。一度答えただけで自分が相当にビビっているに気づいた。今の僕は平伏しているのではない。地面にへたり込んでいるのだ。

「餓鬼よ。確か『哀弔の青眼』の息子だったな」

「はい、……多分」

そのご大層な異名の神人と母が違わない、という人類史上最悪の事故が事実ならばの話だが。

「養子ではないな」

「はい」

「ふむ。餓鬼よ、鬼の子成らずと言う言葉を聞いた事があるか？」
確かやんもいのママも同じ事を言っていた様な……。

「はい。でも意味は知りません」

「文字通り鬼は鬼を生めん。それなのに餓鬼は親が鬼と言う。矛盾が発生せんかな」

「初めて知りました」

聞いてないぞ。怨みを込めて玄を睨みつける。玄は下を向いたまま両手を合わせた。

それで謝ったつもりか！

大体、話を進めるのは玄ではなかったのか。質問には答えろ、とは言われたが質問ばかりじゃ無知な僕が話し続ける事になる。そんなので大丈夫なのか。

「もう一度聞こう。餓鬼は青眼の息子か」

「はい」

「ふーむ。して、昨日まで力はなかったと申すか」

もう無理。自分の言葉一つに命が懸けってるなんて。一言の重みが強過ぎる。とてもじゃないが僕は有利に言葉を紡ぐ事に長けてないし、動じずに話し続ける胆力も内容を気にしないお気楽さも持ち合わせていない。ここはバトンタッチ。

「正直なところ、僕はよく分かりません。何せともに説明される時間ありませんでしたし、昨日河童に襲われて初めて自分の状況を知ったもので。だから、詳しい事ならその天狗の方が知っているとします」

途端に老人の声が笑った。

「成る程、分かった。確かにまるで何も知らぬ餓鬼だ。それにしても鬼が妖に頼りっ切りとはな。信頼が厚いの、狗っころ。ちなみに餓鬼よ、この天狗のように人の世に墮落する妖は『傾者』と呼ばれるがな、傾者は飽くまでも利己心に忠実な者だ。それでも構わんなら好きなだけ頼るが良い」

変わらない調子で玄が引き継ぐ。

「この様子でお分かりでしょうが、彼は確かに鬼です。が、その力が解放されたのは昨日。これは真で御座います。更に我々が対処するよりも先に幽霊と接触してしまい、そして情け心を掛けたためにこのような事態へと発展してしまった次第」

「ふん。親子揃って変わり者よ。人でも妖でもない物に情けを掛けるなど理解出来ん。あれは場合に因っては鬼以上の脅威だ。そのうち青眼は自滅するぞ」

「主に限ってそれはないかと」

「すっかり忠実な飼い犬だな。まあせいぜい巻き添えを食らわないようにするのだな。さて、餓鬼の件だがこいつは興味深い。何せ初の鬼の子だからな。しかも『解放された』のなら何者かが封を施していたのだ。一体誰が何の目的でそんな事をしたのだろうか？」

「……どうかお察し下さい」

「ふむ。まあ良い、大凡の経緯は把握した。儂も一端の神だ。融通くらい少しは利く。謝ればこの件は水に流そう」

玄が僕の頭を揺さぶる。

「はっ？え」

「謝れば赦すと仰っておる」

「……えと、ご免なさい」

「よかろう」

「……」

こ、これだけ？ 河童を遣って殺し掛けておいて意外にすんなりと終わるもんだな、おい。

「それで次は居住許可か。この用紙に住所ほか必要事項を書け。掟は分かっておろうな？ ここの相場は月に一斤の献上だ」

「承知で御座います」

どうやら僕の出番は終わったみたいだ。後は玄が何とかしてくれるだろう。

それにしても『神様』というのは予想以上に簡単な性格と言うか、単純だ。魔が差した僕は玄が用紙に記入しているうちにそっと顔を上げてみた。

川の神がどんな者か見てみたかったのだ。本当に祠の中に居る訳がない。居たとしたら神様は凄く小さいサイズだ。

見回しても僕の期待する姿はない。せっせと用紙に書き込む玄と、小さな祠と水源以外ない。おかしい。神はここにいない。

だが、そうだとすると今、玄が書き込む用紙はどこからやって来たのだ？

「餓鬼よ、探しても僕は見つからんぞ」

やはり、老人の声は祠の中から聞こえる。玄が僕の頭を掴むと再び平伏の位置に押し戻す。さっきよりも力が籠もっている。赤子の頭だったら粉碎してるぞ。

「構わんよ。無知程哀れな事はない」

独りでに祠の戸が開く。覗き込んだ中には水盆が鎮座し、中には清水が溜められていた。水中には一枚の御札が浸され、境川と文字が浮かび上がっている。

「これが神様の正体なんですか？」

「否、違うな。儼は境川の全てであり、一部であり、別個体でもある」

「はぁ……」

よく分らないがこの御札は本体と繋ぐ交信機の役割なのだろうか。

「それじゃあ、この用紙は誰が持ってきたんですか？」

「おい、余計な事は喋るな」

玄が制服を引っ張る。渋々、元の位置に戻る。

「まあ良いではないか。どうやってだって？ そりゃあ神通力を使つてに決まっているじゃないか」

それを聞いて僕は神通力についてその効果をまるで知らない事を思い出した。

神通力って何だ？ 超能力か何かなのだろうか。

更に質問したかったが、玄が止めた。

「これ以上は話が逸れ過ぎる。我々には時間がない。まだもう一件、交渉事が残っている。神が就寝する前に全て済まさなくては面倒だ」言われて手首の端末を確認するともう七時を回りそうだ。今日は入学後最初の実力テストだから補習はないが、遅刻せずにカプセルポートまで向かうにはもう絶望的だ。

昨日はあんな事があったものだから、教科書の見直しなんてしてない。入試の頃に比べれば僕の学力なんて高が知れている。テストも絶望的だ。僕は青くなつて黙った。

用紙を書き終わると玄は改めて座り直すと祠に向かっていった。

「最後に、お願いで御座います。この者、見ての通り無知にして叡才なく、あらゆる敵に対し非力。自らに封を施す事すらままなりません。延いては彼に対する庇護をお願いしたい」

老人の返答は中々ない。漸く返ってきたものは拒否だった。

「断る、と。何故ですか？」

「つけ上がるな狗っころ。例え青眼の要請だとしてもそれは吞めん。

本来、夷滅対象の鬼に居住許可は稀なのだ。更に普通の人間が庇護を願うなら未だしも鬼がそれを求むとは笑止。事情など関係ない。これを赦せばどうぞ入ってくれと言わんばかりに間者の流入を余儀なくされる」

老人の声が異様に低くなって僕は相對しているのが神だと再認識させられる。とにかく、神人と妖は簡単に相容れる仲ではないのだろう。

「彼は鬼ではない事として処理しては貰えまいか。こちらでも封を習得するまでに閉丸丹を使い続けましょう」

それを聞いて悪寒が走る。腑を捏ねくり回されるアレをまたするのか。

「どうしてそこまで餓鬼の保護に拘る？ 身を守る術を備えさせれば庇護など必要ではないだろう」

川の神は核心を突いた。全く持ってその通りである。

尤も僕は命を張って戦うなんてご免だが。しかし、神の庇護やはさておき玄は母のボディガードだと言っていた。ならば無理をすれば僕の面倒まで見る事が出来るのではないか。状況的には既に面倒見ているとも言える。

今の状態で何が不足なのか。一応は玄のお蔭で守られていると自覚している。

「息子の安全を願うのが親の情というものです」

「ふん、過剰な保護は対象の無力化に繋がる。綿で首を絞めるようなものではないか」

「庇護を了承すれば主は献上品を更に増加するに違いない。鬼ではなく只の人間として扱えば良いのです。悪い話ではないと思います
が」

「ふむ……。それでは献上品を今寄越せ。それなら良からう」

「ちなみに増加分はどれ程でしょうか」

「今回は二斤で良い。それなら餓鬼も死なんだろう？ さてどうするか」

黙って聞いていたが僕が何か献上しないといけないらしい。

斤。一斤が約六百グラムだから、二斤で約一キロと二百グラム。斤と言って思い出すのは食パンだがそんな物を持ち歩いているはずないし、玄が最初に祠に献げた品も食パンには見えなかった。

そして神の言葉「二斤なら『死なん』だろう」。僕が至った答えは軀の一部。正確には肉だ。河童が僕を贅にしようとするはずだ。きっと妖は人肉を食らうのだ。

未だ予想の範疇を超えてはいないが、僕は玄の次なる言動を固唾を飲んで見守った。

「二斤で間違いないですな」

「何度も言わせるな。こちらとて冗談で伸ばす程余裕がなああい」後半に欠伸が混じる。妖は夜行性らしいが神もまた例外じゃない。玄が凶悪な顔を更に歪ませてほくそ笑む。口調が尊大なものへと戻る。

「では採算をどうぞ」

「何？」

「よく献上品を確認するべきだったな。中身は挨拶用に一斤、更に余分に三斤ある」

老人は鋭く息を飲んだ。

「貴様、まさか最初から……」

老人の声は目に見えるように焦って聞こえる。

「抜かったな、私が何をしたか知っていながら。二百年ぼっちの知見を甘く見るな。神が格式に弱い事も掟に従わざるを得ない事も承知。ここらの事情も調べ済みだ」

「ふん。成る程、噂は虚仮威しではなかったか」

「相手を知るのは基本だ」

「貴様は先ず己を知るべきだったな」

「それで、どうする？ まさか神ともあろう方が自分でした約束を反故にすると？」

「分かっておる。餓鬼よ、何か用があれば何時でも儂を訪うが良い」

「は、はい」

老人の声は張りがなくなって聞こえた。眠気もあるのだろうか、やはりしてはならない契約を結んだためな気がする。

「餓鬼よ、世界を見誤るな。この天狗は何者より曲者だぞ」

「……」

負け犬の遠吠えとはこの事か。

「用は済んだ。失礼する」

玄は僕の首根っこをむんずと掴むと引き摺り始めた。

「04」神二通ジル力・伍

試験終了を告げる電子音が流れる。途端に教室内は鉛筆を転がす音や机椅子を引く音に支配される。

生徒達は口々に試験の出来や結果予想を曝し合う。最後列の生徒が収集する解答用紙はマークシートではなく、旧式の記述試験用紙だ。

都立第三あいち高等学校では実力試験が全てこの形式である。

地下都市において推奨されるのはむしろ集計、明確な点数化が可能なマークシート方式、或いはデータ管理が容易な端末機によるチェック方式が主流だ。ここの高校でも定期試験はマーク方式だ。

しかし、各地下都市に数多く存在する教育機関で実力定期の何れかに記述方式を取り入れているのはたった一校、ここだけである。地上でもやはり似たような状況で、採点者の各判断によって評価が分かれるために記述試験は少ない。

懐古思想の教官ばかり集まったせいだ、とかこの高校は学校ぐるみで地下都市体制に反発している、とか言われている。

VRSが進歩を続け、近いうちに電腦化が実現するとまで言われているこのご時世。建前としては現実と仮想の明確な差別化が出来ている人材を育成する事を目的としているらしい。

僕から言わせてみれば、とてもじゃないが成果が得られるとは思えない。一般の人間が電腦世界を理解し、適応し、現実との差別化を図る能力を身につけるスピードを、VRSの『リアルさ』の進歩するスピードの方は遙かに凌駕している。

既に噂の範囲では端子を脊髓と接続する技術が開拓されつつある。近い未来にそうなれば、例えば現実の肉体を使う行動を脳に焼きつけたところで現実と仮想の区別などつくのだろうか。

と、記述試験の意味を問うのは決して今回の試験がまるで駄目だった言い訳ではない。……と思いたい。英語など単語の綴りも分らず、文法も分からず散々である。せめてマーク方式なら鉛筆の各面に選択記号を書いて転がす事が出来たのだが。

僕の試験がこんなにも不出来な理由――とは言え万全の状態でも僕の学力は疑わしいが――は昨日まで普通だったはずの生活に大きな異変が生じたからだ。

幽霊、天狗、河童との遭遇。そして今朝は川の神に謝罪をしに行った。むしろそんな精神的ダメージ大の状態の僕がしっかりと試験を受けに登校した事に対し、賞賛して欲しい。

勿論、今朝の登校方法はカプセルポートまで天狗にぶら下がって一っ飛びだ。空の旅は文句なしの快適さだった。しかし気分は優れない。

僕に槍を突きつけてきた河童達。彼らはデフォルメの施されたキヤラクター『カップ』から程遠い。お世辞にも可愛らしくない。今朝見た異形の者達で唯一まともだった川獺だって生臭い尻尾つきだ。結局、何が言いたいかと言えば、要は昨日の疲れも残っているのにも関わらず理不尽な天狗に叩き起こされた事による睡眠不足然り、図らずも再び河童に殺され掛けた事然り、無理矢理神様に会わされた事然り……。それら全部引くくるめて、試験の出来が悪かった原因なのだ。

しかし、隣の大男・島地謙致には驚いた。

昨日の入学式を寝通した様子から何となく予想はしていたが、彼は本日もまた試験開始三分で爆睡体勢を採るという偉業を成し遂げた。これが監督教官が机を蹴っても起きないのだ。

僕にそれだけの鈍さ、神経の図太さがあれば是非ともこの苦痛でしかなかった時間を睡眠に割きたかったものだ。

島地から詳細不明の勧誘を受けたのは丁度、未だ騒がしい放課後

の教室でそんな事を話題に暇を持て余していた時だった。

「ところで八角。今日これから暇か」

「え。ん、まあ」

「じゃあ、ちょっとつき合わないか？ 多分、面白いモノが見られるぞ」

「面白いモノ？」

「実はさ、今日試験中にラブメールが届いた」

「それは良かったね」

寝てたんじゃないんかい。何時の間にそんなものを。

しかし、心なしが島地のうれしそうな顔の『うれしそう』は男子生徒がそれを貰った時の高揚感と緊張感の混じる『うれしそう』とは違うように見える。どこことなく緊張感に欠けている。それでいてどこか楽しげだ。

「で、なんでそれが面白いの」

「んー。これ見れば分かる」

そう言って島地は生徒証の画面を見せてくる。覗き込むとメールの文面はこうであった。

——運動場の倉庫に來い。

一言。たったそれだけ。やけに淡泊だ。想いは言葉で伝えるってやつだろうか。

「な。個性的なラブメールだろ」

否々、それ以前にこれが女子以外のメールとは思えられないか。

生憎、送り主は判らないように設定されているようだ。

「受け取りようによっちゃ、怖い人達の呼び出しに見えるけど」

「何言ってるんだよ。だから『個性的』なメールだろ」

「……やっぱ同行するのは止しとくよ」

成る程。入学初日に島地が漂わせた『俺は居眠りだけが趣味な只者なんかじゃあないぜ』オーラは本物のようだ。触らぬ神に祟りなし。既に神と関わってしまった僕が言える事ではないが、今回は絶対に関わらない方が良いに決まっている。

帰り支度をしようと伸ばした手を島地ががしりと掴む。大きい手だ。僕の手が女の子みたいだ。

試しに抵抗してみたが、押しても引いてもびくともしない。全く、自分の非力さに呆れるばかりである。

「行く、よな」

島地の瞳が嬉々と光る。どうやら選択の余地はないらしい。

運動場は体育館と併設される屋内競技場だ。様々な部活がここで活動する。

試験の後、活気に溢れる中で僕らは隅の方へ——島地に腕を把持されたまま——向かった。再三止めるがこの大男は「大丈夫」を連呼するのみで、まるで聞く耳を持たない。

躍動する島地はこれから玩具でも買って貰える子供みたいだ。

全開で歓迎していた倉庫内に入ると扉は大きな音を立てて閉まってしまった。しかもご丁寧にロックまで操作された。

切れ掛けた蛍光灯が点滅する。空調の整っていない倉庫は少し黴臭い。

案の定と言うか、やっぱりそこに想いを胸に秘める乙女など居るはずがなかった。居たのは見た事もない男子生徒十一人だ。それぞれ思い思いの得物をちらつかせ、僕らを値踏みするかのように睨みつける。

一人が前に進み出る。他の十人が独創的な髪型なのに対し、彼は普通のスポーツ刈り。後ろの愉快的仲間達と連んでいるとは思えない爽やかな印象だ。

「島地、だっけ。俺らの後輩が世話になったみたいだな」

「礼ならたっぷり欲しいな」

「ああ。盛大に感謝してやるよ。地下流の歓迎でな」

透かさず島地に耳打ちする。相手は明らかに上級生だ。

「一体何したの？」

「ん？ ああ。昨日、先田とか言う奴が何人かで喧嘩売ってきたか

らな、ちょっと相手してやった」

「してやったって……」

成る程、確かに昨日、島地が委員長に任命された時、何か含むところのあるような生徒がいた。大方、そいつがやられた腹癒せに先輩に泣きついたのだろう。

エスカレーター式の地下都市の学校では部活や学校行事により、横だけでなく縦にも結びつきが強い。地上から編入してきた僕らは余所者だ。その上、島地はずっと先田が務めてきた座を図らずも容易く奪った。正に侵略者だ。

しかし、僕はなった事がないので皆目見当がつかないのだが、委員長とはそんなになりたいものなのだろうか。僕の知らない特典が漏れなく付属するのも知れない。それならちよつとなつてみたい気がしないでもない。

なんて、呑気な事考えているうちにスポーツ刈りと愉快的仲間達がじりじり迫る。何か武器になる物はないかと周囲を探った。と、そこで思い当たる。

何で僕まで喧嘩に混ざらなきゃならないんだ？

僕は見に来ただけ。そう。島地に無理矢理観客として連れて来られたに過ぎない。

納得して僕は島地の横からそつと離れる。途端に音もなくスキンヘッドの生徒が立ち塞がる。

まあ、普通はそうだ。この絵に描いたような展開。

「どこ行くんだ。こいつを一人にしちゃあ可哀相だろ」

「ちょ待って下さい。僕はこいつに連れて来られた訳で、喧嘩する気なんて更々ないんです」

「えっ」

「え？」

予想もしなかった事に、疑問の声を上げたのは先輩方ではなく、島地の方だった。

「あれ、お前、上出身だよな」

「うん。それがどうしたの」

「だったら喧嘩の心得くらい常識だよな」

「どこの常識だよ！」

「何だよ、喧嘩ぐらい日常茶飯事だろ。だからついて来たんだろう」
島地、こいつ……。明らかに確信犯。本気で言っていたらこいつの人生を疑ってしまう。

もしかして先輩達への威嚇のつもりなのか？ 地上では喧嘩が日常茶飯事だなんて、空を見た事のない子供でも信じないぞ。多分。

「ごちゃごちゃ抜かしてんじゃねえよ」

軀を捌く暇も、身構える余裕さえなかった。拳は顔面目掛けて飛んできた。

右頬、直後の顎とその付け根に鈍痛が走る。視界がずれる。

初めての喧嘩——と言うより、一方的な暴力——は血の味がした。そのまま僕は一瞬硬直した軀を宙に任せ、後ろに整然と並べてあったハードルに突っ込む。優に二メートル飛んだ。幸いにも意識が飛ぶ事はなかった。

備えていない人間が殴られるとこんなに飛ぶのかと感心する。

これが合図となった。島地は五人程相手にしている。残りはスポーツ刈りを含め、見物に回った。気絶した振りをしてやり過ごそうと考えていたのだが、その必要性はない。

まるで戦力外。これだけド派手に食らったのだから当然と言えば当然だ。

彼らは一人相手に十一人全員が当たる必要もないと判断したのだろう。

直後にそれは誤りだったと彼らは気づかされる。状況を楽観した大口を叩くだけの強さを島地は持っていたのだ。

一方的なものになると軽視したのだろうか。先遣の五人は島地を羽交い締めにしようと目論んだ。二人が背後に回る。島地の体格を考えれば妥当である。背後を取った事で慢心したのだろうか。否、こ

の際に心の持ちようなんて関係ない。

例え万全の状態で島地に取り付いたところで勝機はなかったのだろう。

背後の一人が島地の学ランに触れた途端、島地は振り返る事なく逆手で相手の腕を掴んだ。そしてそのまま僅かに下げた腰に乗せたかと思えば、次の瞬間には綺麗な半円を描き叩きつける。

尋常じゃないのがこれを片手でなした事、そして前方で構えていた別の生徒をも巻き込み叩き伏せた事だ。

背後のもう一人が凍りつく。島地は造作なくこれを掴むと残りの二人に『投げつけ』た。一体どれ程の臂力だと言うのか。人を投げつけられた二人も堪らず腰を打つ。

「こいつ——」

スポーツ刈り他六人が色めき立つ。最初に叩きつけられた一人は動かない。四人がほんの四、五秒で尻を床につけた。

さすがの愉快な仲間達も島地がどんな奴なのか悟った。目つきが目に見えて引き締まる。

僕はただただ、目の当たりにした怪奇現象紛いの怪力に絶句するしかない。何せ二回瞬きする間に全てが行われたのだ。

島地はそのどことなく二枚目に一步遅れを取る顔を悠々たる余裕の笑みで飾り、その眼を嬉々と輝かせた。まるで力を誇示する事に生き甲斐を感じているような、僕の知っている限りで一番生き生きとした島地謙致がそこにいた。

知り合って間もない僕が一番生き生きして見える、なんて言えた事ではない。それでもそう感じた。否、そうに違いない。

拳の衝撃が残る頭を必死に起こしていると、スポーツ刈りが動ける仲間全員で島地を袋叩きにせんと襲い掛かった。この際プライドは捨てたようだ。皆、思い思いの得物——鉄パイプにバット、ダガーにナックルダスターと凶器オンパレード——を手に行っている。さすがの島地もこれでは敵うまい。

それともやはり余裕の笑みを湛えたままそつなくこなすのか。

とにかく、僕はまるで蚊帳の外だった。

しかし何だろう、この感情は。この開けた事もない箱から零れ出したようなこの感情は。

喧嘩なんてした事ない。したくもない。殴られて痛い。口の中は血の味が広がっている。また殴られるのが怖い。それなのにこれらを覆ってしまう感情が沸き起こる。

島地に対する畏怖か、否。初めて拳を見舞ってくれたスキンヘッドに対する怒気か、否。では、眼前で繰り広げられる暴力に対する憤激か、否。ならば、窮地とも呼べる状態の島地に対する惻隠の情か、これも否。全部、否、違う。分からない。自分が分からない。

僕は痛い目に遭い、その上大した事がないと判断された。放置されている現状に安堵し、戦力外として認識される懦弱な自分に絶望し、そしてそれら全てに反発し、殴られた不条理に憤った。現状を認める事が自分の価値を認めてしまうようで、僕には出来なかったのだ。

僕には度胸も経験もない。島地の様な力がなくてもいい。女々しい貧弱な軀でも構わない。只、これ以上現状に甘んじる事が我慢ならない。僕は今、無性に暴れたくなった。

そう思うと僕の中で何かが弾けた気がした。否、弾けた。全身に『何か』が浸透していく。

柵が取れた軀が軽くなる。感覚はむしろ鈍くなり、諸所の痛みが消える。気づけば僕は乱闘の渦中に飛び込んでいた。

「04」神二通ジル力・陸

さすがは島地。鈍器が唸ろうと、凶刃が閃こうが全て避けている。しかも防戦一方という訳でもなく、避ける度に一撃をお見舞いしている。

僕に気づいたスキンヘッドは額に汗を光らせていた。

「ああん？ 雑魚は引っ込んでろ！」

「おい、無理すんな」

少し意外な、僕を心配するかのような島地の声。しかし、注意が逸れた事で隙が出来る。島地は腰にバットを食らう。

それでも堪えていた。肘で挟み込み、奪い取ると反撃を加える。

「女顔のサンドバッグには用がねえんだよ！」

スキンヘッドが鉄パイプを振りかぶる。当然の如く、僕は反応出来ない。軀はこんなに軽いのに。

手で遮る事も出来なかった僕に鉄パイプが容赦なくめり込む。腹部直撃。水月——所謂、鳩尾——を狙った的確な打撃。

衝撃が走る。二歩後退りし、僕は膝を屈し……なかった。何故か痛みがない。痛覚が機能していない。興奮状態に因る錯覚か。痛みを感じなかった事に対する疑問を抱く余裕はなかった。

「僕だって——」

込み上げる感情に身を任す。白い細腕を精一杯振り回した。

何とも情けない挙動の攻撃である。易々躲され、挙げ句の果てに素人手刀打ちを鉄パイプで止められる始末。

かん、と骨と金属のぶつかる高い音を聞いただけで本来なら飛び上がっているはずである。

しかし、それも痛みを感じず、不快な振動が腕を伝っただけだ。スキンヘッドは僕に密着すると背面の打撃と腹部への膝蹴りを繰り返す。壊れそうな程、衝撃が走る。特に蹴撃が激しく、蹴り込ま

れる度に躰が宙に浮く。

痛みはやはり、ない。

それでも断続して走る衝撃に息が詰まる。僕はスキンヘッドの学ランを必死に掴んでいるしか出来なかった。

しかし衝撃は長くは続かなかった。

「カスト！」

スポーツ刈りの警告と、ゴツンという鈍い音を聞いたかと思えば攻撃が止んだ。人形のように力の抜けた体重がのし掛かる。

「ナイス四」

島地が半ばで折れたバットを片手に僕を支える。どうやら見かねて助けられたようだ。

だが、これはやり過ぎじゃないだろうか？ 床に崩れ落ちたスキンヘッドの後頭部は血が滲んで、見た事もない大きさの瘤をこさえている。

「てめえ……！」

動かない仲間を目の前に残存の生徒が息巻く。

スポーツ刈りは手持ちのダガーを握り直す。点滅する蛍光灯に照らされた刃が島地を補足する。

使えないと判断したのか、島地は折れたバットを捨てた。

「上の連中なんか大人しくしてりゃあ良いんだよ……！」

叫びながら突っ込んで来るスポーツ刈り以下八名はどこか吹っ切れたのか。一見すると捨て身ともとれる隙だらけの、怒りと不満をぶつけるだけの突撃。

対する島地は腰を軽く落とし、両腕を緩く広げる。まるで全てを一身に受け止め、押し止めようとするかのように。まるで、背後に守るべき何かがあるように。

何故避けない？

島地の身体能力を以てすれば、きっと何の造作もない。一度に押し寄せる怒濤をまともに受ける必要なんてないはずだ。

僕から島地の表情は窺えない。一体、島地は何を思い、この気炎

の塊に対しているのだろう。

体重の乗せられた突撃。島地は身動きせず、刃が達しようと言う刹那。

僕には何が起こったのか皆目見当がつかなかった。

只、恐らく全体重を掛けていたであろうスポーツ刈りの刺突が止まったのだ。止まって見えた。

直後に見えざる力によって、スポーツ刈りがぐぐもった呻き声と共に吹き飛んだ。

他の愉快的仲間達も同様だった。倉庫内の用具が音を立て、そして全ての音が振動を止める。

倉庫は静寂が支配し、外から場違いな部活生の掛け声が漏れてくる。

何も、スポーツ刈り達が勝手に転けた訳ではない。しかし、島地が撃破した訳でもなかった。

島地が本日一番の驚愕と緊張を見せた。隙のない動きで周囲を確認する。落ちているダガーを拾い上げ、その目はたった今までとは打って変わり、鋭い眼光に戦士を従えていた。

「何か、いる」

どうやら気絶した様子のスポーツ刈りにも、僕にも目をくれず、島地は索敵するがその正体不明の何かを捕捉出来ない。

僕には分かった。気づいた。この場において僕しか察知出来ないであろう『何か』は無理矢理にその強大な力を抑えた、微々たる神通力を匂わせた。

玄だ。そうに違いない。しかし、何故？

助けてくれたのは分かるが、玄は別件の用がある、と言って今朝分かれたはずだ。疑問の声を掛けるべきか、否か。僕は迷った。

そして島地はと言うと――恐らく、ではあるが――丹田を持っていないにも関わらず玄の居場所を突き当てた。

「そこか！」

無造作に放られたダガーは、しかし真っ直ぐに石灰置き場に飛んでいく。それは姿見せぬ何者かに止められた。つまり空中に静止した。

当然、玄は受け止めたのだ。

それを見ても別段驚かない島地に違和感を覚えた。そこは飛び上がってでも驚愕の慌てっぷりを披露するところだろう。

「光学迷彩、か？ そんな物を扱う人間がどうしてこんなところにいる。否、それ以前にそこまでの擬態性能の代物なんて、実験段階でさええない」

盛大な勘違い——機能としては予想している代物と変わらないのだろうが、その由来という点で——をしている島地は、それはそれはおっかない目つきで空中のダガーを睨みつけた。

「えっと、あのな、しま」

「姿を現せ。見えなくても呼気や音で『何となく』分か……！ 待て！ まてまて！ 大体何でここに俺ら以外の奴がいる！？ どこから入った？」

この倉庫に入って直ぐ、唯一の出入り口である扉はロックされた。透明な事よりこの密室状態の倉庫内に侵入者がいる事に驚く島地。仰る通りだが、どうして光学迷彩には驚かないのか。

姿見せぬ玄はどこ諦めを混じらせた溜め息一つ。隠袈裟を取り上げた体勢で姿を現した。漆黒の法衣。坊主頭に威高げな兜巾。一重の凶悪な眼は金色。どことなく消沈して見える玄がその姿を見せた。
「……」

石像と化す島地。そして突然現れたこの奇抜で、骨董で、ある意味先進的なコスプレイヤーをどう説明するべきか。

そもそもどうして姿を現す？ 普通ここは何としても隠し通すところだろう。困惑の極みに達する僕。

「何と、……閉丸丹がこうも容易く碎かれるか」

開口一番。玄は島地に対する説明と、更に僕に対する事情説明ま

でも触れずに言いたい事を勝手に独り言ちた。

閉丸丹が、砕かれた……？　つまりそれは今、僕が神通力垂れ流し状態って事か？

「それってどういう事ですか、玄さん。否、そもそもどうして学校に」

「怪我はないか？」

「質問に答えて下さいよ」

島地は玄が僕の知り合いだと悟ったのだろう。直ぐに僕や玄に訊ねる事なく、成り行きを見守っている。こいつ、実は、結構賢そうだ。

構わず玄は僕に近づく。そして僕と大股三步の距離に近づき、限なく観察する。その視線が僕の頬に到達した途端、血相を変えた。

「閉丸丹を砕いた上に殴られてる」

「えっ？　ああ、はい。僕、喧嘩とかした事なくて――」

口内は出血。今も鉄錆の芳しい味わいを楽しんでいる。もしかして僕の口元は血だらけか？

「バレたら不味い」

は？

有無を言わず玄が掴み掛かる。むんずと掴まれるこの感触はあれを連想させた。

そう、『あれ』だ。

予想通り、玄は僕の学ラン、カッターシャツを引き上げる。もう片方には爛然と輝く閉丸丹。

島地の目の前で。玄は閉丸丹を僕の貧相な腹に押し込んだ。島地の視線が僕の腹に注がれる。玄の手は易々と僕の腹に埋もれている。顔が火照るのを感じた。同時に全身の力が抜ける。この躰の一部を他人に曝す、否、この異質な行為を曝す事自体、何にも耐え難い羞恥だ。

と、前回同様に閉丸丹が僕の腹腔内を散々暴れ散らし、その定位置・丹田に停止した途端、先程までの感覚の鈍った躰が元に戻った。

柵が帰ってきた。肉体のダメージ、を再確認する。鈍い鈍い痛みは、徐々に適所的確な鋭い痛みへと移行する。今更に打撲の痛みが襲い掛かった。

「うっ。……痛い、です。玄さん」

「それが神通力だ」

「……はあ」

どうしてこうも、この天狗は説明を素っ飛ばすのだろうか。しかし、予想は出来ている。僕もそこまで馬鹿じゃない。

痛みを感じなくなり、封を施した事でその痛みが帰った来た。その一連の現象が『神通力による効果』だと言っているのだ。体内で何か弾けた時の『何か』とは早朝の閉丸丹だった訳だ。

「それからこれを」

そう言って玄は腰に提げた瓢箪をくれた。

「口に含め」

言われた通りにする。栓を開けると小気味良い音を立てた。恐る恐る口につける。中の液体が口腔内に流れ込む。水、にしては比重が大きく感じる。若干のとろみを持つその液体は無味無臭。一体これは何だろう？ と、首を捻っているうちに口腔内の裂傷から痛みが引いていく。

「飲むなよ」

え？ 玄がそう言った拍子に、飲んでしまった。

「ど、どどうして先に言わなかったんですか!？」

構わず玄は僕の顔、顎の周りを観察する。

「まあ、死にはせん。さて、このくらいの治癒なら真由美も察せんだろう」

「死にはせん、て……大体、玄さんはいつも肝心な事をどうして教えてくれないんですか」

「はて、私の性質については説明済みだったはずだが」

「それならその性根を直して下さい」

「出来るなら疾うの昔にやっておる」

「じゃあ努力して下さい！」

そこで島地が一言。

「おい。そろそろ説明して欲しいところなんだが、色々」

「……」

「……」

僕と玄は目を合わせた。

「あ、……僕の兄です」

「どうも」

「さすがにそれは苦しいぞ」

「……」

「……」

翌日の話。飲んでから「飲むな」と言われた液体——話によると母が作り出せる掬漿きくしょうとか言う液体——の恩恵により僕の新陳代謝は一時的に驚異の進化を遂げたらしく、トイレに缶詰めになっていた晩の翌朝の話。

初めて余裕を持って登校した朝。僕は何故か廊下で生徒と、男女問わず擦れ違う度に注目を浴びた。

「ほら、あれが——」

「そんな人には見えないよね」

「椎原さんを倒したんだろ、あいつ」

「名前、なんて言ったかな。ハチ……カド？ 駄目だ、読めねえ」

指差す、とまではないものの、あっちでひそひそ、こっちでひそひそ。昨日の騒ぎが漏れたのだろうか？

しかし、呼び出して負けた話を言い触らす者がどこにいますか？

のだろう。皆目見当がつかない。

異常な事態に戸惑いつつ、遅刻ぎりぎりに登校してきた島地に意見を求める。

「ん？ ああ、噂ってのはこんなに広がるのが早いんだなあ」

感慨深げに頷く島地。

「ちよこつと学校の共用掲示板に書き込んだだけなのに」
ちよつと待て。

「聞きたくないけれど、一応聞こう。何を書き込んだの？」

「え？ 昨日の八角武勇伝」

「なっ」

おいっ！ 噂を広めたのはお前か！ お蔭でみんなに変な印象与えてるんじゃないだろうな、って言うかももう変な印象与えてるよ！
「いやあ、お前が殴られても突っ込んできた時は正直、感心したよ。良い度胸してる。益々気に入った」

二の句が継げない。

「安心しろ。あいつらを一瞬でノックアウトにしたのはお前って事にしたから」

それは非常に安心出来ない。つまり昨日のスポーツ刈り以下愉快な仲間達の怨みは僕に集中してしまうじゃないか。

「なんて言ったって、俺が天狗を説明するには少々無理があるからな」

「それは……」

答えようもなく黙り込む。言外しないのは当然だろう。僕の噂を全力で阻止して欲しいものだ。

目の前で大胆不敵な眼差しを向ける大男・島地謙致。

彼は僕が知る限りの、丹田を持たずして人外存在を知った第一人物である。

間幕 「04」組織ノオ茶会

神人、鬼。

丹田を器官として躰に備え、神通力を操る者達。真人間を超越した次世代の人類。

時に妖に喰われ、時に神への贄となり、時に反撃し勝利した彼らは、古くから自らを集団として総轄しようとした。妖に敵対し、幽霊を狩り、同胞と潰し合う。生態系の頂点にありながら、現世に生を受けたその瞬間、殺戮の世界に身を置く彼らの中にその日常を変えようとする者が現れるのは、そう不思議な事でもなかった。

その結果、対立勢力や時勢に揉まれながらも創設されたのが神人連合『神代会』である。

構成員は五行思想に基づいて大別され、首席と呼ばれる特に戦闘能力に優れ、大量の神通力を有する者によって指揮される。

五人の首席、しょうこ聳孤、えんく焰駒、きりん麒麟、さくめい索冥、かくたん角端が存在し、方位を用い敬称とし、彼らを『五大祖』と言った。五大祖管下の構成員は一定ではなく、神通力の総量が等しくなるよう、時に引き入れ、時に間引く。そうして組織内のパワーバランスは保たれていた。

何より組織内の均衡が最優先事項であり、組織外の神人の把握・管理、妖の殲滅と社会への進出が当面の活動として掲げられる。

そして年始。創立当初の思想を色濃く受け継ぐ最古老であり、水の首席であった北方様が死んだ。それは溢れそうな堤防が決潰したのであり、現在の組織は操者の消えた四頭引きの馬車に等しい。

神代会はその性質を傾け始めていた。

闇。空虚な仮想の空間において環境設定は自在のものではあるが、このルームは放棄を前提とし、敢えて最低限の設定以外はなされていない。

閉鎖的であり同時に無限に広がる暗がりに五つの席が設けられて

いる。

薄汚れた石製の五角形のテーブル。各辺には五元素の木、火、土、金、水が刻まれており、同じく石を削った席は既に埋まっている。但し、その姿はマネキン人形。

アバターには容姿、音声が反映されておらず、被服すら設定されてない。どれも顔立ち、体格、性別が相違わない。誰一人微動だにせず、口を開かず、談笑も嘆息もない静寂が保たれる。

電脳伝いに参集した、この異様な空間の主催者五人は時を告げる電子音と共に奇妙な『お茶会』を開始した。

「それでは始めるとしましょう」

そう切り出したのは土の人形。そして進行を始めたのは木の人形。何れも思考変換された機械的な音声だ。

「まず、皆さんには先月確認された新傾向の幽霊について情報を求めます。既に幽霊が電脳世界へと進出し基盤を置いている事実は重大な問題ですが、情報の波に紛れて確認情報が極めて少なく対処も判断しかねているのが今の現状です」

「ああ、例の視覚に刺激を与えて脳を焼くタイプか。下らん尻拭いの依頼が部下に来ていたが」

「焰駒さん、それはどんな依頼ですか」

呆れたように答える火の人形に金の人形が聞き返した。

「被害者の抹消と電脳記憶の回収だ。マスコミに幽霊の事を感じられないよう、徹底的な焼死体を作らされたそうだな。施設ごと半焼として処理されたそうだ。まあ、データを解析したところで管理サーバーのハッカーじゃどうしようもないと思うのだが」

「データはコピーしなかったのですか？」

木のマネキンが意外そうに非難を込める。

「一応、依頼を受けたからにはクライアントの意向に沿うのが普通だからな」

「……分かりました。そのデータの件は私が何とかしましょう。ですが、今後はそういった組織の利益に関わる事にはしっかりとした

対処して下さい」

「はいはい」

ぞんざいな返答に木の人形は首を竦める仕草をして見せた。

「他に、情報はありますか？」

その他の人形達は首を左右に一定運動した。木の人形はそれ以上、新傾向の幽霊については言及しない。

「それでは」

土の人形が改まって、しかし乗り気なく言った。

「本題に入るとしましょう」

「それではまず近況報告を――」

「待って貰いたい」

中断したのは水の人形。彼は既に死んだ北方様に代わり、参加を許可された荒田二位だ。この場に席を同じく出来るのは角端の名を継ぐ者だけだが、今回は彼の申請が特例として通った。いるべきではない彼が、口出しするのは本来、憚るべきである。それでも彼は水の現トップなだけに、それが退けない理由となっていた。

「何でしょうか？」

話の腰が折られた形に木の人形が迷惑そうに反応する。

「本題である青眼を組織に招く話だが、私はその重要性に疑問を呈する」

堂々言い放つ水の人形。そんな彼に困ったように木の人形は土の人形を振り返る。

「と、言っていますが」

「決定事項よ。文句があるなら角端の墓前で言いなさい」

「時には決定事項を曲げる事も必要だ。そもそも、ついこの間まで青眼の参入に反対だったあなたがどうして掌を返す」

指弾に対し土の人形は全く動じない。角端が死に、名実共に頂点となった彼女は五大祖の総意を尊重しなければならぬ立場になっていた。

「今、この場を総轄するのは私だ。そして組織の方向性は五大祖の拮抗あってこそそのもの。私情は慎むのが当然。お前が自分の言い分を貫き通したいのなら、ここに在る全員を説得すれば良い」

「では第一に、角端の座は空席だ。その状態で導き出した指針の何処に拮抗があるというのか」

その問いに対し、金の人形が鼻で笑う。

「空席じゃ困るから青眼を招こうとしてるんじゃないですか、荒田二位さん」

「私を角端に据えれば良い。角端は後継を青眼に指定した訳ではない」

途端に電子音の嘲笑が広がる。

「その発言がお前に角端の資格がない事を示している。五大祖に自薦でなった者など一人もない」

一人、荒田の発言に一笑すらしなかった土の人形が論じた。それでも荒田は退き下がらない。

「第二に、此度のシナリオに我々水軍が組み込まれていないのはどう言う事か。仮にも自分達の首席となる者を迎えんとするのに遊軍にも指定されていない。本来なら最も動くべきなのは我々ではないか」

「それはお前が一番分かっているでしょう？」

「何？」

「前角端が死の直前に帰郷する際、行った不正分配。まさか私達五大老が感づいてないとでも？ 今、水軍はあの老害の力を均等に受け継いでいるはず。要は信用ならないお前達は青眼が来てくれるまで大人しくしている、と言っている」

「……」

荒田は弁解に窮し黙り込む。

「勿論、否応なく『間引き』をしなきゃあいけないだろう。何て言っただって青眼は強力な神通力の持ち主だからな。彼女が参入すれば水軍の総力は有り余る。まあ、俺には関係ない話だが」

「で、言いたい事はそれだけですか、荒田二位。僕は退席をお勧めしますよ」

「……」

間もなく逃げるように荒田はログアウトした。

強制的に制御を失った水の人形がテーブルに倒れ込む。操り手の消えた人形は微動だにしない。それを見ながら火の人形、金の人形が冷笑する。

「あいつ、これから眠れない毎日だろうな。俺にとってはどうでも良いが」

「なんて言っても調整の肅正に階級は関係ありませんからね」

木の人形は何事もなかったかのように話を続行した。

「邪魔者も消えたところで本題に移ります。それでは索冥君、報告を」

「はい。と、言っても僕も『銀の鶏頭』の報告をそのまま言うだけですけど」

金の人形が無邪気に返事する。

「報告によれば青眼の息子・八角は第一段階を終了し、鬼道の封印を解放されました。しかし予期しない事に幽霊が出現して接触、面白い事に彼もまた青眼と同じようにこれの遡界を手伝ったようです。その課程で境川の尖兵とも接触、青眼の『はぐれ狗』のお蔭で事なきを得ています。また、未確認ですが、翌未明に境川の神とも接触したとの情報があります。更にその日の放課後、喧嘩騒ぎに巻き込まれた際、施された閉丸丹を打ち破っています。私見として存外、イレギュラーな丹田を秘めているようです。それから特に取り立てる程の出来事はないようです。青眼に保護される幽霊との接触くらいで、鶏頭にはそろそろ次段階に移るよう指示しました。今のところ以上ですね」

「ご苦労です。しかし、あの高校に幽霊がいるとの調査報告はなかったはずですが」

「よく分かりませんが珍しいタイプです。電脳化していなかったよ
うで、把握から漏れていたみたいですね」

腕を組んでいた土の人形が口を開いた。

「結局、事はシナリオ通り進んでいると言う事かしら？」

「ええっと、はい。そうです。」

「そう……。それならそう言えば良い。知りたい事も突き詰めれば
それだけ。無駄な時間だったわ」

「え？」

「今回はこれでお開きにしましょう」

「ちょっ――」

木の人形が止めようとするが、次の瞬間に土の人形は額をテーブル
に打ちつけていた。何の反応もない。

「……全く、あの方は手のつけようがない」

「老人達も余計な忘れ形見をしていったもんだ。俺達の器量も考え
て欲しいものだが」

「麒麟さんもいなくなってしまうんですし、僕達も解散しますか
？」

「そうするしかないでしょうな」

「本当に無駄な時間になってしまったが」

それぞれ思い思いの不平不満を一通り並べ、ログアウトする。木、
火、金の人形は先例に倣って、弛緩しテーブルに突っ伏す。

静寂。ここには誰もいない。いた痕跡だけが残る偽りの空間。洗
練され、テーブルも残された抜け殻達もやがては情報の波に消えて
いく。

それが電脳世界。存在して、存在しない仮想の世界。

少し熱めのシャワーから降り注ぐ湯が白磁器の曲線を伝う。
きめ細かなその肌は湯水を弾き、女性特有の弾性と彼女の性質を

具現したかのような拒絶を兼ね備えている。神々しさと強かさを放つ目鼻立ちは女神の彫刻の冷たさが際立つ。右の二の腕から先は欠落し、残された三肢が尚もその芸術的神秘を引き立てる。排水孔に引きつけられる泡を眺めるようで何も見ていないその眼は光を吸い込む漆黒、濡れた髪はプラチナブロンド。

神の白さ、畏怖対象の白変。隻腕は欠陥にして美点である。完全無欠の更に上を行く美しさ。

彼女こそ五大祖の一端を担う、土の首席。四方の中央に座して南面する、帝王たる女傑。麒麟の座を恣にする最大の神通力保有者、神代会における名実共に頂点の中方様。

そんな彼女は幼くして麒麟——この場合、神獣として名高い中国の妖の事である——の稚児やちこに遭遇した。それは彼女の幸運であり不運である。神と鬼の禁断の契約。片腕を代償に手にした力。それは普段から無比を求めた彼女にとって安い代償だった。正確な『決算』も知らない麒麟を掌中に納めた彼女は、卅十手にそれを固定した。麒麟は使役されるだけの——それも他者が抑える事も儘ならない程の——武器となったのだ。彼女にとって神までもが純粹に力でしかなく、それ以上でもそれ以下でもない。

電腦世界との直接接続は神経に不快感を伴う。個人差はあるものの、それが顕著な彼女は事後の入浴が必然となっていた。

彼女はバスローブ一枚を羽織りシャワールームを後にする。自動化されたシャワールームは自ずから室内の乾燥を開始する。送風音を聞きながら、彼女はつい先程まで籠もっていた『仕事部屋』に戻った。

リクライニングシートと必要最低限の端末機だけのシンプルな室内。

静かに息を吐きシートへ軀を委ねたところで、彼女是一件の電子メッセージが届いている事に気づいた。その送り主に興味を覚え、

直ぐにデータを解凍した。申し訳程度のスピーカーから先程聞いたばかりの聲が流れ出る。

《水の二位、荒田だ。単刀直入に言おう。私と手を組んで欲しい。私はあなたが私情で青眼を執拗に狙っている事を知っている。青眼が組織に加わる事なんて本当は賛同など出来ない、そうなのだろう？ 周知の通り青眼が組織に加われれば、水の首席・角端の座を彼女に預ける事となる。しかし、これも周知の事だが先代が後継を指名しなかった場合、慣例通りならば二位である私が角端を務めているはずなのだ。何が言いたいかと言え、我々は青眼が組織に参入したところで面白い事など一つもないのだ。彼女の参入を赦す訳にはいかない。つまりは利害が一致する。言わば同志だ。下らない計画が頓挫すれば私は主席の座に上り、あなたは気兼ねなく青眼を殺す事が出来る。協力し、組織の愚かな判断を修正しようではないか。これは提案ではない。要請である。無事に私が角端となった暁にはあなたへの忠誠と惜しみない協力を約束しよう。良い返事を期待している》

全てを聞くと彼女は体重をシートに預けた。そして瞬時に己の回答を導き出す。勿論、荒田とは異なる形として。

反逆、とまでは言わずとも組織の方針に対する妨害。対し、彼女は五大祖の一人。見過ごす訳にもいかない。差し詰め追放、悪ければ粛正。しかし、組織の方針に不満があるのも確かである。

「それにしても――浅はかな男だこと。これで組織を操る側に立とうなんて滑稽だわ」

彼女は抑揚のない声で呟いた。

何も青眼を殺す名目を手にする方法が現在の方針を曲げる事ではないのである。そして荒田はそれに気づかず、先も見通せず、必死に直情的な行動に走ろうとしている。

ただ、これを利用して好きに動かすのも悪くはない。彼女は新た

に融通の利く駒が出来た事を喜んだ。答えは勿論「YES」だ。返信作成に取り掛かる。

「久しぶりの纏まった増強になりそうね」

そう言ってほくそ笑む。

力こそ全て。

神に通じる力を持つ者達・神人。神通力は『摂取』するものと認識する彼女にとって、神も同胞も幽霊もさして変わらない、手に入るべき宝物庫に過ぎないのだった。

第參話「05」潜ム者達・壹

常人に扱えないはずの大剣が唸る。車をも大破しかねない斬撃が襲い掛かる。僕は瘦身を駆使し、その風を肌を感じながら避けた。剣はコンクリートの床に縦に長い亀裂を穿つ。

おおよそ十キログラムはあろうかという金属の塊を易々と構え直した島地は、やはり余裕の笑みを湛えたまま若干の成長を見せた僕を褒める。

「やるようになったじゃねーか、八角」

当然だ。あれだけ痛い目に遭えば躰が回避を覚えてしまう。痛覚の設定を無効にしてなかったらショック死しているレベルだぞ。この男は容赦ってものを知らないのか？

「やっぱりもう少し手加減して貰いたいんだけど……」

「そう言われても玄さんから頼まれてるからなあ」

弁解しながら島地は構えたままに突撃する。ごく一般的な長剣を使ってそれを去なす。島地は躲された大剣を遠心力を使って無造作に薙ぐ。加速するその鉄塊を避ける反応が出来ない。顔面に堪え難い衝撃が伝わる。気づけば僕は五、六メートルの距離を移動していた――。

――途端に表示されていたヒットポイントが瞬く間に消えていく。見せつけるようにLOSEの文字が浮かび上がった。

衝撃で呼吸が儘ならない僕に手が差し伸べられる。

「休憩入れるか？」

「まだいい」

「そう言うと分かってたけど、無理するなって。このゴールデンウィークの間に結構上達したと思うぞ」

「だから少し手加減してくれば良いんだってば」

無然と掴みながら立ち上がる。

VRS——ヴァーチャルリアリティシステム。現在の日本においてシミュレーションや娯楽の一手段として生活に浸透している。

ここはヴァーチャルゲームセンター、通称バーセンの一人一部屋割り当てられる一室。五感、体性感覚を間接的に刺激し、動作を入力する事で仮想空間内において様々なエンターテイメントを楽しむ事が出来る。しかし、開発当初、軍事的で使われたこれはむしろこのような戦闘訓練に適しているのかも知れない。

玄が島地に僕の訓練を依頼したのは、二人が互いを知ってから殆ど間もない時だった。玄が直接僕に指導すれば良いものの、全く、職務怠慢もいいところだ。

事情は良く把握出来てないが、玄としては自らが教授するよりも同じ人間の島地——しかも知っての通り怪力に任せた馬鹿げた戦闘力持ち——に訓練を称して任す方が効率が良いと判断したらしい。対する島地も乗り気で、しかし大して何かを指導される事もなく、本当に叩き上げの鍛え方を享受している。

この理不尽な『訓練』と言う名のサンドバッグ係は先月の体育倉庫で乱闘事件の翌週から当然の如く始まった。以来、部活動は入部届の提出どころか見学すらろくに行けない。

更にこのゴールデンウィークと言う名の魔連休。宿題の文字が浮かばないのか島地は最終日まで律儀に訓練を行いやがったのだ。

確かに先日の乱闘で僕は自分の非力さを思い知った。玄としてもこの弱さは対処せざるを得ないと判断したのだろう。そこまでは分かる。

しかし、何故島地に任せる。

先日まで中学生をやっていたとは思えない体躯。垣間見せる我流は無駄が多いにも関わらず確かな強さを持つ。強さは認めよう。そう、こいつは本当に強いのだ。が、まるで指導能力が皆無だ。

恐らく島地の戦闘スタイル自体が誰かに教授されたものではないからだろう。我流を理解出来るのは普通、常人だけだ。島地を言い

訳にするつもりはない。しかし、自然と避けて反撃する事だけを考えてこの数週間を過ごしたせいか、僕の挙動はすっかり姿勢の崩れたものとなっている。流麗さの欠片もない。

「いくぞ」

大剣の唸りを聞きながら僕は身構えた。

・
・
・

「今日はこれくらいにするか」

一日当たり六時間に及ぶ訓練がやっと終わる。

島地はへばっている僕を片手で軽く持ち上げて立たせる。

「お疲れ」

「……疲れ」

疲労。特に肉体よりも顕著な気疲れが僕にしがみつく。対する島地は息一つ乱さない。

一体どのくらいの体力が秘められているんだ？ 日頃から寝てばかりなのは充電しているのか？

「大丈夫か？」

「お気遣いが少し遅いかな」

「だけど、トレーニングってのは常にきついものじゃないと成果が出辛いからな。先に出とくぞ」

そう言って島地の姿は微かなノイズと共に消えた。

それを認めてから僕はもう一度、凸凹になったコンクリート床に脱力した。別にログアウトしなくても、現実世界でヘッドギアを外せば済むのだが、敢えてそうしなかった。倦怠感に身を任す。

「宿題、どうしよう」

こうして僕のゴールデンウィークは呆気なく消え去った。

「えーっ、せせ席替えをしましょう」

担任・新留の一言で教室が沸いたのは連休明けテストの翌日だった。

抽籤の結果、僕は窓際の席となった。勿論、島地と言う大っきなおマケつきで。

「へへっ、また近くだな」

珍しく爆睡体勢に移行しなかった島地は椅子ごとこちらを向いた。そして声を潜める。

「おい、お前の席。かなり当たりなんじゃないか？」

「そうだね。前にでっかい壁が出来たせいで先生が何を書いているのか見えないよ」

「それなら安心しろ。俺は寝てるからな、壁は時間と共に下降していくぜ。で、そうじゃねーよ。俺が言ってるんのはお前の隣だよ、隣隣？ 僕は言われるままに窓と反対の席を見た。

誰も座っていない。教室内はまだ雑然としている。そんな中、互いに自分の席番号を言い合っている女生徒集団から一人、こちらに寄ってきた。

勝ち気そうな瞳。緩やかに曲がる眉。拗ねたように軽く上向く小鼻。触れば押し返してくるだろう頬。華奢な四肢に細く締まった腰。特に目が行くのは後頭部で結わえられ、冠状になった髪型だ。そして高校一年生にあるまじき巨乳！

ヴァーチャルの世界からこんにちわしてきたみたいな容姿のその生徒は僕の右隣に座った。

「あっ居眠り島地君じゃん。それに、はちくま伝説の三角君。宜しくね」

「おう」

「へ……あ、うん」

「それにしても二人はほんと仲が良いねー。クジ運まで結ばれてるし」

「だろー？」

軽く首を傾けながら微笑み掛けてくる女神に僕は見惚れる。絶大な誤解を全生徒に招いた島地の噂——まだ現在形——に感謝した。こんな噂でも流れない限り僕を知って貰える機会なんてなさそうだからだ。

澁川春海。

我がクラスの誇りであり、我が学年のアイドルである。

我が校の……がないのは、そこまでの境地に達していないからだ。だが、それには訳がある。何でも澁川がこの学校に編入してから、たった五ヶ月程しか経過していないのだ。そんな短時間で学年の話題を恣にする澁川は本来、学校を代表する器——主にルックスだが——の持ち主である事は疑いようもなく、恐らく夏を迎える頃には校外にその名を轟かせているに違いない。

澁川との初対面は最悪だった。

僕がまだ幽霊が何たるかを知らず、教室でノンに出会った時。幽霊の手足が僕を貫通する事に驚き、見えていない周囲にそれを訴え掛けた時。

僕の反応にドン引きの同級生の中、彼女一人がどうどうと僕に対する感想を述べたのである。たった一言、「君、面白いね」ではあるが。

その時の僕は全く面白くなかったはずなのだが。以来、澁川から僕は面白い奴として認識されているらしく度々話し掛けられるに至っている。嬉しいような困ったような。しかし、幽霊なんてのはそんな頻繁に出現するものじゃないらしい。ノンの一件以来、僕が幽霊と出会ったのは自宅ぐらいだ。

澁川は男女問わず人気がある。廊下で擦れ違う生徒はその美しさに振り返る、のではない。立ち竦み、見惚れるのだ。丁度、僕のように。

家庭事情は全く不明。人当たりの良い澁川だが自分の事に関しては中々喋らない。どうやら中等部の卒業式に保護者は参加しなかったらしい。式場は勿論、VRSでのログインも確認されてない。

学業の方は中の上と言ったところだ。意外と奮っていない——とは言え底辺レベルの僕に比べれば遙かにましだが——。本人は成績向上のために腐心しているらしく、そんな努力を重ねる澁川に心打たれるファンも多い。見兼ねた成績上位者が勉強につき合おうとしたが、その悉くを断ったと言う話まであり、その健気さに心打たれ更に信者が増えたと言う。

と、ここまでソースは島地。

情けない話、否、やるせない話。先月島地によって巻き込まれた乱闘騒ぎの噂のせいで、僕は高校生活のスタートを切り損ねた。

詰まるところ、はちくま最強説が出回った事で僕Ⅱ怖っという構図が出来てしまい、話し掛けるどころか目も合わせて貰えないような状況なのだ。

対する島地は収まるべきでないところに収まり、広範囲に渡るコミュニティを形成して様々な情報を仕入れてくる。入学時のインパクトはどこへ行ったのやら。

全く、癪に障る。島地が戦闘凶と知っているだけに尚更だ。

しかし、時、既に遅し。僕が誤解を解こうにも皆は頷きながら信じてくれないだろうし、島地を非難しようにもスポーツ刈り——島地の話だと椎原と言う、学校でも名のある人らしい——らを倒したのは誰なのかと言う考察に至られると非常に不味い。ちなみに誰か、と言えば勿論、我が家の非常識天狗だ。

だから僕は現状に甘んじ、日常から誤解を解くしかないのである。まあ、先日の体力テストで悲惨な結果を残したのでそんなに時間も掛からないはずだ。

さて、前、横、と来たらやはり後ろだ。

僕は上体を捻り——無論、澁川に失礼のないよう背を向けずに——後ろの女生徒に振り返った。

透き通った、それこそ中身が透けて見えそうな程の肌。否、むしろ

る血色を感じさせない白磁。完璧な均整を見せる全身からはどこか無機質な印象を受ける。その顔面を覆う程に前髪を伸ばした髪型を除いて。

黒シャッターこと芳沢絢女。

どのクラスにも必ず一人はいる地味な生徒。それも溢れ者同士で集まるタイプでもない。完全な独立タイプ。

その地味さ、と言うより負のイメージは折り紙つきで、『芳沢の居るところが隅っこになる』なんて言われている。確かにその通りで、先月は席がど真ん中にも関わらず上手い具合に誰からも話し掛けられていなかった。まるで置物だ。

他生徒からまともに目も合わせて貰えない僕にとって、一番会話をしている女生徒が実は芳沢である。

言葉数は多くない。と、言うより話したい事は沢山あるのに声として発したくないらしい。彼女曰く幼い頃に声音をからかわれてから人前で喋るのが怖い、と。確かに芳沢の声は風が通るだけのような掠れたものだ。

なら、どうして僕とは話せるのか？ と問い掛けたところ、返答は「私の声を聞いても何も反応しなかったから」だった。……これまで話す人全てから声音を指摘されていたのだろうか。中々、趣のある良い声だと思うのだけれども。

知識を蓄えるのが好きなようでいつも辞書を読んでいる。地味だけれど。学業もかなり良い。学年でトップテンを保っている。地味だけれど。その上スポーツも万能。地味だけれど。しかし、完璧超人という訳でもない。特に国語と応用問題が苦手と。勿論地味だけれど。

普段、僕と芳沢の会話は特に意味のない雑談で構成されていた。それでも僕にとって数少ない話し相手であり、貴重な存在だ。

「宜しく、芳沢さん」

「……うん、八角」

ちなみに芳沢は基本、誰でも呼び捨てする。敬称とかそんな概念

がないのか、新留を直接『新留』と呼ぶ問題生徒でもある。

僕に短い返事を残して手元への没頭に戻った芳沢を澁川が観察し始めた。芳沢の前髪シャッターが軽く揺れる。

「なに」

「何読んでるの、芳沢さん？」

「……」

もう一度シャッターが揺れたが芳沢は何も発さずに手元の分厚い辞書を上げて見せた。

「どうしてそんなもの読んでるの？」

「……」

「えーっと。確か、言葉を知らないと気持ちを表現出来ないから、だったよね？」

透かさず僕はお節介を焼く。芳沢は小さく頷いた。

正直、僕が言えた事ではないが芳沢が他の生徒と仲良くしているところなんて見た事ない。それどころか会話ですら。だから内心、勝手な心配をしている。

是非ともこの機会に我らがアイドル澁川春海嬢と交友を深めて戴きたい。そしてオマケで良いから僕も澁川と仲良く——なるんだっ！

「ふーん。芳沢さんも三角君も面白いね」

「えっ、お、面白いの？ 僕……」

やっぱり僕はそんな位置づけですか、そうですか。

「うん、面白いよ。三角君はみんなに見えない女の子が見えるし、可愛いのに喧嘩が強くて、でもこんなに人当たりのいい人でしょ。十分面白いじゃない？」

「う……」

反論し辛い。と言うよりも出来ない。

「島地君もそう思わない？」

話を振られた島地は返事をせずに、芳沢の黒いシャッターを凝視していた。否、舐めるように眺めていた。

「何度見ても思うのだ。あの下には絶世の美貌が隠されているに違

いない。見たら余りの美しさに男子諸君が失神するから、敢えて封印しているのだ。あれはメデウサか？　そう、まるでメデウサ。成程成程、実力と知恵を示さねばその美貌を独り占めする事も出来んと。否、しかし、俺の眼力を以てすれば透視出来るはず……嗚呼、しっかしそれをしてしまえば俺は失神して、きっと顔を拝む事なんて出来ないのだ。一体どうすれば――」

一人でぶつぶつ言う島地を前に澁川はニコニコして「島地君も面白ーい」と笑う。なんて優しいお方だろう。普通そこはドン引きするところなんですよ？

芳沢は完全無視。僕は苦笑した。

「島地を見てると本当に飽きないなあ」

スタート地点で盛大に転けた僕の高校生活だったが、何だかんだ僕のペースで楽しみが歩み寄ってきていた。

「05」潜ム者達・貳

駆動音一つしないリニアカプセルで急激な制動を感じる。乗客の足が僅かに飛び上がった。

一瞬、電灯が消え、乗客が疑問の声を上げる前に再び回復する。一拍遅れて訝しげな視線が飛び交う。しかし、中には既に慣れたと言わんばかり大仰に居ずまいを正す者もいた。

まだ地下都市への通学が一ヶ月弱の僕は勿論、こんな状況は初めての経験であり、狼狽を隠せなかった。

「何? ……停電?」

同乗する島地に同意を求めて問う。島地は首筋を軽く掻きながら口を開いた。

「停電、じゃあ……ないな。お前これ初めてか」

「うん」

時を置かずしてリニアカプセルが何事もなかったのように滑らかに動き出す。ブレーキパッドの解放と電導の僅かな起動音が響く。スピーカーから形式的な謝罪が流れた。

「まあ、原因不明って奴だ。『何か』が近くを通るとこうなるらしいぜ」

「何か? 何それ?」

「何なのか分からないから、何か、なんだよ。噂、ってか非公式の調査に因れば膨大な量のデータが電線の中を移動しているらしいぜ」

「データが移動って……」

僕は苦笑して見せた。まるで情報に意思でもあるような話じゃないか。しかも電線をデータが移動?

「ま、都市伝説みたいなものだ。どうせ科学的に考察すれば大した事じゃないんだろうさ」

「そう、だよな」

間もなく停止。リニアカプセルは最も高位置の終点に着いた。

同じカプセルポートで降りて直ぐ、暫し沈黙の後、島地が思い出したように話し出す。

「そう言えば八角は『メデウサ』って知ってるか？」

「めでうさ？　ギリシャ神話の？」

「それじゃなくて電腦世界での噂の方」

「ん？　聞いた事ないけど」

そうか、と言って島地は改札口へと歩き出す。ICパスをかざすと認証を示す電子音が鳴る。僕らは雑踏の中に踏み込んだ。

「噂の範疇を超えない話だ。何せ現実世界で見た人は一人もいないからな。電腦世界でも同様だ。と言うよりそれを見ると死ぬってのがそいつの特性らしいからな」

だからメデウサと名付けられた訳か。しかし、それだと疑問が残る。目撃した者は死ぬ事になる。では、誰がそんなものの存在に気づくのだろうか。

「ただでさえ目撃例があるはずなのに、どうしてそんなものの存在が噂になるの？」

「まあ焦るな。要はコンピュータの記録には残るんだ。ん？　違うな、正確には電腦世界の記録を更に別の媒体に記録したものが残ってるんだよ。オリジナルの方や電腦世界には跡形もない」

「跡形も、ない？」

「何者かがデータ、延いてはサーバーの履歴までクラッキングしてるんだろ？　何者か、が何者かは聞くなよ。むしろ教えて欲しいくらいだ」

地下鉄のホームに向け、歩くにつれて清掃ロボットや運搬ロボットが目立ち始めた。それに島地は眉間を顰めながらも話を続ける。

「俺、電腦の仕組みとかは余り詳しくはないんだが、要はメデウサはただのデータ、情報の塊でしかないらしい。記録上はな。だがウイルスやバグの類なんかじゃない。今のところ規則性は明らかになっていないし、そのデータを視神経で受容する事、それだけで被害者は死んでいる。こんなもの、前例がない。と、言うよりもあり得

ない。直接接続による事故ならまだしも、間接接続で死に至らしめる事なんて理論上無理な話じゃないか」

「死人が出るの？」

足を止めた。大事ではないか、それは。メディアで取り上げられていないとは、これ如何に。それとも僕が見落としているだけか？

「ニュースにもならないなんておかしいじゃん？」

「それも何者か、の仕業と考えた方が良いな。むしろ隠される事で益々、事態の重大さが浮き彫りになってる」

運搬ロボットが一機、こちらに向けてやってくる。自立型のそれはむしろ操り手のいない運搬車にしか見えない。通路の半分以上を占めるそれに僕らは道を譲る。

「プロバイダ側の欠陥だとして、その事実を隠しているのだとしたら……。まあ、あり得ない話だし、俺の予想は別なん——」

何の前触れもなく、擦れ違い掛けていた運搬ロボットが大きくなった。否、こちらに傾いたのだ。視界の片隅に踏み弾かれた飲料容器が映る。

中身の詰まっているであろう段ボール群が迫る。瞬間、目を見開く。そして僕の軀は驚愕の硬直を起こす前に動いていた。乾いた落下音が通路に響く。僕は降りかかる障害を全て避けきった。一拍置いて運搬ロボットが非常音声を再生し、周囲に協力を求める。

まさかこんな時に島地との訓練が奏功するとは。

僕は荷物の雨から逃れ、無事だ。しかし、島地の姿が見えない。否、崩れた段ボール箱の山から島地の足が見える。

「島地？ ……おいっ！ 大丈夫か？」

慌てて駆け寄る。

らしくない、大人しく下敷きになるなんてらしくないぞ。

ぴくりともしない島地を前に、背中からじわりと冷や汗が滲む。急いで積み重なる段ボールに手を掛ける。

途端、拍子抜けた。中身は乾燥食料品だ。重さは一箱当たり精々

一キログラム程度だ。

「心配させないでよ、島地」

直ぐに箱を退かすと島地は手を床に尻餅を突いた形で現れた。特に外傷はない。

僕は停止したまま行動不能になっているロボットの体勢を立て直す。島地は中々立ち上がらなかった。

「おい、島地？」

積み直していた手を止める。

島地の目は何も見ていない。どこも見ていない。それなのにその瞳には様々な感情が見て取れた。程なくそれが底なしの憎悪だと気づいた。眉間に深々と影が差す。

躊躇う自分の手を無視して島地の肩を揺らす。

「おいって！」

突如、島地から彩りが消えた。ゆらり、と立ち上がる島地は僕を視界に留めず、運搬ロボットだけを捉える。

「――ぶす、……潰す」

僕は二、三步下がったところで見ているしか出来なかった。

島地を止めなくては。そう思っても躰は動かなかった。何故なら僕は身を以てこいつの強さを知っている。半端な力や覚悟で止められるはずがない。一般常識的にやってはならない、と言う法規を履行するよう促す事を出来る気すらしない。

島地はほんの十秒足らずで運搬ロボットの電子機器部分を徹底破壊してしまった。スピーカーから断末魔の如く電子音が鳴り続く。

全ての感情を吐き出さんばかりに拳を叩きつける姿は異常にしか映らない。

言葉なき暴力。島地は悪態を吐かない代わりに、その感情を拳で叩きつける。

先月の喧嘩を楽しむ、あの島地とは違う。敢えて言うならば、その決定的な違いは『余裕』だ。今の島地は暴力に余裕がない。拳を動かす事のみ必死となっている。

やがて、言葉なき暴力は終わりを告げた。

島地が一息吐いたのと同時に通路の奥から人がやってくる。それで僕は我に返った。早くこの場を去るべきだ。

「島地、もうそんな事してないで早く行こう」

既に島地は赤く腫れた拳を振るうのを止め、一点を見つめたまま佇んでいた。周囲の状況を気にする事なく、普段通りに戻った顔をこちらに向ける。そして口を開いた。

「で、だ。さっきの続きだが、色々考えた結果――」

この状況、行為が知られ、身元まで明かされたなら最悪の場合、逮捕だ。こんな時に何言ってるんだ？

「――もしかして幽霊って電脳世界に入れるのか？」

どや顔で聞く島地にただただ呆れる。果たして本当に、目の前の男はたった今まで理不尽な暴力をロボットに振っていたのだろうか。

「君達！ 一体何をやっている！」

どこかの監視カメラで確認されていたのか。通路をやってきたのは警備員だ。島地の手首と正鞆を掴むと通路を駆ける。

島地は逃げる気がないのか、為されるがままでまともに走るつもりはないらしい。

ああっ！ ほんっとお前と一緒にいると飽きないよ。

「05」潜ム者達・参

「めでうさ？ ……さあ、聞いた事ないわね」

スナック・やんもいのママ・ジュリエシスは氷をくるんだ手拭いを準備しながらそう答えた。

「はい、謙致君。これで手を冷やして」

「あ、ありがとうございますっ」

受け取る島地は美女を前にした少年になっていた。口元がにやけている。ママの動きに視線を絡ませる様子は、見ているこちらも飽きない。

金髪、青の瞳、ずっと伸びた鼻筋。欧米女性を彷彿させる要素だが、不思議と異国性は感じられない。流暢な日本語がそう錯覚させるのだろうか。

目尻にある少々の皺がそこまで若くない事を告げるが、如何せん、整形技術の進んだ現在では容姿だけで年齢を予想するのは極めて難しい。年上に見えるだけで実は僕と殆ど年が離れていないのかも知れないし、実は母よりも年上なのかも知れない。

今日は元々、月一である『献上』の日だ。

四月に境川の神に庇護された身である僕が、その仕事を請け負っていた。と言っても、ただやんもいで肉を買い求め、祠に持って行くだけの簡単な事だ。契約の継続が名目だが、玄曰く、簡単に言えばご機嫌取りをしなくては神様も、何時僕に攻撃を加えるか分からないとの事。

本来、僕一人で行っていた事だが、いつも島地と別れる駅で『戦鬨さん』が暴発したために、流れでやんもいまで避難させた訳だ。ママはそんな僕らを快く迎え入れてくれた。まあ、僕は何度か顔を合わせているし、玄とも旧知のようだから追い出されはしないだろうと予想していた。

早速、島地とママの二人を互いに紹介し——ちなみにママの名がジュリエスだと、僕が知ったのはこの時である——、ママには島地が既に人あらざる者達の存在を認知している事を話し、島地にはこのスナックが妙な物も商売している事を説明した。

表向き、寂れ荒んだ旧市街の路地裏でひっそり客を待つスナック・やんもい。柔らかな照明が窓から漏れるこの店は周囲と比べれば特異だ。確かな精気が漏れているような癒しの力を感じる。その裏の顔は神人を相手に怪しげな物品を商いする万屋だ。

僕が見た事のある裏の商品は閉丸丹と肉だけだが、勝手なイメージだが店の奥からは河童の水掻きやら猫又の尻尾やら出てきそうである。

店はママが一人で切り盛りしている。裏の顔故に仕方のない事かも知れないし、案外、それがママの正体を暗示しているのかも知れない。初めてこの店に来た時、ママと我が家の天狗は旧知の間柄のようだった。

母のおつかいとして何度も顔を合わせている、とも考えられたが、僕らがここに引っ越してきたのはつい先月だ。その前は奈良の祖母の元にいた。奈良から愛知までおつかいに行っていたとは考えにくい。つまり、以前からおつかいとしてではなく、プライベートな知己だったと考えるのが妥当。

だから僕はママが妖の類なのでは、と考えている。てか多分そうだろう。

時折見せるママの艶めかしさには正直、魔性の女と言うだけでは足りない。母も年齢を感じさせない容姿しているが、それは幼さと言うべきか、年を重ねても少女性を失っていない容姿である。尤も精神年齢まで少女性を帯びているもんだから堪ったものではない。とにかく、ママはそういった『年齢を感じさせない』ではなく、『年齢がない』ように写るのだ。まるで、とある時点で時が止まったかのように。

で、本題。ここでママに質問。

「あの、ママさん」

「あら八君、ジュリで良いわよ」

「じゃあ……ジュリさん」

「さんもとって欲しいところだけど、何かしら？」

毎月通う——と、言ってもまだ二回目だが——この怪しげなスナックは僕の中にとって質問箱みたいなものだ。特に母や玄の説明が人外の者達について詳細に事欠く今、その期待は大きい。早速、『メデウサ』について質問したが成果なし。しかし、聞きたい事はまだある。

「幽霊って電腦世界に、その、入る事って出来るんですか……？」

「ええ」

「え」

あれ？

あっさりと即答された。視界の隅で島地がどや顔をする。

ママは夜の開店に備えてか、カウンターで作業をしていたが、手を止めて目を丸めた。

「あら、知らなかったの？」

「ええと、はい」

短く溜息を吐くとママはあそこの教育方針は間違っていると小さく毒突いた。

「確か八君の家には幽霊が何時でも居るんでしょう？ それから聞いたっていなかったの？」

ママの仰る通り、我が家には母の居るところなら何処でも幽霊がいる。否、居たと言うべきか。

僕の丹田の封印が解けてから、つまり幽霊を可視し、コミュニケーションが可能になってからと言うものの、靄としてあんなに頻繁に見ていた幽霊が姿を消した。避けられている気すらする。

見たのは一度きり。しかも会釈を交わしただけだ。うっかり普通の人と思ってそうしたのだが、よく考えれば我が家に客などあり得

ない。慌てて振り返ったがそこにはもう何も居なかった。と、僕が見た幽霊はそれだけである。

「実は僕、家の幽霊とまともに会話した事ないんです」

「どうして」

「その、全然会わなくて。避けられてるみたいです」

「そう。んー、まあそれが要するに電腦世界に行ってるって事だと思わ。どうして八君を避けてるのかは分からないけど」

そこで島地が割り込む。

「それで一体どうして幽霊は電腦世界に？ 否、そもそもどうやって行けるのですか？」

言葉を交わす事だけを目的としているようにしか思えない問いの連続に、ママは優しく微笑み掛けた。

「さあ、私は幽霊じゃないから分からないわねえ」

「ですよー」

島地はにこにこしているが僕は若干落胆だ。そう簡単に答えの見つけられる問いではない事を理解していたが、やはり島地の問いは僕にとっても気になる物だった。

「でも」

そこで青の瞳が僕を捉えた。

「予想は出来る、かな」

「本当ですか。是非聞かせて下さい！」

「僕も、知りたいです」

そうねえ、とママは腕を組んだ。

「先ずは始まりを話しましょうか」

「始まり？」

「幽霊が人間に接近を始めた頃よ。幽霊が妖や神人にしか見えない事はもう知ってるわよね？」

「はい」

「そう。幽霊は基本、人間には見えない。でも、その前提はある発明が覆しちゃったのよ」

発明、だって？　僕は思わず息を潜め、ママの言葉に耳を傾けた。
島地の表情も何時の間にか引き締まる。

「その発明が、写真機よ」

「写真機？」

「何が原理でそんな事が出来たのかは私も分からない。でも幽霊は写真機を媒介として撮影されるようになった。俗に心霊写真って言っていたやつね。光の悪戯とか、加工なんて言われた物も最初は確かに本当の幽霊だったのよ」

そこで島地が突っ込んだ。

「それでもどうせ加工したものがほとんどなんじゃないんですか？」
「んん、そうね。それから技術が進むと意図的に何かが写っているように出来る方法が沢山編み出されていったわ。でもそれより前の話よ、私の言っている心霊写真は。そして、軍事的で開発された電子機器、そしてネットワーク。それらが一般に普及される頃には幽霊はその活動基盤を電腦世界へと連なっていく『インターネット』へ延ばした。やっぱり原理は分からないわね、私は幽霊じゃないし。電腦世界と言う無限の世界への移転、それで心霊写真ブームは衰退しちゃった訳。加工技術が発展し過ぎちゃったし、本当の心霊写真も姿を消した。それから幽霊は専ら電腦世界でその存在を主張していく事になるわ。尤も、世間には故障だったり、バグだったり、ウイルスとして対処されちゃうけど――」

「ちょ、ちょっと待って下さい。少し話が突飛、と言うか。原理は幽霊しか分からないとして、――どうして幽霊は電腦世界に活動基盤を移したのですか？　その動機は？」

案の定、僕の頭はママの話しに追いつかなかった。「それも幽霊にしか分からない」と言われればそれまでだが、そう問わずにいらなかった。

「そうね、幾つか考えられるわ。でも、一言で済ますなら電腦世界は幽霊にとって『樂園』だった、ってところかしら」

「樂園？」

「幽霊がどんな存在か、二人ともある程度は把握してるわよね？」

「ええ、まあ」

「……はい」

幽霊。それは力ある者だけが忘れ遺していく儚き存在。

どんなに微弱な物だろうと丹田を持つ者ならば、誰しもその現象を発生させる可能性がある。死に際、生前の素懷を悔やみ切れない時に、丹田に宿る神通力が記憶の残滓と共に人格を形成し、幽霊として独立する。当人は既に死亡している上、扱う能力も変質するため、幽霊と生前の本人は全く別物と言っても過言ではない。記憶の蓄積や能力の度合いは生前の神通力の規模に因る。

存在出来る期間も神通力の量に比例し、彼らにとって消滅するまでに素懷を全うし遡界する事が最重要課題である。出来なかった場合、それは幽霊達が最も忌み嫌う末路だと言われる。

「電腦世界はね、んー、そうねえ。中々良い表現が見つけれないけれど、幽霊の時間を止めてくれるのよ。要は消滅までのタイムリミットが止まるの。……ああ、いいわよ、言わなくても。どうしてって聞きたいんでしょう？」

口を開き、声を発そうとしたところを制された。

「私はVRSを良く知らないけど、あれはデータを元に機械が感覚に働きかけてそれを受容して、肉体の反応をまたデータ化してコンピュータで処理して成り立っているのでしょうか？ それと近いかな。幽霊は自らをデータ化する事で電腦世界の住人となるの。するとデータの寿命は半永久だわ。コピーも出来る、記憶媒体に潜ませる事も出来る、何者かに全てを削除されない限り存在し続ける。達成が困難な素懷を持っていればいる程、電腦世界へ行こうと思うでしょうね。何より電腦世界は幽霊にとって安全だわ。彼らにとっての天敵の一つ、妖は思想的な意味で電腦世界を避けるからね」

安全を約束する樂園と延命。否、既に命のない幽霊の場合、延長

と言うべきか。

成る程、玄は幽霊が消える運命にある残り滓と言っていた。死んで尚も叶えたい願いのために存在する幽霊にとって、電腦世界は救済の国なのだ。

「それにしても、どうして幽霊は最初に写真に写ろうなんて思ったんだろう。電腦世界でだってひっそり素懷の為に行動すればいいのにコンピュータウイルスみたいな事を……」

「きつと、……私はここにいて、伝えたかったんじゃないかな」既に温くなっているであろう手拭いを握り締めたまま、島地が呟いた。

僕が誰ともなく発した問いに、島地が答えた事に驚いた。何時になく穏やかな眼差しになっているこの大男を凝視した。

「私はここに……」

「中には誰にも打ち明けていなかった素懷もあるだろう。誰もその故人が奮闘しているなんて顧みないだろう。そして誰もが故人として扱い、過去として捉えていくんだろう？ きつと、それが我慢出来ないんだ」

グラス磨きを再開していたママまでもその手を止めた。

「ど……どしたの？ らしくない」

僕が言うと、島地は今更気づいたかのように僕とママを見た。

「ちよ、え？ 俺、変な事言った？」

「別に変じゃないわよ。良く気づく子ね、って思っただけ」

自分で言った言葉を頭の中で反芻して、勝手に恥ずかしくなったのか。手拭いを振り回しながら立ち上がる。島地は無理矢理話題を転換しようと図った。

「それよりジュリさん歳はお幾つなんですか？ ネットワーク形成時の話って曾祖母ちゃんですか、昭和ですか、平成ですか？ てか初期の心霊写真話とかどれだけ先祖様なんですか？」

いやあ、それを女性に聞くのは駄目だろ。と、思いつつ僕は二百

歳とかのトンデモな答えを期待した。

「ひみつ」

ママは愉快そうに喉の奥を鳴らした。

「05」潜ム者達・肆

夕暮れの寂れたゴルフ場。今や誰も利用せず、誰からも存在を気づかれない場所。バンカーから生茂る雑草と対照的に荒れた芝生が目立つ。

最初に玄の翼で訪れたここは公共交通機関を用いても最後の徒歩を含め、約一時間半掛かる。この時間は帰宅時間だ。人の居ないような所に向かう電バスは僕以外に乗客がなかった。運行している電バスも旧式中の旧式で、垢の染みついた吊革やシートから長年の間に数多の客を乗せた事を窺わせた。

鎖を使って頑丈に封鎖された門をよじ登る。反対側に飛び降りるとカッターシャツに錆が茶色くこびりついた。溜め息交じりに叩きながら、外れの用水路に向かいそれに沿って遡る。

ここには既に以前訪れた妖の世界はない。

河童の出迎えも挑発的な獺もない。上流に行くにつれて用水路が清らかな小川になる事もないし、それに沿って現れた石灯籠の乱立する庭園もない。無数の鳥居と石段は忽然と姿を消し、不気味な林内もねぐらに帰ってきた鳥達の囀る雑木林になっていた。

ただ、苔生す古びた祠と近くの水溜りだけが健在だった。

前回――まあつまり庇護を認められた後の一回目――は余りの様変わりに驚き、祠のお札に問うた。中々返答が来ない事に若干の不安を抱いたが、暫くして眠そうな声が応えた。その時は忘れていたが妖は基本夜行性だ。夕方は僕らで言う早朝なのだから仕方がない。境川水族の頭、川の神・境様曰く、土着型の妖は定期的にその母体となる山や川を移動しながら生活している、と。

滞在場所に強力な呪や結界を幾ら施そうとも、活動の内容によっては人に目撃されてしまう。肉体を持ってしまった妖にとって人目に着く事は極力避けるべきである。そのため一所に留まる事はせず、

自分達の領地を転々と彷徨っているのだと言う。

また、この放浪スタイルは領地の保持にも一役買っている。つまるところ族挙げての見回りである。勿論、神ともあろう境様は何処にしようと領内への侵入を感じく事は可能だが、それは神通力を頼りにしての話である。侵入者が手練れだった場合、神通力を抑える事も丹田に封を施す事も可能なのだ。そうなった場合、発覚は遅れてしまう。だから、斥候――ここでは河童――を領内に放ち続け、また移動を続けるのである。

と、いった事情で現在、ここには何もいない。河童から刃を向けられないだけでしたが。

ただ祠に連絡手段としてのお札が中で漂う水盆が納められ、そして僕はそこに肉を奉納する。月一の献上なんてそれだけだ。

問題はその後である。

僕は徐に服を脱いだ。カッターシャツ、インナーと脱ぎ、最後にベルトを緩め、そこで一旦手を止める。周囲は至って静かだ。いるのは鳥くらい。意を決し、手にしたタオルで器用に局部を隠しながら一気にズボンとパンツをずり下ろした。

情けない位の白肌が露わになる。ただでさえわいせつ物陳列罪に問われそうな格好な上、その瘦身に気恥ずかしさが込上る。否、別に誰かが見ている訳ではないのでそんなに恥ずかしがる事もないのだが、しかし外気に肌が晒されるという、ただそれだけでも羞恥心は生まれるものである。

これでも島地との訓練で少しは引き締まったのだが、僕の貧弱な四肢は相も変わらず小枝のようだ。

もう一度周囲を確認して、僕は祠の横にある水溜りへ歩を進めた。片足だけを水面に触れさせた。そこまでの冷たさを感じなかった僕は思い切って片足を底まで入れた。

途端に全身が跳ねる。やっぱり冷たい！

しかしここは我慢しなければならぬ。両足を入れ、深みへと進

んでいく。徐々に上がる水位は脛、膝、太腿と移り、遂に股に……。
……息子が悲鳴を上げた。

耐えろ、耐えるんだあ！ 我が息子よ。

縮こまる息子を必死に励ましながら、ようやく一番深い所に着いた。

そして底に腰掛け、胡坐をかいた。その体勢なると丁度、水面から頭を出した形となり、ほぼ全身がすっぽり水溜りに包まれる。刺すような冷たさが全身を襲った。徐々に沈める過程をすつとぼしたお蔭でこれ以上ない程に粟立った。爽やかに駆け抜ける風が憎らしい。水面が微かに波立つと触れたりしなかったりする水が首元を嘗める。

目を閉じる。骨格だけで姿勢を保ち、全身の筋を脱力する。五感を捨て去るように、感覚を切り離そうと努力する。

温暖化で普段は暑い暑いと連呼し、地上に出た途端に汗が噴き出るような気候だが、そんなもの全てを無視する冷たさ。この水溜りは何処からか清水が滾々としているはずだ。常に溢れる水は泥が溜まり雑草の茂る用水路へ注がれている。

思うにこの祠、即ち境様の滞在地点はこのような支流を含む源流にあるのではないか、と考える。神と称する位なのだから源から下流を睥睨していても何ら不思議はない。

この光景を渋谷が見たら、「三角君、なにしているの？」と笑いを堪えながら首を傾げるだろう。

この光景を芳沢が見たら、「……服、着ないと……」と前髪シャッターを揺らして僕を引き上げるだろう。

この光景を島地が見たら、「涼しそうじゃねーか、八角！」とこいつも半裸で飛び込んでくるに違いない。

一般人として正しいのは渋谷と芳沢の反応だろう。

で、僕は一体何をしているのか。実のところ僕自身、良く分かっている。と、言うと言語弊があるが、水に浸かっているのだとしか

言いようがない。

これは境様の指示だ。封を会得する過程で必要な事、らしい。ただ、何で水に浸る事がそれに繋がるのか理解が及ばず、しかし逆らう訳にもいかず、今に至る。

少し前の話。

本来なら神人は丹田が封をされた状態で誕生すると玄から話があり、どうやら僕はそれがなく、封の仕方当然分からなかった。そこで玄は僕に封の必要性を説き、神通力を垂れ流している状態が如何に危険か話した。

最初に河童から襲撃を受けた事などが良い例らしい。垂れ流しの神通力はその場に自分がいる事を告げ、同時に意味もない力の提示は敵対行為に等しい。身を守る、周囲の妖と穏便な関係を保つ上で、本来は神通力なんて超常的な存在は隠匿するべきなのだ。

と、まあ。その他、多々の例を得意げに引き出す玄の話を他人事のように聞きながら、結局分かったのは今、僕が最優先すべき事は封の会得らしい。

現状として僕は閉丸丹を用いて一時的な封を施しているに過ぎない。この閉丸丹なる構成物質不明の代物は確かに便利と言えば便利なのだが、神通力の源である丹田という器官に到達するまでの間、内臓を散々にレイプするという暴虐的な小道具なのだ。その上効果も永久的ではなく、特に僕の場合、ちよつとした拍子で破壊してしまうらしく、頻繁にお腹を荒らされまわる羽目になるのだ。

どう考えても封の会得は僕にとっても必要な事であると判断し、喜んで玄の指示に承諾した。のだが、玄は境様のところへ通えと言いつつ出しゃがった。しかも毎日。てっきり玄が直々に何かを教えてくれるものだと考えていたために拍子抜けである。

以上の経緯で島地に対する訓練のみならず、封の会得も自分以外——しかも神様——に委託した玄は一体何をしているのか？ と疑

問を抱きつつ、僕は境様の指示通り水溜りの中に座っているのである。これを毎日行い、しかも偶に境様が見に来たりする。

「感心、感心」

老爺の声。どうやら今日はかなり運のいい日らしい。

前触れもなく、前置きもなく、物音一つしなければ気配もしない。境様は突然やってくる。

僕は当然驚いたが、目を開ける事も声を上げる事も姿勢を崩す事も許されない。そういう決まりだった。最初の頃こそ、突然の様子見に動揺し、その度お叱りを受けていたが、最近は流石に慣れた。

「ふむ。良く抑えておる。じゃが餓鬼よ、要らぬ雑念が多すぎやしないかえ？」

指摘に肩が揺れる。境様は読心術を使う。特に水に触れていたなら誤魔化しようがない。

「まあ、今のうちに平静を取り戻し、外界の遮断するが良い。日は暮れた。じきに使いがやって来るだろう。何時も通り、難が去るまでそこで無となり、己の流出を拒み続けるがいい」

境様の話がふっと途切れる時。次の瞬間にはそこには何もいない。はずである。

代わりと言ってはおかしいが、微かに感じ取れる気配が複数現れた。

「目標地点に到着。これより搜索を開始する」

「05」潜ム者達・伍

囁くような小声が聞こえる。同時に気配が散開したのを感じた。時折、かちやりかちやりと甲冑同士がぶつかり合う金属音が響く。

今日はどうかやら本物の水族を動員したらしい。即ち河童である。普段なら精々聴覚や精神に働きかける幻覚が主だが、最近は河童が動員される事が増加した。この様子だと封の会得に一步前進しているのかもしれない。

しかし、幾ら河童が水族の中で地位が低いとは言え、斥候を専門とする精鋭に僕のかくれんぼが通用するはずがない。そこで境様は大幅なハンデをつけた。この世に出現したばかりの河童、雛の新卒を目隠し状態で使うのだ。妖も誕生の様相は生物と違えども、初めからその能力が開花した状態ではない。つまり互いにとっての訓練である。

妖の価値観は厳しく、当然如く失敗した方には罰則が適応される。河童の練兵が搜索に失敗した場合、彼らは出世の道が閉ざされる。境川の下っ端兵卒として有事に尖兵として消えていくのである。その際に手柄を立てようとそれは彼らの上官のものとなり、彼らに賞賛の声が向けられる事はない。

そして僕が発覚された場合、その晩は水溜りの中で過ごす事なる。その他、献上の加増が発生する。河童の練兵に対し僕の方は優しいように見えるがそうとも言いきれない。献上に用いられる肉に問題がある。

やんもいで手に入れるこの塩漬けの肉。まじまじと見つめた事はないが、僕は人肉ではないかと読んでいる。どこかの部位をぶつ切りにした肉塊は黒々とした赤身を黄褐色の脂肪が包み、薄青紫に変色した皮に目立った毛穴は見当たらない。鶏は勿論、普通の豚や牛の肉には見えない、気がする。確信を持ってないのは僕が加工前の肉というものを見た事がないからだ。

否、僕だけじゃない。今時の日本人に屠殺現場を知る人間なんて
そういないのだ。地上では地方で細々と畜産を継続する農家、地下
では滅菌処理の為された屋内農園に従事する職員、しかも実際に処
理するのはロボットであり、やはり肉塊を知る日本人は希少だろう。
勝手なイメージで人肉とするこの塩漬けの肉は異常の値が付加さ
れている。中を見るな、と言われ手渡される茶封筒は何時だつてず
っしりと重い。見るなど言われて見たくなるのが人間ってもので、
今回中身を拝見すると総額二十万円もの金額だった。

この額は我が家における首吊り級の出費である。何故なら我が家
に明確な働き手などいないからである。いないはずなのに昔からぼ
んぼん金が口座にある不可思議家庭ではあったが毎月この額が出費
されるのは、家計の逼迫どころか異常事態である。そしてその額が
更に増えるという事は我が家の生活自体が成り立たなくなる可能性
が浮上する訳で、このかくれんぼは互いに自分の未来を毎日のよう
に賭けているだ。

ちなみに先日を含めこのかくれんぼは三戦中一勝二敗。

僕は最悪の親不孝者である。

そうこうしている内に茂みを掻き分ける音が接近しつつある。

目隠しされている河童は主に聴覚、嗅覚、触角、そして一番に厄
介な神通力を用いて僕を探す。現段階の僕では河童が一人でも水に
触ればピンチである。水と戯れ、水と同化し、水と共に生きる水族
にとって、そこから神通力を感じ取る事など造作もないのである。

ひたひたと湿った水掻きのある脚が落ち葉を踏む音がそこら中か
らする。あっちでひたひた、こっちでがさがさ、そこでちゃちゃら。
四方八方から聞こえる雑音に包囲されたように錯覚する。或いは既
にされているのかもしれない。動悸が激しくなる自分に気がつき、
僕は平静を取り戻そうと努める。

精神状態と丹田はリンクし易い。

閉丸丹で封がされているとは言え、僕が平静を失えば失う程、神

通力は漏れていく。漏れた神通力は周囲の力場に影響し、気の流れを変える。河童の湿った薄気味悪く光る皮膚はそんな機微を目聡く察知してしまう。

しかし、僕はつい先月まで普通の生活を送る少年なのだ。普段の生活に昂る心を鎮める事なんてなかったし、己を無にするなんて御伽話のような荒業を簡単に習得出来る程、器用でもない。

だが――。

音という音を耳に受け付けず、冷え切った四肢は死んだように震えを止め、呼吸で波紋を立てぬよう慎重に肺を収縮させると、少しずつではあるが僕一人だけの世界が感じられてきた。隠すのではない。妖と同じ、如何に周囲――大地の神通力――と同調出来るか、だ。世界に僕は一人で、僕は世界になる。

この世界に自分一人しか感じられなくなった時。前々回にその感覚を掴んだ時、僕は最も己を無にし、定められた時間内に見つかる事はなかった。

勝った――。

僕は勝利を確信した。

しかしその時、不意にかちかちと小気味良い音が林内に駆け巡った。嘴の音、河童の警戒音だ。よっぽど僕は己の確信に油断していたのだろうか、想定外の音に戸惑った。

「搜索対象の着物を発見」

冷え切ったはずの体温が一度上がった気がした。

途端に周囲の雑音が戻って来る。一所に河童は集合したようだ。

僕の正鞆を弄っているのかノートが散乱する音が聞こえた。

「着衣を捨てたのか？」

「肉体変化を操るのでは……森で木の葉を見つけるのは骨が折れる」

「まさか、報告では対象はろくに力も使えない出来損ないだぞ」

「報告が偽りとは考えんのか？　そもそもこの任務自体が仕組まれているのだぞ。境様が嘘を申しているかも知れん」

「不遜な物言い、見逃す訳にはいかぬが確かに一理ある。対象が神

通力を使えぬ確証は何処にもない」

「どちらにしろ周囲にいるに相違ない。さっさと見つけ出して縛り上げよう。儂は清水の中で用便を我慢して悶える奴を見下ろすのが楽しみなのだ」

「まあ待て、近くにいろのなら無駄な労費を費やす必要もあるまい。ここはお頭を使うのが得策ではないか」

「おつむだと？ ふん、我々はそもそもちっこい脳漿しか詰まっतरらん。そんな無きに等しい策などをひり出したところで何の変わりもないと思うがな」

「それではどうやら儂はぬしよりもちいとかし賢いのかも知れぬ。人間とはどのようなものか、知る限りの知識を使ってみよ」

金属音のような嗄れ声の中、聡い声音が異様を醸し出している。僕はその声に圧倒され、自信が流れ出すように委縮していった。

「着衣を脱ぐ、人間はそれを羞恥の行動と心得る。しかしそれを公然と行う事があるではないか」

寸の間、静寂が訪れる。

「沐浴か」

何故だろうか、一斉に河童が僕の方へ首を向ける光景が浮かんた。「如何にも。人間は着衣が濡れ、躰につく事を嫌う。即ち、対象は水に浸かって気配を消している。さあ、探せ」

微かな音を残して散開するのが分かった。

話がスムーズ過ぎる。河童の中でも偉才を輩出する事があるのか？今までこんな聡い河童などと遭遇した事はない。河童はもつと獐猛で貪欲で低能で残忍だ。低能過ぎる故、何者も殺しかねないのだ。未知との遭遇に僕は戦慄し、河童の性格を再確認した事で落胆した。ちやぶちやぶと水の跳ねる音。河童が一匹水溜りに入った。

しかし深みまでは進入しない。代わりに水を立てていた。無数の波紋が僕に襲い掛かる。襲撃する細波は僕の躰を嘗め回した後、周囲へ帰っていく。

「ぬしの言う通りだ。波が素直に帰って来ぬ。何か水中にあるぞ」

喜々とする声が跳ね回る。

いよいよ僕の動悸は水溜りを揺るがす程になった。

じゃぽん、と今度は繰り返し何か水溜りに突っ込まれる。底や石にぶつかって鈍い振動を水伝いに感じ、それが何なのか必死に考えぬよう努める。

まだ間に合う。河童は目視した訳じゃない。今、気配も神通力も消せれば潜む好機は幾らでもある。落ち着け、落ち着くんだ。

意思に反して動悸は収まらない。平静を取り戻そうとすれば尚、雑念が混じる。脱力していた肉体は強張る。束の間訪れていた無の世界は跡形もなくなり、敗北の旗が僕を覆い始めた。

そして遂に河童が僕を捉えた。

「かはっ」

呼吸が乱れる。

勢いよく棒状の物体が腹に突き込まれた。鈍痛が腹部に走った。形状で何となく想像出来たのは鞘か石突である。武装した河童に居場所が知られたのだ。

瞑想終了、訓練不成立、僕の敗退、ゲームセットだ。

僕は胸を詰まらせていた重たい空気をゆっくり諦めと共に吐き出した。

「これで、終わりだと思ったのか？」

不意に気配なき背後から声が囁く。

「な、なんだよ。早く縛れよ」

気丈に振る舞っても緊張が途切れた途端、凍える冷たさが戻ってくる。

首筋に何かが触れた。

冷え切った僕の軀には妙に生温かいそれが僕の喉仏を撫で回す。

「なあ、鬼の子。流石に分かってるよなあ。俺達はお前達が大っ嫌いなんだよ」

「そりゃもう殺して皮剥いで肉食んで吐き戻して踏みにじっても飽き足りないくらいにな」

「境様は神だ。時に敵ですら手を貸さねばならぬ。神の命令は絶対だ。それも我が主ときた」

何が、言いたいんだ。

「それなら、命令通り、僕の負けなんだから早く掟通りの罰則を与えればいいだろう」

「境様は絶対の存在だ。それに比べて我々は小粒中の小粒だ。失敗や誤りというものがある。否々、勿論任務を全うするのが最善。だが、我々にも『過失』ってものがある。そうだ、例えばうつかり抜けた刀が対象の頸部に当たってしまったたり、なあ」

感覚の鈍っている躰が更に一度、体温が低下した。

「ちよっ、まっ——」

河童の行動は僕に抵抗の表明すら許さなかった。

ぐっと首に当てられた後にその物体は消失する。

一拍置いた後、亀裂から熱が噴出した。こんなに体温はまだ保たれていたのかと言わんばかりに熱を帯びた血液が噴出した。

首から、僕の首から血が、熱が、神通力が、生命が、流れ出していく。代わりに僕の中に絶望が流入していく。

「……か……ぶはっ」

何で？ どうしてこんななってるんだ？ 死ぬのか？ 厭だ、まだ、死にたくない。僕何か間違えたのかよ——。

目を、開けてしまった。

途端に何もかもが消えた。河童は一匹残らず消え、視界には闇夜に沈む林と僕が波を立てる水溜りとぼんやり浮かび上がる祠だけだった。

飛沫を上げて首筋を撫で回す。噴き出す血どころか、切創すらない。

「幻覚にも打ち克てぬようでは話にならん」

肩で息をする僕に祠から冷たく呆れた老人の声が聞こえた。

「今宵はもうよい、帰れ餓鬼」
温い外気が拍子抜けた躰を解し溶かした。

「05」潜ム者達・陸

僕は服を着ると、逃げるようにゴルフ場を後にした。

外気が何とも言えないくらいに温く、そして僕を包んでくれた。しかし、僕は軀の芯まで凍えていた。

祠の水は恐らく十五度以下と思われる。そんな所に二時間以上浸かっていたのだ。軀を拭いても震えは一向は止まる事を知らなかった。

無人タクシー乗り場までの間、辺りは静かだった。時折、通る風に木々が騒めく程度である。街灯は少なく、陽が沈んだ事で見えるものも限られる。

冷え切った軀には温いはずの風も鋭いものに見える、全身が粟立つ。僕は咄嗟に首を撫で回した。幻覚とは言え、一度「死にゆく感覚」を味わったのだ。それは代え難い恐怖だった。何より幻覚の殺され方は有無を言わさぬ上に、呆気のないものだった。そんな死に方に恐怖した。

そんな感情に克てなかった自分を恥ずかしく思う僕はいない。どうしていれば良かったと言うのだ。

相手は『神』なのだ。僕に勝ち目がある訳がない。

神の持つ神通力は無尽蔵だ。否、厳密に言えば妖全てが無限の力を持つ。その源は地球であり、日々それと密接な関係にある土着の神とその眷属は消費した神通力を回復し易い。神通力が无尽蔵という事は、即ちそれだけ消費をしても問題ない、という事である。

そして、僕を惑わした幻覚。それは神の知識と膨大な神通力を練り込み、折り込み作られている。目を閉じた事により視覚に関して除外していたとしても、聴覚、嗅覚、触覚を乗っ取られていたようなものだ。視覚がないと人間という生き物は他の感覚に頼る事になり、より研ぎ澄まされる。そこにつけ込まれた。

勝ち目なんて端からないのだ。僕が強い弱いの問題ではない。境様が大人げないのだ。一介の、否、平均以下の神人たる僕に数多の妖を率いる神が力を行使する事自体おかしいのだ。

大体、玄の怠慢もおかしい。

本来なら玄が僕の世話を焼いているはずなのだ。もし指導されるとして、神と玄のどちらを選ぶかと聞かれれば、以前ならどちらも嫌だと答えただろう。しかし、今なら胸を張って玄だと言える。愚問だ。即答だ。迷う時すら惜しい。

確かに玄の分かり難い説明はうんざりだが、ないより遙かにましである。あの回り道した説明が懐かしい。そんなに時間が経った訳ではないけれど。

あれこれと自己弁明しながら、僕は震えていた。そしてようやくタクシー乗り場に到着する。

無人タクシーはその名の通り行き先を指定するだけで移動してくれる全自動の公共機関である。長距離を移動するのには向いておらず、細かい住所を目的地に入り組んだ路地を進むのに向いている。しかし、その料金の割高な面から利用客は減る一方で、乗った客の住所が一時的にも記録されるため、セキュリティの面からも輦蹙を買っている。そのため場所によっては既に姿を消しつつある乗り物だった。

手近なタクシーに乗り込む。さすがに軀は乾いていたが、髪からまだ水が滴っている。

震える手で必死に自宅の住所を入力し終えると暖房をつけ、シートに身を任せた。一気に脱力する。送風口から流れる黴臭い温風が僕を包む。

重たい瞼を下ろせばすぐに睡魔がやってくる。僕は睡眠の谷間へと引きずり込まれていった。

《目的地に、到着しました》

目的地到着を告げる電子音声で目を覚ます。

寝覚めは最悪だ。動くとき全身の節々が悲鳴を上げる。よほど熟睡していたらしい。料金を左手首の生徒証で払うと、僕はのっそりとタクシーから出た。

我が家を見上げる。どの部屋も真っ暗だ。時計が示す時刻は午前零時過ぎ。

「ただいま……」

解錠し、中に入る。何の人氣もない。リビングにおいても同じである。キッチンに至っては棚の食器は整然とし、母が荒らした様子も見受けられない。締めが緩かった蛇口から水が垂れる音がする。シンクに使った後の食器が放置されていた。

どうやら今日の母は大人しく自動調理器を使ってくれたようである。時間的に考えて既に就寝したのだろう。

躰が睡眠を求めている。手早くインスタントの乾麺を食すと、母の食器と共に片づけた。

風呂へと向かい熱めのシャワーを浴びる。バスタブの湯はすっかり冷めていて追い焚きする気にもならず、さっさと上がった。そのせいだろうか。程良い眠気が緩和され、少し目が覚めてしまった気がする。

布団に入ればすぐに眠れるだろうと高を括り、自室に向かう。廊下の奥、母の部屋の前に動く何かを見つけたのはその時だった。

母の部屋は廊下の突き当たりにある。そして僕の部屋の扉は廊下側へ引くものなので、開けっ放しにしていると遮蔽物となって母の部屋は見えなくなる。どうせすぐ寝るので廊下は消灯状態。

そして何故か、最後にこの廊下を通ったのは母のはずなのに部屋の扉は開け放たれていた。

「その君、待ちたまえ」

丁度、影になって見えない扉の後ろから『そいつ』は現れた。

後退した髪の毛の生え際。病人のように蒼白で脂っ気のない肌。不健康な皺を湛える目元。希望と光を失い、且つ血走った眼。意気消沈したかのように丸まった背中。枯れに枯れ切った中年男である。

ただ掠れていながら僅かに威厳を保つ低い声音だけが彼を維持してるかのようだ。影に溶け込んで見えるのは、存在感が稀薄だからか。

突然の呼びかけに一瞬、驚きを隠せず飛び上がった僕だったが、覚えのある感覚に逃げそうになる足を留めた。日常に溶け込む馴染みの感覚とあの幽霊少女に抱いた稀有な感覚。その二つが同時に沸き起こった。

「なななんでしょうか？」

僕の丹田が告げる。彼は幽霊だ。それも昔から母の近くにいる、お馴染み——とは言っても靄としての姿しか認知していなかったが——の取り巻きその一。

「何もそこまで動揺することもあるまい」

「あの、急に話し掛けるもんですから……。えと、初めまして」

「初めまして？」

「ええ。こうやって話すのは初めてじゃないですか」

「そうなのかい？」

「は？」

逆に質問された事に困惑する。目の前の中年幽霊もまた首を傾げている。

「だって僕、この春まであなた方のこと靄にしか見えてなかったんですよ」

「しばしば何事かを命じられていた記憶があるが」

「そりゃあ、母さん関係で頼み事はしたりしてましたよ」

伝言を頼んだり、起きてこない母を呼んで貰ったりと、確かに僕は度々靄に向かって話し掛けていた。

僕の言った事を理解してるとは思ってなかったけど……。

「その上、私の報告にも丁寧に対応していたではないか」

「え？　そうなんですか？」

「なんと、上の空の相づちとは冷たいことよ……」

「あっ。いや、その」

中年幽霊の存在が更に薄くなる。って幽霊の存在感は気持ちに左右されんのかよ！

しかし、頼み事をして戻ってきた靄に対し、適当に投げ掛けていた言葉で会話が成立していたとは驚きだ。否、と言うより僕はそんなに話し掛けた記憶なんてない。もしかしてら本当に、無意識の内に幽霊と会話していたのかも知れない。

後になって考えると正にホラー。幽霊と話しているこの時点で今更感が強いけど。

欠伸を噛み締める。正直眠い。中年幽霊には悪いけど、ここらで適当に切ってもう寝よう。

「まあ、あの。夜も更けてますし僕はそろそろ寝ますね」

「待たれよ」

一体なんでしょか。こちらら先程のシャワーで一旦離れた睡魔がまたやって来ているのだ。

寝ぼけ眼を擦り擦り訊ねる。

「なんでしょか」

「君は私がこんな意味のない話のために話し掛けたと思うのか？」

「はあ——」

幽霊が見える前から無意識に話してただけでも僕にとっては発見だったが、一体彼は何故——いやいや、眠い。

「わかりません」

「君の母上から言伝を承っておる」

「ことづて？」

「そう伝言だ」

伝言だったら直接言っても……それじゃあそもそも伝言の意味がないか——眠い。

「それで伝言とはなんでしょうか」

「うむ。『今後暫くはVRSの利用を自粛せよ』とのことだ」

「んー。なんですか」

「そこまでは聞いておらぬな」

島地がメデウサの噂を持ってきて、そしてこのタイミングで電腦世界へのアクセス自粛。……まさかね。

僅かだが頭が醒めた。

「母さんは他に何か言ってますでしたか？」

「特には——」

「では、あなたが急に僕の前に現れたことと関係があるのでは？」

「何故そう思う」

「そりゃ、靄の頃はあんなに頻繁に見ていたのに、僕が見えるようになった途端、あなた方は姿を消したんですから。緊急の伝言ならそもそも母さんが直接僕に言えばいい話ですし、でもこの件はあなたが姿を現してまで伝えなくてはならないときた」

「む」

「それにあなた方も電腦世界に行くことが出来るそうじゃないですか。これはいよいよ関連性がないと言う方が変です」

「むむっ」

何がむむっだ！

「君の母上の伝言ということに偽りはない」

目元の隈が一層深くなった中年幽霊は溜息を吐く仕草を見せた。

「私が姿を見せたことに関しては、まあ——電腦世界で問題が起きている、とだけ言っておこう」

「やっぱりその問題と母さんの伝言は関係しているんですね」

「そういうことになる」

「一体、何が起きているんですか」

「まあ、特に大したことはない」

「その割りにあなたはあっちに行かないんですね」

「むむむ」

何がむむむだ！

いやはやどうして——眠い。

「とにかく、伝言は受け取りました。あくまでも自粛、ですね」
「そうなるな、あくまで自粛。絶対ではあるまい。しかし——」

一旦言葉を切った中年幽霊は目付きを改め言った。

「――くれぐれも気をつけなさい」

影に溶け込みゆく中年幽霊を横目に名前を聞いていない事を思った。

「あの」

「む、なんだね？」

「そう言えばお名前を聞いてなかったなあと思って。僕の名前は分かりますよね」

中年幽霊はフツと微笑んだ。残念な事にその微笑みもやはり枯れている。出汁の抜けた煮干しが崩れたような顔だ。

「勿論だ、八角君。私は松元だ」

「お休みなさい、松元さん」

再び微笑みを返した松元は丸めた背中を伸ばすことなく母の部屋の壁をすり抜けて行ってしまった。

「ふわああんむ。寝よう」

・
・
・

眠いまま話をしていたからなのだろうか？

翌朝、伝言の内容は電腦世界へのアクセスを自粛する事を覚えていても、その重要性に関してはさっぱり抜け落ちていた。

「05」潜ム者達・漆

どうしてこんな事になったのか。

つい先程まで島地と共に利用していた仮想空間は虚無と化した。上もなければ下もなく、領域を定める壁もない。際限ない闇が広がっていて、直ぐ隣に居る島地だけが確認出来た。

「おいっ！ 芳沢、どうなっているんだ」

島地は現実世界で見物しているはずの芳沢に呼び掛ける。

《……わからない。モニターにはerrorとしか》

何とか通信は生きているようだ。芳沢の妙に冷静な掠れ声が耳元に聞こえる。そう、耳元で聞こえるのだ。ヘッドギアに備え付けられたインカムから音声が発せられているのだ。

それなのに何故、『外せ』ない？ 何故、強制終了のボタンが『押せ』ない？ 僕は『そう』しているはずなのに。

仮想空間の僕が行う動作が現実世界にリンクしていない？ 否、そうではない。現実世界の僕の脳が発した伝達が全て仮想空間に引き込まれ、閉じ込められているのだ。

本来、VRSとは間接的に神経伝達を機械が感知し、また逆に刺激を与える事で成り立つ。しかし末端にまで入出力機器を装着しているようでは現実世界での動き——利用前後の端末操作など外部から操作を必要とする場合の動作——を阻害する。指一本一本に機器を装着しているようでは、例えば仮想空間内で滑らかな動作を再現出来たとして、現実世界では障害になる。

そのため、入出力機器は基本的に服の上から手足の付け根に装着するバンドタイプだ。肉体を仲介とする神経への負担が最も低い簡易タイプ。負担が低いという事は神経伝達の干渉も少ないはずなのだ。腕に「動け」と脳が命令して、意識的に現実と仮想空間を区別する事が出来るのだ。出来るはずなのだ。

しかし、今現在、僕と島地は現実からほぼ切り離され、仮想空間に閉じ込められている。それだけじゃない。意識、視界、聴覚、触覚、その他機器を着けている感覚全てがVRSに固定されている。辛うじて残る現実世界との繋がりにはVRS経由の通信のみだ。これも何時途絶えるか……。

これは故障か？ 否、ありえない。

そうならないための『間接接続』なのだ。こんな事態、直接神経に端子を打ち込みでもしなければ成立しえない。だからこそ安心安全の間接接続が世に普及したのだ。

どうしてこんな事になったのか。

僕が再び自問した時。同時に僕と島地は闇に蠢く何かを視認した。

《ゲストさんがログインしました》

機械的な案内音声だけが頭に響いた。

——三時間前。放課後の教室。

窓枠のパネルに映される風景は暗雲から降り注ぐ雨が地面を叩いていた。風景は地上の天気に対応している。今は丁度スコールらしい。ご丁寧な蛙の声まで雨音と共に再生されていた。

「八角、今日暇だろ。バーセン行こうぜ」

大男・島地とバーセンに行つてする事。近頃は専ら『訓練』である。少々飽き飽きしている。

と言うか、昨夜の松元の伝言は「VRSの利用を自粛せよ」との事。

「あー、それがさあ、当ぶ——」

当分は訓練もなしだろう。その旨を伝えようとしたところ、我ら

のアイドルこと澁川春海が割り込んできた。

「なにになに？ 二人だけで行くななんて冷たい」

「え」

「おっ、一緒に澁川も行くか？」

「いくいく！ テスト明けだしパーっと遊ぼうよ」

「えっ？」

ありがたきお言葉！ ……がっ！ しかし、どうしたものか。

「実はさあ、僕、母さんから当分は——」

「せっかくだから芳沢さんも行こうよ」

僕の言葉は華麗にスルー。澁川は僕越しに芳沢を誘った。

芳沢は愛読書を閉じると身動きせずに机を見つめていた。激しい葛藤があったのか一分程そのままの後に発した言葉は。

「……うん」

快諾かいっ。

「で、八角も行くんだろ？ 早く下校の準備しろよ」

「えっ？ えーっと……」

困った。

このメンバーで遊びに行くなんて初めてだし、何より澁川がいる。これは、絶対対に外したくない。

だが、しかし今の電脳世界は危険……。厳密には、VRSは電脳世界とは異なる。が、VRSは電脳世界のネットワークの一端だ。メデウサが侵入する恐れがあるからこそ、母は警告を残したのだと思われる。

メデウサの危険性は未知数。否、噂が本当ならば非常に危険だ。死人が出ているとなると、用心に越した事はないのだ。

「やっぱ僕は——」

「うわあ、このメンバーで遊ぶの初めてじゃない？ ちょっと楽しみ」

天使の微笑みが僕に向けられる。

しかし、僕は……用心しないと、……もしもって事もあるし——。

芳沢と目が合った。正確には前髪越しに。

「……行こう」

僕は姿なき力に屈服したようなものだった。

それから僕らは最寄りの娯楽街へと移動した。

階層として娯楽街が所属するのは諸業区。和製英語Outer
derからO区とも呼ばれる。諸業区は地上に残された国民が自由
に行き来出来る、最深地点である。そういう意味ではむしろ地上と
地下の境界であるはずなのだが、外側らしい。
ボーダー
アウトサイド

都市伝説が真実ならば、その由来は核シェルターとしての防壁が
それより下からあるから、というものがある。確かに諸業区から居
住区へのアクセスは地上とのそれと比べて異常に少ない。

娯楽街は学校と同じ所属ではあるが、最上層である諸業区は広い
学校が含まれる公共施設は広大な立体面積を誇り、O-3からO-
5まで擁する。娯楽街はO-2にあった。

娯楽街は空がない。様々なエンターテインメントの揃うこの空間は
ネオンが目立つよう、演出されている。中でも僕らの年代に人気な
のが映画、スポーツなど多目的に利用できるバーセナーヴァーチ
ャルゲームセンター。

VRを使用し、リアルな体験をする事が出来るこれは地下の利
用者が特に多いと聞く。閉鎖的な地下世界において疑似体験の発展
は望まれるものであり、人気を博するのも当然の結果だった。地下
の人間はよりリアルに進化し続ける仮想空間と電脳世界で十分とな
り、地上の光を忘れつつある。しかし、それを憂う者は地下都市に
一人もいない。

近年では直接神経と入出力装置を接続する事で電脳世界に潜入す
る試みもあるらしい。
スニーク

BMI―ブレインマシンインターフェース―である。既に裏
では違法に行われているとも言われ、人間が現実を捨てる日が来る
のもそう遠くはないのかも知れない。

と、いう訳でバーセンに到着した僕ら一行。

カウンターでログイン手続きをしようという時、芳沢だけが観覧ルームの手続きをしていた。不思議に思った、というより拍子抜けた僕は訊ねた。

「え？ 芳沢さん遊ばないの？」

「……うん。親父に禁止されているから」

お、親父って……。

「それなら言ってくれば、別のところにしたんだがなあ」

島地が申し訳なさそうに首を掻いた。そこで澁川が不思議そうに首を傾げる。

「別っていつでも他に遊ぶ場所なんかないでしょう？」

「上に行けば普通のゲームセンターもあるよ」

「なにになに？ 三角君レトロゲーム好きなの？」

「レ、レトっ……」

何という事だ！ 地下世界の住人は普通のゲームセンターを『レトロ』なんて呼ぶのか？ きっとプリクラの良さを知らないに違いない！ そうに違いない！

「澁川さん、今から僕がそのレトロの素晴らしさを教えますっ！」

「はいはい長くなりそうだからまた今度ね。で、芳沢はほんとに見ているだけで良いんだな？」

島地にあっさり流された。

芳沢はコクッと小さく頷くと、一人観覧ルームへ行ってしまった。

「あーあ、私、芳沢さんとタッグ組みたかったのに」

肩を落としながら澁川は割り振られた個室へ向かう。

「え、なんで？」

「知らないの？ 芳沢さん四月の体力テスト、オールS+だったんだよ」

「Sプラっ——」

「俺より上じゃん……」

言わずとも僕だって到底及ばない。一番成績の良かったもので判定区分はBだった。

「人って見た目じゃわからないね」

渋谷は笑いながら個室に消える。

「芳沢さんが見てるって言うてくれた事に感謝しよう……」

「ああ。もしスポーツでもしたら俺達男子の面目丸潰れだ」

人数も端数となってしまったので、僕らは三人でオンラインスポーツやRPGをした。これが面白かった。よくよく考えれば、普段する『訓練』はシミュレーション。僕はバーセンでゲームをした事などなかったのだ。

《時刻十八時となりました。十八歳未満でご利用のお客様はログアウトをお願いします》

アナウンスが流れる。僕の興奮は高校生が退去すべき時間になっても冷め止まなかった。

「じゃあ、私は門限あるからこの辺で抜けるね。早く帰らないと補導されちゃうよ」

さすが渋谷川、品行正しい。

娯楽街にあるのはバーセンだけじゃない。電腦世界にアクセス出来るネットカフェやカジノ。そして風俗など、入り組んだこの区画は犯罪の温床となっており、警察、公安も取り締り切れていないのが現状である。そのため、未成年は十八時以降の立ち入りが禁じられているのだ。

渋谷のアバターがノイズと共に消え、視界の隅に彼女のログアウトが表示された。

「おい、お前、そんなにはまったのか？」

島地が呆れて訊ねる。僕は遭遇したモンスターを一人でせつせと倒し、経験値が入った事を確認した。

「よしっ、またレベルアップ！ いやあ、バーセンのRPGってこんなに楽しいんだな」

マジで楽しい。これは最高だ。今日はあの技を習得するまで帰れそうにない。ってか、今後、バーセンに訓練しに来たら、一時間はやろう。

「てか八角、お前このゲームした事ないのか？」

「したことがあるよ。家庭用で」

「……今時家庭用って、まじかよ」

島地は溜め息を吐いた。そんなところまで再現されているところが憎い。

「おい、芳沢。まだ見てんだろ？ もう帰っていいぞ。こいつ多分、あと二時間は居座るつもりだ」

《……いい》

芳沢は静かに返答する。

「いいって、言ってもなあ」

「島地！ この森のモンスターは大概倒したぞ。次行こう、次」

「んあああ！ もう俺、面倒臭くなってたぞ」

楽しいんだからしかたない。

そう、答えようと思った瞬間、である。

全てがフェードアウトしていった。全てが、である。木々の切れ間から漏れていた日差しも、樹齢想像つかぬ巨木達も、僕の全体重を支えていた湿った大地も、全部。

全てが闇に吞まれた。それは身に纏っていた甲冑や武器にも関係なく及んだ。マネキンのようなアバターがそこにはあった。

足腰が立たない。地のない平面に僕はへたり込んだ。

「なっ。どうなってんだ」

背後から島地の狼狽した声が聞こえた。島地だけは無事なようだ。しかし、それ以外に光点一つ存在しない。

暗黒の中、僕と大男の二人。心細さは微塵もなかったが、不安という色が僕の心を染め上げていった。

「05」潜ム者達・捌

・ ・ ・

闇より現れし巨悪。

否、それを見た刹那、僕の丹田はむしろこれは怨嗟だと告げる。そう、強制終了も叶わないこの状況下に現れたのは予想もしなかった、途轍もない強大な暗黒の感情だった。

「なんだ？ なにがいる、そこに。お前も見えるか」

「み、見える」

島地の声は普段からは想像もつかない程の焦りが聞いて取れた。

「なんなんだ、あれは！ 故障か？ コンピュータウイルスか？

……そんな訳ない、よな」

何となく分かる。否、明確に分かる。本能が教えてくれる、丹田が教えてくれる。

これは、こいつは幽霊に間違いない。

その朧気な存在感は幽霊特有のものだ。ただ、それは今まで出会った幽霊の中で最も膨大で、そして容易く闇に紛れる程に隠微だ。

闇に蠢く闇。陽炎の如く揺らめく姿がその存在を控えめに主張する。ともすれば見失いそうなそれは、徐に近づいてくる。それは存在が巨大化しているようにも錯覚させ、僕らを威圧する。

生物的な眼二つがある事で、どこが頭部なのか判断出来た。充血し、ぎよろぎよろと忙しなく動くそれは獲物を探す捕食者のそれとは異なり、いつそ気の狂った追跡者と言った方が的を得た表現となるだろう。

とにかく、視認する事は出来ても、その全体像を掴む事は困難だ。表情も見えなければ、何か危険分子を孕んでいるのか、相手の情報

は手に入らないのだ。

あれは、『メデウサ』なのだろうか。母の忠告に従わなかった事を今更ながら後悔する。しかし、この幽霊をメデウサだと断定するには僕は知らない事が多過ぎる。

また僕の無知が自身を貶める結果となっている。

そもそも、危険な幽霊ってどう危険なんだ？

何をしてくるのだ？

あの幽霊がメデウサだと仮定して、一体どうやって僕らの視神経に刺激を与えるのだ？

下手をすれば、既にその姿を目にしている時点で僕らの命は無きに等しいのではないか？

まあ、少なくとも敵意剥き出しのあの目から言って友好的な感じは全く見受けられない。迂闊に動かず、様子を見た方が良いのかもしれない。

「おい、お前あれをなんだと見る？」

少し落ち着いた島地が冷静に分析を求める。

「多分、幽霊。だと思う」

「やっぱりか。まさかメデウサだ、なんて事はないよな？ 話が出来過ぎだぜ、噂を」

した次の日に遭遇だなんて」

「それはまだ、ていうかメデウサかどうか判断する事が僕には出来ない」

「どちらにしろ、俺らには抵抗する手段がない。なんで真っ裸なんだ？」

「知らないよ」

島地の言う通り、僕らは抵抗する手段がない。幽霊の出現する僅か前に闇の出現と共に仮想空間の全ての設置物、装備、漏れなく消え去った。今の僕らは被服すらないマネキンアバターだ。

無論、強制終了はおろか入出力機器の着脱もままならない。

「サーバ管理のハッカー部隊が来るまで逃げ回るしかないか……。」

芳沢、外はどうなっている？」

《……もう連絡した》

「仕事が速くてありがたいよ」

「どのくらいで着きそう？」

《……わからない。中は危険、多分外から来る》

つまり電脳伝いに直接ここに来るのは危険なのだろう。

《……来る》

「は？」

滑る眼光。蠢く闇の中の闇。

瞬いた次の瞬間には僕らに向けて暗黒の憎悪が飛び掛かっていた。その眼光がまるで矛のように伸びる。

黒き矛。

身の毛が逆立つ。『あれ』に触れたら終わりだ。丹田が疼いた。

そして――、壁が現れた。

僕と島地はそこで一旦、思考停止したと思う。急に壁が、左右上下、見えぬ果てまで続くコンクリート製の巨壁が現れた。

それが僕らの命を繋ぎ止めてくれる防壁だと理解して、ようやく

僕らは顔を青褪めた。

「おいおい、今の何だよ？ あいつ何しようとした」

「わかんないけど、ヤバいのはわかった。それにしてもこの壁……」

「ああ。なんとか助かった、みたいだな」

《……まだ。これは時間稼ぎ》

島地に倣って僕は壁に触れた。乾いた重厚な感触を期待したけれど、すかさずかした発砲スチロールのような感触だ。

「お前か、芳沢」

確信を含んだ声で島地が訊いたが返事はない。

「今、どこにいるの？」

《……マスタールーム》

息を呑んだ。つまり、この壁は芳沢が即席で形成したのだ。

「でも、どうやって……」

推測ではあるが、マスタールームの端末も使えるはずがない。仮想空間がこんな状況で、モニターにはエラーが表示されている状態でどういじったというのだ？

「これ、使っただろ」

島地の裸マネキンが何もない左手首を示した。それだけで何が言いたいかは理解した。

我が校の生徒は誰でも装着している多目的携帯端末機――通称、生徒証。IDやパスワード、様々な個人情報^{アプリ}を包括する事が出来、勿論、連絡手段にもなるし、様々な機能をダウンロードする事だって出来る。そしてPCとしての機能も当然の如く付与されている。僕はただ単純に、有り得ないと思った。閉鎖的な仮想空間とは言え、この短時間に携帯端末程度のハードウェアでこれだけ巨大な壁を形成したのだ。

一体、芳沢は何者なんだ？

「武器もあったらありがたいんだけどな」

それなのに島地はこれが当然の事のように抜かしやがって……。

《……もうやっている。まずは逃げて》

「どこに」

ここは設定された設置物が何もない。空っぽの仮想空間だ。右なければ左なく、上もなければ下もない。

「よく考えろ。なんのために壁があるんだよ」

そうか。言われてみれば、壁から離れればいいのか。

僕らは互いに無言で頷くと壁から遠ざかるように駆けだした。

《……あれはメデウサ》

僕は足を止めた。

「え？」

《……ゲストとして侵入した手口、直後の経過が被害サーバのメデウサに関する記録と合致する》

「まじかよ……」

やはり。

だが、どうしてそんな事を芳沢が知っている？

「どっ、どうしてそれを？」

《……噂に興味があって、調べていた》

「だからって管理サーバの情報をどうして――」

「八角、詳しい事は後にしよう。あれがメデウサだと分かった以上、知っている芳沢に任せた方がいい」

「それは……」

……その通りだ。

僕らだけではどうしようもない。なによりこの状況でメデウサに
関する情報を持っているのは芳沢だけで、仮想空間をいじれるのも
芳沢だけなのだ。

「芳沢、指示を」

《……壁から離れて、出来るだけ時間を稼いで》

「了解、行くぞ八角」

「うん」

床のない空間を駆ける、というのはとても不思議な動作だと思っ
た。

なにせ踏み締めるものがないのだ。次の一步を出せばそのまま落
下するのでは、と錯覚しそうになる。錯覚はするが、やはり目に見
えぬ平面に支えられる。足を動かす度にそんな事を考えるが、人間
なかなか適応してくれるものではない。

考えないのが一番、そう言い聞かして前を向く。

走っている。全力で、息も切らす程ひたすらに。

しかし、どこへ？ 僕は今、どこへ向かっているのだろう。

進行方向の視界は全て闇。

振り返れば確かに一面の巨壁が垂直に存在する。足下に目を移せ
ば、果てまで伸びる壁のせいでどれ程の距離を駆けたのかも定か
でない。

音はほぼ無音と言っても良い。反響もしない。僕の息づかいがそ

のほとんどを占め、島地は疲れを見せない。偶に溜息のような長い息を垂れ流すくらいである。

相変わらずの体力だ。こんな事態、誰だって初めてなら普通は動悸で呼吸が速くなるのではないのか？

やはり島地はどこことなく場慣れしている。それがどのような場数なのか、島地の裏側を知る由は今現在ない。

到底、僕では敵うまい。敵う可能性のある次元ですらない気がする。

それは心配無用の信頼を抱かせてくれる。しかし、同時に羨望と微量の嫉妬を意味していた。

僕はいつまで経ってもこいつには追いつけない。

横目で島地を見ながら、内心そんな事を考えていると前方に異物が現れた。

二振りの両刃の剣。

これで少なくとも抵抗は体を為す。希望を求めて駆け寄る。

僕と島地は互いに頷くと無装飾な柄に手をやった。刃を調べると所々に刃毀れやばりが目についた。やはり、即席となれば正確な再現は難しい。

手持ちの装備はこれのみ、か……。

《……ごめんなさい。今はこれが限界》

「そんな、何かあるだけでも心強いよ」

《……本当は改竄能力も付加したかった》

やはり丹田が疎むように、メデウサはそこまでしなくてはならない程の危険な相手なのか。

「そっそれでも丸腰よりはましだよ。それに芳沢が構築した防壁ならハッカー部隊が来るまで保つでしょ。なあ、島地——」

「いや、そうでもなさそうだ」

島地は壁の方を見ていた。否、凝視して目が離せなかったと言わべきだ。

《……突破される》

何が、とは愚問だろう。

巨壁に亀裂が走る。派手な音は全くしない。剥離したコンクリート片は音を発てる間もなく消失する。その巨大さ故に幾ら駆けても離れたように見えない防壁は正に今、破られんとしていた。

メデウサは完全に壁を破壊する事はなかった。不完全に穿たれた隙間から、漆黒の感情が染み出る。

這いつくばるように。舌なめずりするように。睨めつけるように。途端、僕は『それ』に釘付けになった。否応なしに。

恐怖ではない。ではないと思う。

僕の感情はまだ余裕がある。近くに見えるのはメデウサの巨大さ故であって、距離はかなりある。先程のような目にも留まらぬ攻撃は脅威だが、まさかこんな所まで届くまい。

それだというのに僕の躰、アバターは釘付けにされた。

そう。仮想空間（こころ）の本体であるアバターが釘付けにされた。僕の意思通りに動作しようとしてない。

それは丁度、夢の中に酷似している。自分の視点なはずなのにまるで誰かの意思に沿って行動し、そしてともすればまるで自分の第三者の視点で見つめるような、あの感覚である。

急激に視界に闇が迫る。それは近づいているのか定かではないが、僕にの視界が闇に支配されそうになる事は一目瞭然だ。

これは、本当に現実の事なのか？ 夢落ちってやつか？

なあんだ、それだったら少しばかり惜しい。この夢の結末を迎える事が出来ないのだから。

「馬鹿野郎！」

横殴りの衝撃。跳躍した島地が僕の腰を蹴り飛ばした。

尻をついた眼前、つまり先程まで立ち竦んでいた僕の頭があった空間を黒の矛が通過した。今更になって背筋が粟立つ。四肢の自由が戻っていた。

「メデウサの話を書れたのか?!」

島地が駆け寄りながら叱咤する。僕は助け起こされた。

忘れるはずもない。

メデウサの被害者は視神経経由の中樞破壊によって死んでいる。つまり一連の被害が電腦利用中だった事を加味すれば、VRS内では目に向けて何らかのアクションを起こす事が予想出来る。先程、目の前を通り過ぎていった収束されし闇は、あれこそがメデウサの脅威なのだ。

もし的中していたなら、その負の神通力がVRS経由でヘッドギアに伝導され、視界ゴーグル部位から放出されたそれは僕の眼球、そして脳へと侵入し、容易く破壊していた事だろう。

その答えに至り、今更ながら身震いする。

「あれを凝視しているようじゃ呑み込まれる。あくまでも直視しないで立ち回るんだ」

「そんな事言ったって、ここは現実^{リアル}じゃない。再現される情報も限られてる環境なのにあれの気配を読むのは無理だよ！」

「流れを読むんだよ、流れ」

「流れって何だよ？」

「何って……情報の流れ？」

「はあ？」

そうこう言っている内に第二波が訪れる。視界の隅で黒い矛が島地へと伸長する。今度のターゲットは彼のようなのだ。

島地はその攻撃を見る事なく避けて見せる、という有言実行を当然の事のようにやって退けた。しかも、擦れ違いざまの矛を下から斬り上げた。

矛がその切断面から暗黒を振り撒いて宙を舞う。

てっきり斬撃はメデウサのその臍気な見た目からすり抜けるものだろうと思っていた。事実、神人は幽霊を見る事は出来ても、触れる事は適わない。幽霊が神通力そのものだから、それが当然だ。だから仮想空間でもそんなものだと言っていたのだ。

それは見事に裏切られた。

幽霊は電腦世界において実体化する。否、実体は存在しないのだ

から、この場合は電腦世界で具現化する、と言った方が適切なのかも知れない。それは電腦世界において幽霊を攻撃出来る事を意味している。

つまり、この状況を打開、或いは時間稼ぎする手段として『メデウサと戦う』という選択肢が残っているのだ。

「攻撃が当たるとして、問題はどうかやって相手を見ずに戦うか、かあ……」

攻撃を受けた事でメデウサは執拗に島地を狙っている。僕は少し余裕があった。

島地の言う「情報の流れを読む」という方法が全く想像つかない。あの男はこの仮想空間がどう見えてるといいうのだ？

急激な底冷えが襲い掛かった。僕は初めそれが何か理解出来ず、ようやく本能の赴くままに任せた直後。

下方から黒の矛が突き上げられた。避けるのに遅れる。足に激痛が走った。VRSの設定は痛覚を切っているはずなのである。

「うがあっ！」

一度、倒れ伏したが直ぐに立ち上がる。恐怖が僕を奮い立たせた。マネキンアバターの足に切創が走る。血が、流れている。恐らく仮想空間こちらだけの事と考えたい。

防壁以外、この空間は基本的に闇が占めている。それを忘れていた。

闇が闇に紛れるのは容易い。防壁を背景にメデウサを視認するのは容易だが、それ以外は極めて難しい。今、僕は正にどこからくるかもわからない攻撃に脅える事となった。

《……八角、右から来る！》

「ええ？」

突然の警告。対応する前に右側頭部に衝撃。そのまま今度は床に左側頭部を打ち付ける。

「つく——」

息は止まらなかった。しかし、ただひたすら痛い。痛いなんてモ
ンじゃない。

僕は側頭部を摩り摩り起き上がると、足を縛れさせながら島地の
元へ駆けた。

もし、あと少し右を向くのが速ければ黒の矛は僕の眼球に直撃し
ていただろう。

「戦い」にならない。一方的過ぎる。情報の流れなんて読めない
し、芳沢の通信はタイムラグが発生して僕では警告だけでメデウサ
の攻撃を予想するには力不足。

要するに――

「島地い、たったすけてくれよお」

他力本願ではない。立派な救援要請である。僕より苛烈な攻撃に
晒されている島地に、だが。

「ちょ、何とか出来ねえのかよ？　メデウサはどんどん近づいてん
だぞ。さすがの俺もこの状態でお前の世話なんか出来ねえよ」

「そんな事言わないでさあ」

今の僕は痛みと恐怖を前にきつと涙目だろう。

「芳沢あ！　まだなのか、ハッカー部隊は」

《……まだ来ない》

返答は無情だ。

「くそっ、どうしろってんだ」

その時、黒の矛が遂に島地を捉えた。身を振って避けたために急
所は外れたが、目に見えて動きが鈍る。好機と言わんばかりに足狙
いのラッシュが襲い掛かる。

島地は膝を突いた。

自然と体が動いた。防壁がバックで視認出来る矛だけでも、と僕
は剣を振るった。

「島地！」

《……謙致立って》

「くそっ、くそっ、くそっ。……俺に力があれば」

それは違うよ、島地。お前は十分な、類い稀な程の力も能力も持っている。

足を引っ張っている僕が悪い。情報の流れを読めない僕が悪い。五感が戦闘に特化していない僕が悪い。研ぎ澄まされた反射が出来ない僕が悪い。

何が神人だ。何が鬼だ。何が神通力だ。聞こえだけでろくに有効活用出来た例がない。完全に名前負けじゃないか。

——力があれば。その言葉は僕のものだ。僕に向けられるべきで、僕が呟くべきなのだ。

「僕に、力さえあれば……」

奮闘虚しく、軽くあしらうように僕も膝を突かされた。

暗黒の手足が僕と島地の自由を奪う。今度こそ得意の殺し方をお見舞いするために。僕らを締め上げる。関節という関節が悲鳴を上げる。抵抗してもビクともしない。

既に遠いのか近いのかさえ分からない、メデウサの目が笑った気がした。

《……二人とも！》

芳沢の通信が遠い。

「くそっ、これで終わりかよ」

らしくもなく島地がうな垂れている。

「どうして——」

最後の足掻き、と口を開いた。

「どうして、元は同じ人間なのにこんなことするんだよ！？」

返事は勿論なかった。

代わりに案内音声が響く。

《ゲストさんがログインしました》

メデウサの眼がぎよろりと上方を見る。

普段より上擦った芳沢の声が聞こえてくる。

《……そんな、この経路は電脳伝い……？》

新たなゲストさんの入室が僕らにとって良い知らせなのか、悪い知らせなのか。僕には皆目見当がつかなかった。

「05」潜ム者達・玖

《……この型番、私よりも前の――》

滅多に聞けない焦りと混乱を含んだ芳沢の声。

未だ四肢の戒めは緩む気配はないが、暗黒の巨霊は攻撃の手を止めた。

目の動きだけで判断した。こいつ、上を見上げてやがる。

何を見ているのか、何者がこの閉鎖された空間に介入してきたのか。自然と僕らの視線も上へと移る。

「アバター……か？」

「た、多分。でも、どうやって」

疑念の声が上がる。

視線の先。現在の僕らと同じマネキン状態のアバター。距離感の掴めないこの空間で位置を定めるのは難しいが、メデウサの遙か頭上にそれは静止していた。

メデウサの血走った眼が細くなる。口がないのににやけているようだ。邪悪な薄ら笑い。

「やって来た、やって来た。リーク通りにノコノコと。運良く今度は二人目もやって来た」

再び背筋が粟立つ、凍り付く。一言一言が脳を貫く。この世の悲鳴を全てかき集めたような声を発したのは紛れもなくメデウサだった。

しゃ、喋れたのか……。

「匂う、匂うぞ。あああああ、あああああ。あの匂いだ。神通力の匂いだ。鬼の匂いだ」

匂い？ 匂いだと？

耳を塞ぎたい。だが塞ぎようにも両手は動かせない。僕は眉を歪めながら見上げる。アバターは身動きしない。

「早う来い。来い。直ぐ来い。お前も私の一部となるがいい。なる

のだ」

メデウサが告げる。慢心の声だった。

「随分探したのよ。でもあなたにくれてやる情けはもうないわ」

応じる声は音声変換されている。メデウサはせせら笑った。

「情けなどいらぬ。私が欲しいのはその神通力だ。寄越せ。力を寄越せ」

「そんなに欲しいもの？　こんな力、集めてどうするの？」

裸のアバターは首を傾げて問う。その仕草に見覚えがある気がした。

「塵も積もれば山となる。更に力を。怒り、憎しみ、嫉み妬み、苦しむ。それが私だ。寄越せ。だから寄越せ。私を寄越せ」

アバターの反応は薄い。僕と島地は固唾を吞んで見守った。

「……無駄な自己紹介。僅かでも情けを掛けたのが間違いだったよ
うね」

「浮遊するアバターがその指先に口付けする。
解」^{かい}

唱えられる力の解放。異形の変現。肘から指先が高温の金属のようになりと溶け下がる。しかし、直後には鈍色の鉄刃が現れた。

同時に、僕は震えた。全身が、手足が、指の先まで。そして丹田が競々と震えた。震え上がった。逃げ出したくなる程に。

アバターが神通力を持っている事はまるで分からなかった。幽霊相手だからといって専門の救援が来るはずもない。幽霊の存在が社会的に認知されていないのだから当然だ。だから、メデウサが口を利いた事よりその内容——突然現れた介入者が丹田を所持している——の方に驚いた。

その上、この神人と思しきアバターは途轍もない力の持ち主だ。それ位は分かる。物質的ではなく、超常的に潰されそうだ。

「この力。これ程の力。私になる力。これ程とは、畏か。畏だ」

「受け止められるのかしら？」

威圧を感じた。狙われている訳でもないのに、この空間に存在す

るだけで圧倒された。僕だけではない。メデウサも同様に、明らかに萎縮している。

「寄越せ。寄越せ。罨ごと呑み込む」

先に動いたのはメデウサだった。黒の矛が襲い掛かる。一本、二本……十七本数えたところで諦めたが、とにかく無数に、一直線にアバターを目指す。

アバターも動いた。消えた。少なくとも僕にはそう見えた。しかし消えた訳ではない。ただ『慣性』を無視した速度で落下していたのだ。否、最初に浮遊していた時点で慣性も糞もない。ここは仮想空間。常識だって歪められる世界だ。普段の感覚のままである僕があのアバターの動きに追いつけないのだ。

瞬く間に降りてくるアバター。目線がほぼ同じ高さになる。

焦ったようにメデウサは動いた。上昇していった黒の矛は消滅し、至近まで迫るアバターに向けて更に矛を量産する。それも遅れていた。

射出され、意思があるかのように伸びる頃にはもう擦れ違っている。

速い。速すぎる。黒の矛はまるで意味がなかった。アバターはたちどころに距離を詰め、触れるように舞うように接敵する。

解体が始まった。

刃先で触れたように見えれば直後に長大な切れ間が放たれる。刃を打ちつけたかと思えば衝撃でメデウサの一部が剥離する。

攻撃を繰り返しながらもアバターの速さが劣る事はない。攻撃はあくまで軽く、穏やかに、撫でるように。それでもその破壊力は計り知れず。挙げ句の果てにメデウサはアバターに向けて放った黒の矛を自身に突き立てる始末。

「あの動き――」

島地が眉間に浅い皺を寄せつつ一言吐く。そこには圧倒的な力を感じた。前にした畏怖も羨望もない。ただ疑惑のみがあった。芳沢といえどメデウサが喋りだしてから一言も発さない。

そして僕は当然のように繰り広げられる奇異な力を前に驚愕し、恐れ、納得した。

そう、神通力とはこうあるべきなのだ。超常的な存在を前に怯む事なく、むしろ圧倒する力。それは秘められた非日常を飛び出し、日常でも豊かな生活の糧とする。そして日常を守るため、敵を撃滅する。否、そもそも前提条件として敵も出来ない程の圧倒的な示威力を持つ、日常を非日常から守る非日常。それが神に通じる力なのだ。

欲しい。僕も欲しい。力が欲しい。圧倒する力。特別な力。せめて周りの足を引っ張らないような力が欲しい。

アバターとメデウサの力量の差は歴然だった。既にメデウサは原形を留めていない。初めから原型と言える確固たる形容はなかったが、目に見えて『小さく』なった。正に切って切って切り刻んだ結果と言えよう。

恐怖、嫉妬、怒り、あらゆる負の感情を名乗ったメデウサの眼が今、恐怖に凍り付いていた。

「嫌だ。いやだいやだいやだいやだいやだいやだ——」

壊れたようなメデウサの声が仮想空間を支配する。メデウサは二つの眼と一抱えの闇だけとなっていた。抵抗すら叶わない。そんなメデウサにアバターは歩を進めた。

「消えなさい」

「——まだだ。まだ素懷は全う出来ていない。助けてくれ。遡界したい、消さないで。消さないで下さい」

低く低く伏せる闇。震える目。哀願する人のそれとまるで変わりが無い。

と、そこで僕の中に恐怖は既になかった。むしろその生々しく人間らしいメデウサに情けの感情すら覚えていた。

ひれ伏すメデウサと僕ら、一体何が違うというのだ？ メデウサは幽霊だ。そう。根本となっている人格は、つまり生前は人間だっ

ただ。遡界する事が幸せであり、素懷の全うを目指すものなのだ。殺人は罪だが、逆に考えれば殺しもやむを得ない素懷だっておかしくない。そして、電脳世界は幽霊にとって永遠の樂園だ。第三の選択肢を勧める事だって出来る。無理に消す必要だっではないのではないか？ 死んでもなお、死を恐れる時間とはどれ程の恐怖を伴うのか。

それを考えていたら、勝手に口が開いた。

「そこら辺で、止めて下さい！」

振り上げられた刃が止まる。

「助けて貰ってる身でこんな事言うのはおかしいって分かってます。こいつが悪いのも分かってます。でも、こいつを消す事だけが解決の方法ではないんじゃないですか？」

刃が下ろされた。アバターがこちらを振り向く。

何を思いこちらを見たのか分からない。ただ、メデウサを消す事に関しては思い留まってくれたのだと受け取った。

その時、だった。

「バぁ——」

メデウサが動いた。黒の矛を構える。そしてアバターはその場で一回転した。

「——カ、かはっ」

そしてメデウサの抵抗は叶わなかった。僕の情けも叶わなかった。アバターが止めを下したのだ。やはり見えなかった。

「消えるってのか、消えるのか。消えたくな——」

メデウサが崩壊していく。人格の消えた仮想空間の幽霊なんてただのデータだ。意味のない文字列となって消えていく。何もない空間へと消えていく。

同時に視界の果てから色彩豊かな景色が戻ってくる。メッセージ欄にサーバ側の形式謝罪文が流れ始める。ゲームのステータスが表示される。システムが再起動したのだ。

アバターがまた振り返った。

「幽霊にだってどうしようもない程に狂ったのがいる。覚えておきなさい」

VR Sが 完全に立ち上がった頃には、近くに微動だにしないマネキンだけが残った。

その後、僕らは間もなく到着したハッカー部隊に保護された。

サーバ管理の企業側からしてみれば、この件は内密にしておきたかったらしい。病院に搬送される事もなく、精神汚染の簡易チェックを受けただけで精神的なケアは終わった。

また、「この案件に関し一切言外しない」との誓約書を書かされた。勿論、初めは拒んだが、島地から言う通りにするよう諭された。海外に基盤を広げる企業は最早、小国家権力に匹敵する力を持っていた。

見返りとしてこの企業が管理する全てのバーセンの無料利用証一年分を貰ったのでまあ、いいとしよう。

ようやく解放されてから、何時の間にか芳沢の姿が消えていた事に気づいた。念のために生徒証で確認すると、ハッカー部隊の到着を見届けた後、直ぐにその場を離れたとの事。救出されてから二時間以上拘束されていたのは確かだが少し冷たい。

賢明と言えば賢明だが。

「それにしてもあのアバター何だったのかな……？」

「神人なんだよな？」

先程から眉間に皺を寄せて難しそうな顔を崩さない島地。

「多分ね。てか、確実だと思う」

僕らを助けてくれたあのアバターについては何の説明も為されなかった。企業秘密として当然と言えば当然の対応だ。

ただ、偶然聞いた、現場部長らしき人物の「これでは契約の延長

を見当しなくては……」との言葉から推測するに雇われクラッカーなのかも知れない。

「神人の八角に一つ聞きたい」

「なに」

「神人ってのは普通にあんな動きが出来るのか？」

「まさか。あんなの改竄能力^{チート}つけても無理でしょ。って言っても僕は母さん以外に神人を知らないけど」

「そうか、そうだよな」

思い出すだけでも僕の心は高揚感に満たされる。圧倒的な力。どうしたら僕もあなれるのだろう。

しかし難しい顔しながら、やっぱり島地もあの強さを見せつけられて気になっていたのか。

「じゃあやっぱあれば——、直接なんかな」

「え？」

直、接だと？

「直接接続だよ。裏じゃ実験段階なんだろう？」

電腦世界への直接接続。簡潔に言えば神経とコンピュータを直接プラグでぶち込んでしまえ、という方法だ。BCI——ブレインコンピュータインターフェース——換電換波を行う機器を用いる事によって、伝導伝達の手速で情報を脳と電腦世界を行き交わせる事が出来る。しかし、それは大きなリスクが伴い、安全性の面で間接接続が至高とされる。そもそも実用の域に至っていないとの話だし、脳への負担や逆に脳の活動にコンピュータが処理しきれないといった問題が挙げられる。

「まあ、所詮は噂、かあ」

「そうだよ。もし成功しているんだったら国際ニュースものでしょ。まさか、な……。僕の無知はそこまで酷くないはずだ。」

[05] 潜ム者達・玖（後書き）

《ストックが溜まるまで当分放置します》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0820k/>

はちくま～巣立～

2010年11月28日00時10分発行